中央公論

本號目次



（ヒマラヤ山間土人の奇術）

N. 170

中央公論



第十八年
第四號

相撲を排す

畸形の男子、兩々相對して蠻力を鬪はす、集り觀る者堵の如く喝采の聲百雷の落つるに似たり、縉紳之に赴き下賤之に走せ、才子之が爲にのぼせ上り美人そが爲に有頂天となる、都下數萬の民唯是れ之を觀ることの他に後れんことを恐れ晴天十日、一日も缺かさず之を見つゝくるを以て無上の榮譽となす、身親しくは唯の一度も之を觀たることなきやから迄が、新聞雜誌の記事によりて辛うじて得たる智識をふりまはして通を衒ひ、僅に一二度某々の角力取の顏を招魂社の寄附相撲位にて見知りたる者が左ながら此等と十年の親交もあるかの如く吹聽してまはつて以て其の鼻をうごめかす、――斯の如き奇怪の風俗を誇り得る國、是れマタベルランドに非ず、フイージーアイランドに非ず、却つて是れ東洋の先進國、一名大戰勝國、又の名大文明國、大大大大日本帝國なりと知らざる乎。

世に愚人の多き、獨り日本のみならんや、日本に於て愚なること豈に敢て相撲に限らんや、而れども凡そ天下の愚なるもの、我國人が相撲に狂奔するばかり愚なるは稀也、夫れ相撲は蠻力を角するものゝみ、猫の引つかき合ひと何の撰ぶ所ぞや、其の間美の見るべきなく伎の稱すべきあるに非ず、唯體の大にして力の強きもの勝つ、是のみ、荒岩逆鉾兩國の徒の如き偶ま其の伎の力にすぐれて誇るべきものなきに非ずと雖も、彼等到底大砲常陸山梅ケ谷の敵に非ず、時ありて彼等其の伎によりて他の力を壓することなきに非ずと雖も、こは殆ど相撲史中に特筆大書すべき例外中の例外にして數百番の勝負中一二だも之あるを保すべからず、相

撲の主眼は筋力なり、體力なり、全く自然の力なり、自然の力を鬪はして其の勝敗を觀る、一颷の暴風吹き荒れて家屋森林の壞倒するを觀んと其の趣は相同じ、之を以て快といはゞ則ち快、唯是れ畢竟小兒の快とすべき所のみ、吾人も其の昔小學に通へる頃、歸途古寺の墓原に入りて數ある石塔を打倒して快哉を唱へたることはありしなり。

畢竟小兒の快とすべき所のみ、此の如きことに耽湎する者、若し無智の賤民か若しくは馬鹿貴族のみならしめば余輩豈強て之を咎めんや、然れども東洋の先進國にして大戰勝國たり大文明國なる大々日本帝國に於ては、此の如き兒戲に耽湎し、惑溺し、狂亂する者獨り如上の下劣なる者のみに限らずして、其の中には冷靜なるべき學者先生もあるなり、堂々たる一國の國士もあるなり、一世の高德あり、一代の名士も亦あるなり、驚いて而して呆れざるを得ざるに非ずや。

殊に怪むらくは、平生天下の先進を以て自ら任ずる新聞記者輩が、此の愚なる一國の傾向を矯正せんことには力を致さんともせずして、却つてそを奬勵し助長すべき記事を揭げて只管世俗に阿ねらんとすることを、彼の唯俗に媚びて自ら利するを知つて他を知らざる某新聞の如きが、平生人間の精緻なる頭腦の作用によつて出でたる文學上の產物に對しては半欄の批評紹介をだに惜みながら、相撲のことゝしいへば、勝負附に點取表に立合の模樣に行司の談話に殆ど一面乃至二面の全體を割くを惜まざるは其の平生の爲す所より見て、今改めて之を怪むを須ひず、然れども編輯の體裁日本第一を以て誇れる某新聞が、其の狹少なる紙面に不釣合なる場塞げの記事と繪畫とを以て數欄を埋むるが如き又平生高潔謹厚常に時流に拔づる某新聞が左ながら天下分目の戰爭にてもあるかの如くがらにもなき軍談口調を以て事も長々と立合の模樣を揭ぐるが如きに至つては、吾人平生此の種の新聞紙を愛讀する者に於て如何ぞ其の陋態に驚かざるを得んや。

相撲の勝負を觀ること、果して快か快ならざるかと問ふ者あらば、吾人と雖も素より其の快を否む者に非ず、

されども之と同時に吾人は曰はんとす、斯の如き快樂は極めて幼稚なる、粗野なる、原始的なる快樂なり、斷じて耽けるべきものに非ずと、夫れ今の日本は相撲を其の眞價以上に過重せり、相撲を過重するの結果、角力取自身をまで過重せり、見よ彼等は角力番附の發表を新內閣の組織よりも細かに注意するに非ずや、見よ、彼等は角力の勝負に對して我等當面の大問題を議すべき帝國議會の議決に對するよりも大なる利害の念を挾むに非ずや、見よ、彼等は角力取の尤なる者を視るに戰國時代の大勇士の如くするに非ずや、余輩は嘗て常陸山の席上揮毫に感泣したる某記者あるを記せり、谷の音の稽古場に於ける戲言に隨喜したる某新聞あるを記せり、甚しきに至つては幕下三四段の小角力が何かの次手に相語りて打興じたる何等相撲と關係なき物語を一言一句のこさず紙上に揭げて得々たりし大新聞ありしことを明に記臆せり、相撲過重の弊も此に至つて極まりといふべし、

吾人常に思ふ、相撲の榮ゆるは亡國の徵也と、蓋し相撲の如き、單純にして明白にして活潑にしてやゝ男らしき遊戲の流行するは必ず社會の他の一面に譎詐行はれ陰險行はれ柔弱行はれて、知らず識らず之に飽ける結果、本能的に一種の慰藉を此の明々白々なる猫の引つかき合ひに求めんとするものなればなり、暗きに在る者の明を欲し、寒きに在る者の暖を欲するは人の情、吾人は淫蕩放恣を極めたる羅馬帝政の末路に、殺伐なるアンフィテアトル內の演伎が如何に市民に歡迎せられしかを見て、省みて私かに我邦の前途に危ぶむ所なくんばあらず、嗚呼今の日本には相撲よりも今少し文明的にして美術的にして精緻にして巧妙なる遊戲の天下に誇るに足るべきものなき乎。

思へばあさましの至也、

(摩天鶴)

氣品の涵養に就て

(一) 國民の讀書嫌ひ

吾國の士人は學問ギラヒ、讀書ギラヒと稱すべきもの

なり。

吾學生の學校生活は世界各國の學生に比し、長きに失すと云はれながら其の一度學校を出で去るや、爾後亦書籍と親しむもの甚だ少し、况んや高尚の學理を研究し微細の探尋に從事するものゝ如きおや寥々として眞に人なしと稱すべし、

蓋し吾靑年の學校に入る、殆んど全く所謂立身出世の資を作らんが爲にして單に學問其物の爲に學校に入るものは百万の學生の多き果して幾人かある、學問の蘊奥を究むるを以て目的となすべき帝國大學の學生すらその多數の期するところは深奥なる學問の研究に非ずして肩書を得資格を得、依て以て多額の月給に有り付かんとするに在るなり。

是の如き目的を以て小學中學大學に入る、彼等が一日も早く學校を卒業して書物を讀むの必要なきに至らんことをのみ之れ望むは必然の道理にして學校を出て後ち更に小六ヶ敷書籍を讀み面倒クサキ理屈を探求せんとするが如きは餘程の變物にあらずば能はざる事となり居るなり。

之を海外の士人に見るに、その學校時代に在ては敢て異能の學生にてもあらざりしものが卒業の後ち數年を歷る間に學問識見又呉下の阿蒙に非ざるもの往々にして其人に乏しからず、蓋し彼等は官吏となるも政治家となるも、又實業家となるも終生書籍を愛好し、研究的精神を失はず、塵事紛擾の間に靈的乾坤を拓開し、氣品の涵養を怠らざらんとするなり、而るに吾國の士人曾ては高等の學校を卒業し成績の優等を以て同輩の間に誇耀されたりと云ふものすら五年十年を歷て書香次第に散じ悉じ俗氣滿々として人をして寧ろ其一度び學生たりしや否やをすら怪しましむるものあり。

新文明の新教育を受けたりといふものにして已に是の如し、その他の人物に於ておや、巨万の財産を以て紳士紳豪と云はるゝものにても家に一個の圖書室すら有せざるもの比々として皆爾らざるなし、彼等の多數が待合酒樓なくしては一日も快樂を享受するの道なからんとすると共に堂々たる首府の中心に一個の圖書館な

き何等の不自由を感ずるを知らず、彼等に高尙の道念なく、深遠の理想なく、肚皮底唯酒と色と權勢と利慾とのみある素より恠しむに足らず。

吾人曾て先輩の士と話す、彼の言に曰ふ、多くの人に接するに時代愈若くして其人愈趣味氣韵の見るべきものなし、今日五六十歳の老人を四十前後の人に比するに趣味の饒多なる概して同日の論に非ず、而して四十前後の人と云へども尙多少趣味の認むべきなきに非ず、爾れども明治時代の人物に至ては高等の敎育を受けたるものにても殆んど沒趣味の徒のみなりといふべしと、讀書キライ、學問キライの社會に趣味の墮落し氣韵の減少し來るは免る能はざる所なり、今日堂々たる學者の會合にすら學問文章の談論を聞くは殆んど稀なりといふ、以て社會風俗の傾向を卜すべし。

政治家の徒らに一知半解の愚論を振り廻はす、世の耳目とも云ふべき新聞記者輩が往々にして抱腹絕倒すべき誤謬を傳へて得々たる、學者連の空腹虛膓にして學問議論の世を警覺するに足るものなき悉く皆この讀書せず學問せざるの弊なり、而して是の如き社會に於て應に生ずべきの出來事は何ぞや、腐敗のみ墮落のみ、咄々吾人亦こゝに近事を數ふるに忍びざるなり。

されば吾人は世の憂世慨俗の士に訴へて大にかゝる風尙を一變し國民の品位氣格を上進するに勉めざる可らざる也。

(二) 素町人

封建武士は商人を呼で素町人と云へり蓋し是れ商業其物を侮蔑したるに出でたるは論なしと云へども吾國の商人が由來高尙の道念なく遠大の希望なく、只管一身の私利私益に汲々とし天下國家の何たるを知らざるに依て之を稱したるものなるべし。

大小貴賤は其の人の力量と地位とに在り職業に依て人を下上するは封建時代の迷妄なり、爾れども吾國今日の商人は大と云はず小と云はず果して素町人の籍を脫したりしや否や尙是れ一種の疑問なり。

彼の片々たる小商人の徒は且らく論ぜず、今日富豪紳

商と云はるゝものに就て見るに彼等の社會的地位は增、上昇し三井岩崎の如き已に華族に列し男爵を授けられ其の他未だ是の如く迄に至ざるものも尚多額納税者として或は貴族院議員に撰ばれ或は市町村の名譽職に擧けられ、滔々たる世の卑屈者流をして三拜九拜措く能はざらしむるものあるにもかゝはらず彼等の品位品格は維新已前に比し甚だ加へざるものゝ如し。

彼等の多數は要するに文明の何たるを知らず依然として舊時の典型を墨守し無學無識、紳士としての儀禮をすら辨へざるものなり、彼等は一種の支那人なり、否支那人よりも或る場合に於ては尚劣等なりと見るべきものあり。

彼等の中には立志傳中の人物となすべきものも之れなきに非ず、其の舞臺の廣狹、事業の大小ありと雖も其の辛苦經營の力量に於ては歐洲諸富豪に比し敢て劣るものを見ずと云へども其の身を立て家を成したる後に於ては甚だ似ざるものあるなり。

彼の故セシルローヅが數千万金を擲て英國の爲に南亞の經營に從事したる、又アンドリユーカーチーギが二億五千万圓の使用法を今現に世界に諮問しつゝあるが如き、蓋し未曾有の事實となすべきも、歐米の富豪が爭て私財を投し力を公利公益に悉し、慈善矯風の運動に日も之れ足らざるは吾人の常に見聞する所なれども吾國の富豪に於ては富豪たるものは果して是の如きことを爲すべきものなりや否やをすら知らず、家に万金を藏しながら一錢二錢の毫釐を爭ひ畢生守錢奴たるを以て能事となす。

素より彼等と云へども財を散せざるに非ず、自家の肉慾を充さん爲には一夕万金を擲て尚惜しむを知らず、其の乘り物を馬車にし、其の居宅を高莊美麗にし、妾を蓄へ別莊を買ふは實に今日の富豪輩の一資格たらんとするなり、而して彼等が自ら奉ずる是の如く厚きにもかゝはらず一度び人道とか博愛とか云ふ問題に逢ふては遂に鐚一文を供するすら思はざるなり。

嗚呼貧しき哉彼等富豪の徒、彼等は稱して天下の富豪と云ふと云へども彼等の公益的運爲博愛的勢力は遂に

一貧士にだに及ばず、彼等は要するに万金を有する貧民に過ぎざるなり、是の如きものに對し國家社會若しくは個人が敬禮を拂ふべき理由万々之れあるべからず而るに意氣地なき政府の徒、卑劣なる政治家學者、宗敎家の徒すら沾々としてその膝下に拜伏し其鼻息を窺ふに汲々とし、彼等をして增、倨傲尊大、人を侮り世に高ぶり自ら得々たらしめんとす、吾人は吾社會の大腐敗大墮落の一現象として深く悲しまざる能はざるなり

(三) 紳士無き國民

支那人は士君子と稱し、英國人はゼントルマンと稱し、吾封建時代に在ては武士と稱す、同じく是れ高尙の德義あり、社會の標準となるべき人格の稱ならざるなし。古に稱す花は櫻木人は武士と、苟も稱して武士といふ、必ずや勇あり義あり、世の是非を辨し、物のあはれを解す高操溫情の士を想起せしめざるなし、三百年間の國風は全く此氣質に發せざるなきなり、而して明治の新時代に入りては紳士の語の流行するを見る、紳士とはゼントルマンの義なりといふゼントルマンとは言語擧動如何にも優美高尙にして禮讓を重んじ信義を尊び、廉恥の念深く、義理人情に厚き人を稱す、英國大學敎育の精神は實に此ゼントルマンを育生するに在りと稱せらる、素よりゼントルマンの中にも不義理の人もある可く、不人情の人もあるべし、然れども英國の社會に於てとにかくゼントルマンと稱す理想的人格は誠に立派なるものならずんばあらず。

而して吾國のゼントルマン即ち今日の紳士は果して如何なる人を指すか、試に紳士錄を繙てその名とその人とを對映せよ、吾國の紳士必ずしもゼントルマンの意に非ず、單に金持の謂なり、可なりの月給取の謂なり、馬車若しくは二人引の人力車に乘るものゝ謂なり、フロックコートを衣るものゝ謂なり、金時計をぶらさぐるものゝ謂なり、而してその人は如何に不品行にても如何に不人情にても卑怯にても未練にても紳士たりゼントルマンたるに於て何等の差支もあらざるなり。

古人常にいふ武士の面目に關すと、此一語は當時如何に高潔の情想を起したりしぞ而して今日紳士の面目に

關すと云はゞ果して何事を意味するとするか。今や武士道廢して之に代るべき社會的制裁起らず、要するに日本道德の危機と稱す可きの時なり、若し吾國の社會風俗にして德あり氣あり秩序整然として東洋の英國たらんとするか先づ紳士とゼントルマンとの二語が同長同廣の意義を有するに至るを待たざる可らざる也。

（千山万岳）

封建制度に依て受けたる日本國民の弱點

文學博士　元良勇次郎

一國民を成す者は如何なる國にても必ず其長所あり又短所あるは免かる可らざることなり、我邦に於ても國民の風俗、氣質、習慣等を觀察する時は其長所あり又短所あり、此處に於ては特に其短所を擧げて之を論じ若し之を補ふの方法あらば之をも論ぜんとするなり。

惟ふに我國民の現今の氣質風俗等を構成するところのものは其要素一にして足らず、例へば人種に固有の氣質あるべく又佛教儒教等の爲に影響を受けたることあらん、或は又過去三百年所謂封建制度の時に於て人民を壓迫したるの結果もあらん故に一々之を數ふる時は、其要素數多く又それらの關係甚だ複雜なるべしと雖今一々之を論ずるの暇なし唯、

一　我邦人種に固有なる氣質は如何

一　封建制度の爲に如何なる弊害を受けしや

一　將來に於て之を救濟するの方法有りや

の三點に付て之を論ぜんとす。

抑々我國民たる人種の氣質如何を考ふるに、予は嘗て此事に付て研究するの念ありしも未だ其志を得ず故に今日詳細に之を論ずること能はずと雖も、惟ふに日本現今の國民は元土人を征服したる人種にして所謂勝利者たるの人種たることは歷史上明かなる事なり、此の一事を以て之を考ふるに古來（神武天皇東征以來）歷史に現はるゝ所の日本國民なるものゝ勇壯活潑にして進取の氣象に富み其思想も亦甚だ廣大なりしことは今一々之を論ずるの要なし、之を以て之を考ふるに人種としての氣質は雄大にして且進取の氣象を有するものたるや明かなり、啻にそれのみならず法律の發達、國家制度の發達等に依つて之を考ふるに其進取の氣象に富

むのみならず又其の組織構成作用に於ても決して他國民に劣る所なきものゝ如し、固より古代の制度風俗は其摸範を支那に採りたるものなりと雖も、兎に角之を採つて我國民に同化し之を我國民の組織として實行したることは明かなる事實なり、是等の點より之を考ふるに國民としての氣質は心理學の所謂多血質といふよりも寧ろ膽汁質、即ち活動の状態緩慢にして且其强度多きものなるが如し。

然るに降つて武士の世となり幕府の統一成立つに於て幾分か國民の個人的活動を束縛するの顯象を生じ、其風俗は漸々發達し、遂に德川幕府の時に於て國民を法律に依つて束縛し、其個人的自由を大に害するに至れり、是に於て一方に於ては之を泰平の世と稱えたりと雖も其實個人の自由活動を減殺し、殆ど之を法律の奴隷として唯、幕府の意志の日本全國に行はるゝことゝはなれり、是に於て此意志に服從する者は生存することを得、之に服從せざる者は生存する能はざるの情態となりたり、然りと雖も其初に於ては尚少しの之に反對する者ありたりと雖も其制度三百年の久しきに渉り、人民は知らず識らずの間に全く幕府の意志の型に箝まり、幕府の意志の在る所を伺ひ、戰々兢々として唯々それに負かざらんとするの情態となれり此の如くにして個人的活動を減殺したることは即ち今日の國民の弊風を生じたる所以ならんか。

之に依つて來りたる弊風は如何なるものなるか、第一其卑屈なる事、自己の意見を公けに發表するに於て或は朋友の意志如何を伺ひ、或は先輩の機嫌如何を考え、或は世人の批評如何あらんとのことを考え、容易に之を發表する能はず、或は又個人の擧動に於ても常に身躰を曲げ、頭を低くし所謂天に跼し地に蹐するの情態にして唯々他人を恐れ戰々兢々として居る者の如く、道路步行する者然り、家の中に互に會する者然り、學校に於て學生が自己の意見を話す時に於て然り、會場に於て自己の意見を發表することに於ても然り、此の如きは全く嚴重なる法律を以て國民の擧動を壓迫したる結果ならんかと信ず。

尚其裏面に於ては人心は過度の壓迫を受くる時には一方に於て之に服從すると同時に裏面に於ては之に服從する能はず、隨つて其擧動に於て表裏の別を生ずるは必然の結果なるものゝ如し、故に表面上人と交際するに於て自己の獨立思想を表はし又其擧動に於て自己の獨立たることを示す能はざると同時に、他の方面に於

ては隱然人を誑き、所謂誠心を以て人と交際するを嫌ふに至る、加之現今の我國民の氣風を觀察する者は言ふ、日本國民は其感情的なる所に於て佛蘭西國民の氣質に類似する事ありと、是大に其當を得たる批評と言ふべし、古代の雄大なる氣質に比較して今日の國民が感情的にして心理學の所謂多血質の情態を有するは何の理由に依るか、是必ず個人思想の發達を妨害し國民を教育するに思想の自由發達に任せずして人爲的に之を妨害したるものにして其結果思想の發達の不完全なるより遂に感情的の氣質になりたるものならん、故に今日の國民は物事を決するにも一時の感情に驅られて今日國家の大事を斷行するが如きこと少からず、隨つて今日決議したることは明日又之を變更するの已むを得ざる場合少からず、此の如きは國民の弱點と言はざる可らず。

然りと雖も又他の方面より之を考ふるに此思想の淡泊にして感情の熾なるは明治政府が歐米の文明思想を輸入し日本國をして世界文明の潮流に同化する上に於ては確かに便利を與えたるものと言はざる可らず、若し日本國民にして一種の思想を有し數千年の間其思想に依つて發達し居りたりとせんか、三十有餘年にして古來の思想を一變し世界の潮流に順應するが如きは殆ど望むべからざることに歸す、故に此弱點は又日本國民を文化する上に於ては却つて都合好かりしものなり、唯々將來の國民發達を考ふる時は大に之を矯正するの必要あるを見るなり。

是等の弊風を矯正するに付ては將來如何なる方法を採るべきか、抑々人の精神には心理學に所謂智情意なる作用あり、其各々の性質に付て之を考ふるに感情作用及意志作用の如きは精神活動の上に於て固より缺く可らざるものなりと雖も、是等一度活動したる時には別に痕跡を留めずして已む、故に幾度之を繰返すも發達することなし、唯々智的作用に至つては然らず、智的作用は過去の活動を留め其活動と新活動と聯合し其上に又新活動を同化し隨つて經驗を積み隨つて發達するものなり、故に精神發達の基礎は智的活動に在り、之を以て之を見る時は個人の思想に於ても又國民としての思想活動に於ても事を斷行するに於ては能く熟考し冷淡に之を考ふるの習慣を養成せざる可らず、一度決斷したる以上は其決斷は變更することなく之を保守するの習慣を養成せざる可らず、又將來の國民としての活動を強固ならしめんとするには個人的精神活動を養

成せざる可らず、西洋に於ては所謂國家主義なるものあり、又個人主義なるものあり、一は國家の意志を以て大に個人の意志に干渉せんとするの主義にして、他は各個人の自由意志に放任するの主義なり、是等兩主義は必ずしも其一を以て眞理とし他は誤れりとなすこと能はず、兩々其適當の比例に於て活動するを要するものにして之を國民教育に應用する時は其國民の風俗習慣に依つて變更せざる可らず、或は大に個人主義を唱道すべき場合あり、或は又國家主義を唱道すべき場合あり、今日獨逸を始め其他歐羅巴大國の大勢を考ふるに思想は大に國家主義に傾きつゝあるものゝ如し、是等は經濟の點に於て之を論する時と又國民教育の點に於て之を論する時とは多少異らざる能はずと雖も、我邦今日の情態に付て之を考ふるに國家の經濟政策の如何は措いて之を論せず、國民教育の點に於ては我國は久しく統一的思想の爲に個人發達を妨害されたる結果種々なる弊害を生じたるものなれば個人の發達を大に奬勵するの必要あるを見る、然るに今獨逸に於て國家主義の盛んなるを見、或は其他の國に於ても多少國家主義に傾きつゝあるを見て、直ちに之を我邦に應用せんとするは偶々以て應用に例外あるを無視したるの嫌なきにあらず、國家教育に從事する者少しく反省を要する所あるが如し。

（速記同志社員筆記）

新平民團結の必要

廣島藝備日々新聞社　前田貞次郎

明治維新の業成つて已に三十餘年、百事面目を新たにせる有りと雖も而も新平民を嫌忌するの風習に於ては未だ多く昔時と異る處あらず、是れ一は新平民自身の自暴自棄に安んじて大いに爲すある所なきに出るべしと雖も然れども其主なる原因は口に人道を說くものゝ未だ切に同情を彼等に寄與して其志氣を鼓舞すると同時に一方に於て世人の迷信を打破し來るに努めざるが爲ならずんばあらず、

余は嚮に感ずる所ありて「天下の新平民諸君に檄す」るの一文を草し之を中央公論（第十八年第二號）に寄せて世に問ひしに岡山縣和氣郡の一新平民は三月十五日附を以て書を余に寄せ其所懐の一端を漏し且感謝の意を表したり、因て余は其書を公示して余が執筆しつゝある藝備日日新聞に依り廣嶋縣下の新平民に對し彼と握手して俱に與に同族廓清の任に當らんとを勸告せ

り、蓋し和氣郡の一新平民君は備作平民會（備作同族廓清會の改稱）なるものを組織し同族廓清の事に從へる人にして同族中最も熱心なる先覺者なるべく思惟せらるればなり、されば廣島縣下に於ける新平民中の有力者にして彼と握手し更に藝備平民會を組織して先づ相互の間に氣脈を通じ進んで中國の同族を糾合するあらば遂に天下の同族を打つて一團となさんと未だ必らずしも難事にあらざるが如し、而して余は實に其必要を認め盛んに之を唱道せんとする者なれば事情の許す限りは局外の應援者となり以て彼等に聲援を與ふるあらんとす、

想ふに新平民團結の必要は今日に初まれる事にはあらずして其機會も亦曾て屢〻之ありしに似たり、蓋し夫の民權自由の說盛んに世に行はれたりし時の如きは實に其絕好機會なりしも當時にありては之を唱道し又は實行せんとする者なかりしのみならず其後に於ても亦此に顧みる者なくして荏苒今日に及びしは余の深く憾みとする所なり、斯の如くにして彼等の團結は久しく問題外に置かれしかば彼等は社會外の社會として取扱はれ政治上及社會上に特別なる勢力を蓄ふるの準備殆んど全く缺けたるは是非もなし、然れども斯てあらんは時運の許さゞる所にして他動的に開發せられざりし彼等は今や將に自動的に開發し來らんとせり、是れ豈に漫然看過す可きの事ならんや、それ一葉落ちて天下の秋を知る、況んや備作平民會は已に若干の同族を糾合して其廓清を叫べるに於てをや、機會は已に其鋒を振へり、之を摑みて其脊に跨り一鞭を加へて馳驅せしむるは彼等に對して同情を存するものゝ宜しく大いに努むべき所なり、

故に余は先づ廣島縣下の新平民に向つて其同族中の先覺者と握手すべきことを勸告せり、然れども余が勸告は或ひは徒勞に屬せん、然り或ひは徒勞に屬す可きも余は彼等をして奮起せしむるに至る迄之を絕叫して已まざらん覺悟なり、勿論彼等の多數は率直に「新平民なり」と名乘るを耻ぢ爲に趦趄逡巡して憤然蹶起せざるかの疑ひなきにあらざれども這は甚だしき誤解にして彼等は先づ自から侮る者なりと謂はざるべからず、それ新平民の我邦に於けるや因襲久しく俗をなし一朝にして風習の改變す可からざる者ありと雖も已に人道の上より見て賤視せらる可き理由なしとせば宜しく意氣昂然として以て他の種族と對抗すべきなり、亦何ぞ卑々屈々として他の膝下に屈伏するを要せん、然るにも

拘はらず今率直に「新平民なり」と名乘るを耻ぢ敢て自ら侮るあらんか、竟に浮ぶ瀨なきを歎ずるの外なきに終るべし、

斯く言へば人或ひは云はん、世は已に黃金萬能の世にして金即是權なれば新平民と雖も貲財ある者は他の種族の間に立つて何事をか成し得ざらんと、然り世は黃金あるを知て他あるを知らざるが如きの世なり、故に新平民と雖も貲財あらば他の種族の間に立つて成し得ざるの事なかるべきも余は斯くなし得るに於て確かに三樣の場合あることを假定し得るなり、即ち

(一)一種の賄賂的意味に於て交際上金品を吝まず散布する場合

(二)巧みに素性を包み隱して他を欺く場合

(三)他の貪慾なる者が爲にする所あらんとて求めて之に接觸する場合

是なり、今此三樣の場合に就て考ふるに、

第一は卑しむ可き所爲なり

第二は憎む可き所爲なり

第三は戒しむ可き所爲なり

既に然り、斯の如くにして他の種族の間に立つは彼等に取りて不安なり危險なり、然れども因襲久しく俗をなし一朝にして風習の改變す可からざるものあれば上の如きの手段に出て或ひは他の乘ずるに任すも已むを得ざるの場合あるべし、思ふて此に到れば余は社會の無情を憤ると同時に彼等の境遇を憐まざるを得ざるなり、

然れども又思ふに已に人道の上より見て賤視せらる可き理由なしとせば卑々屈々として上の如き陋劣なる手段に出づるは(之を識者の眼より觀るときは)また徒らに他の侮りを增す者にして善く子孫の爲に計るものとは謂ふ可からず、假令善く子孫の爲に計るものなりといひ得るも善く其同族の爲に計るものとは謂ふべからず、それ一樹の蔭に宿り一河の流れを汲むも皆是れ多少の緣あればなり、況んや生れて同種族の人たるものに於てをや、因緣もとより淺しと謂ふ可からず、試みに念へ彼等に同一の運命を執つて之を賦與せるものは天なり人にあらず而して之を嫌忌し又は嫌忌せらるゝは罪、人に存するあれども本と是れ自然の約束に出づる者なれば同種族として其運命を共にする者は恰も是れ同舟の人にして他の溺るゝを見つゝ我ひとり免れんとするの義且俠なるものにあらざるや勿論なり、然るも之を捨てゝ彼に就かんか、其義なく俠なきものは

人にして人にあらず、乃ち彼等の中若し上の如き手段に出で幸ひに新平民ならざるかの如く裝ひ得るもの有りとするも斯の如きの徒輩は此に得て彼に失するなり、蓋し彼は其時以來僞人となりて眞人たるの價値を失ふ、未だ知らず世の新平民諸君は斯ても尚僞人として世に立たんとするか、

想ふに今日に於ては左迄に淺ましき者寧ろ多かるべし、然れども多少理義を解する者は斷じて之に與みせざる可きなり、蓋し彼等が社會の壓迫によりて久しく強ゐられたりし度外の謙愼は却つて彼等が心身修養の上に補ふ所ありし爲め其中往々眞人あり而して眞人たるものは能く永遠に亙りて人道の上に貢獻する所あるを得れば僞人として一時の虛榮に誇るものとは霄壤の差あるとを知ればなり、既に然り新平民にして他の種族なるが如く裝ふものは縱令階級に於て其價値を引上るにもせよ人としては確かに墮落する者なり、果して然らば其天分に安んじて眞人たらんとを期するは彼等に取りて何よりの上分別なりと謂ふ可し、

見渡せば今や社會の各階級を通じて人らしき人に乏しく華士族平民いづれを問はず腐敗の行渡れるあるは掩ふ可からざる事實にして眞に唾棄す可きの醜奴多し、是時に當りて眞人たるの價値を保つは何人に於ても最先の急務にして自から其本分を嚴守すると同時に他の僞人に對し相當の制裁を加へ以て世道人心の上に補ふ所なかるべからず、然るに世間徒らに新平民を賤視して彼れ醜奴を賤視する者寧ろ少きが如きの觀あるは何ぞや、畢竟是れ名目に拘はりて理非を顚倒せるが爲のみ、

然り斯の如く理非顚倒の世なれば衆愚群蒙の聵々聞くなきの耳、懵々見るなきの目を以てして或ひは尊しといひ或ひは貴しといふ者は能く眞僞を甄別し正邪を鑑識し而る後之を指稱するに非らず、然るも猶之に迷ひ之に惑ひて高位顯官羨むべく華士族羨むべしと言ふ者あらば其根性は已に先天的奴隸にして到底救濟す可からず、果して然らば今の時に當りて新平民たらん者は「高位顯官何かあらん華士族何かあらん來りて赤裸々となり我等と其眞價を爭ふべし」と放言し得べき意氣なかるべからざる也、

余は實に斯の如き意氣あるの眞人を敬愛す、もとより其新平民たると何たるとを問はざるなり、それ已に斯の如きの意氣あらば又有らゆる僞人に對して絕交を宣言するとを得可し、かの道樂華族は交はらざるも可な

り收賄官吏は交はらざるも可なり泥坊商人は交はらざるも可なり身賣り女は交はらざるも可なり、而して是等すべての僞人には宜しく我より進んで絶交を宣告すべし、亦何を苦んでか彼等に交際を求むるとを要せん、蓋し此絶交は彼等醜奴に對する相當の制裁なり、而して過去幾十百年彼等が祖先よりして新平民に對し侮蔑を加へ來りし報復は此絶交によりて滿足せらる可し、斯の如くにして玆に新氣運を作り新世紀を開き眞人を以て僞人に代らば天地神明之を感受して正當に理非を分別するの時代こゝに初めて來るべきなり、

想ふに是れ決して余がユートピア的空想に非ず、新平民諸君にして若し團結鞏固ならば此新氣運を作り新紀元を開き以て「新平民萬歳」を謳歌するの時代必らず到來すべし、而して其の此に到らしめんには斷じて今日の腐敗に染まず勉めて眞人たらんとを期し死生渝らざる誠心を以て萬事に當るべきなり、新平民諸君にして此決心あらば今日世人の懷ける迷信はおのづから打破せられ曾て諸君を賤しみし者をして竟に諸君に來らざるを得ざらしむるに至る可し、あゝ氣運は熟せり、華士族平民の多數は其痼疾たる良心痲痺、賄賂食傷によりて殆死せんとし新らしき椅子、空しき椅子は新眞人の來りて舊僞人に代らんとを待てり、諸君の一團となりて蹶起すべきは正に此時にあり、宜しく意氣昂然人道の上を濶步し來るべきなり、

帝國の將來と千島

(下)

報效義會長　郡司成忠

我邦人は外國を解するの頭腦無し

亞米利加の船がシヤトルから浦鹽斯德へ船を廻はして此處で商賣をして居つた所が、露西亞が貿易に保護政策を執つて外國人に重く稅を掛けるやうになつた、それて亞米利加の船が麥の粉を持つて行つて商賣して居つたのが出來ないやうになつた、日本も現に、大矢七兵衛氏が大阪から浦鹽斯德に定期航海をやつた所が是が爲めに算盤が持てなくつて困難して居る、

此亞米利加の船が露國に保護政策を取られた爲めに今までのやうに商賣がならぬから廢めるといふ時に一米國の船長が言ふには浦鹽斯德まで行くことは航海のことてあるから知つて居るがそれから陸へ上つて何處へ行くのか、船主が言ふにそれは此麥の粉を浦鹽斯德に揚げては鐵道に乘せてトムスク、イルツークスの方へ

行くのだと、船長が此浦鹽斯德から西比利亞鐵道に移されてトムスクに行くといふことを聞いた時に、それならばなぜ最初からさう言はぬか、私は船乗りだ海のことは知つて居る、トムスクに行くならばアラスカからベーリング海峽を經北氷洋へ行つてエニセー川から八百九十里溯ればトムスクの城下に行く、浦鹽斯德で税を取るのは裏道から來いといふ意味であらうから其裏道に行てはどうだと、所が船主が信じなかつた、エニセー川の川口は漸く十四五年前に見付けたので西比利亞鐵道の材料もエニセー川の川口を諾威其他の國人が段々調べて材料を此川口に廻漕し西比利西鐵道が開通されたのである、此處には税關がない、それで亞米利加の船はエニセー川からトムスクに行くことになり今現在商賣しつゝある、

日本人は小さな島國に居つて外のことを一向知らぬ、そして西比利亞の大切なるお客樣の商賣を遠くの亞米利加からやらせて自分は知らずに濟まして居る、これで日本は開明國といふことは覺束ない、今ベーリング海峽を越へて向ふへ行つた日本人は何人あるかといへば私の知つて居るのは僅か十六人である、其人達は私共同樣物の言ひ方も知らぬ自分の思ふことを人に話すことさへ出來ぬ者である、物の分る力のある人はゴヨウマイの瀬戸を越へての話をしても分らぬ、恰度二十年前に西比利亞鐵道の話を聞いてそんな物が出來るものかといつて居たと同じ割合である、

日本より大きいカムサツカのことがマルで日本人の頭に入らぬ、千島のことも聞く耳がない一般學生諸君などに問へば全くうつらぬ、惡口に當るか知らんが當時の學生諸君は地理といふことに重きを置かぬ成程學校て稽古をして居るに相違ない、所が是は試驗の爲めに據なくやつて居るので試驗が濟むと忘れてしまふ、それは尤もだ、生徒が惡いのではない、地理を教へる教官が地理をマルで知らぬ、それで面白く話をすることが出來ぬ、從つて生徒の耳に入れることが出來ぬ、地理を知らなければ何處の國の話か一向頓着がないから千島カムサツカを忘れて三里しか離れて居らぬ彼方に露西亞人が鐵砲を以て勤務して居るといふことを頭に置いて居る人が少い、且つ國境に付ての觀念が日本人に薄いやうである、千島拓殖の事業は事業の性質が困難であるではなく、日本の人に千島の事情を話しても解釋する頭がない、食つたことも嗅いだこともないから話してもうつらぬ。實にナサケ無い事である。

それて私は少し國境といふことに付て申して見たいと思ふ。

重きを國境の觀念に置け

私が占守島に行つてから國境といふことに付て初めて感じたことがある、歸つて來て外務省の人に一躰國境といふことに付て列國の慣例はどう云ふものであるかといふことを聞いて見て實に驚いた、明治二十四年頃岡本監輔氏が千島協會といふものを開いて失敗した、サガリエンを失つたのは政治家の罪でない、日本國民が國境といふ觀念に乏しかつた結果だと思ふ、どう云ふ譯かといふと獨逸と佛蘭西、是は累代敵視して居る國である、是が國境のことは好い例だと思ふ、獨逸と佛蘭西の國境といつた所が別段大陸の上に鐵の垣根が立つて居る譯てはない、唯處々に大きな杭が打つてあるのみて其杭の一面に是より西佛蘭西領といふ字が記してある、其裏面に是より東獨逸領と記してある杭が打つてあるのみである、所が獨逸のビスマークの國境移住といふ政策があつて、其國を思ふ人は國境へ移住して居らなければならぬ、さもなければ其國を保つことは出來ぬといふことを主張して、國境へ政府が干渉して家を造つて移住を奬勵し、小さな村落を爲して人を移して置いた、それ故普佛の外交問題が面倒になつて來かゝつた時には、國境の處に於て獨逸の兵隊が已に澤山農家に入つて居つたのである、佛蘭西の方に於ては國境よりかけ離れて居つた爲め、宣戰の布告があつた時獨逸の兵隊はもはや國境を越へて、佛蘭西の國内へ入つて旗を樹て居つた、それて其戰爭に佛蘭西人がやり損つた、古來移住民が新しい土地へ行つて功を奏したものは、全く國家的觀念と宗敎心を以て土臺にしたものゝみ功を奏したことは、どの拓殖のあとを見ても明かである、獨逸の國境移住に對して佛蘭西もズット後國境に家を造り寺院を造り、第一に僧侶が行つて人を招く、そこで佛蘭西と獨逸と國境に於て向ひ合つた、獨逸人と佛蘭西人と國同士では仲か惡いが、人と人てはそうもない新殖民地のことで總て不便であるから、一方から他方へ豆腐を買ひに行かうぢやないかといふやうなことで、獨逸國から佛蘭西の國へ豆腐を買ひに行く、是は外國へ行くのであるから外國旅行免狀を取つて行くかといへばさうでない、國境のことは又一種特別があつて其樣なことは構はぬ、自由にしてある、自由にしてあるが他國に行くとそこが兩國人の

分れ目のある所で、他方の村へ行つて惡い事をして押へられゝば仕方がないが、さうでなければ歸つて來れば宜い、そこで又一方の者が他方へ行つて惡い事をして歸つて來るといふことになる、妙なもので双方の力が同じであるとなか／＼喧嘩をしないものである、戰爭の起る次第が八つあるが其中弱い奴が强い者から逃げやうとする、追驅ける、逃げる、遂に逃損つて已を得ず戰ふのが多いのである、個人の間でも少し强い者が弱い奴を捉まへる、弱い奴ははがいゝから喧嘩になるといふやうなことである、ことが大切な處である、獨佛が非常に注意に注意して兩國が力の違はぬやうに同じ勢力を有つて國境に村落を爲して居ることは面白い事實である、それで一方に大變からだの丈夫さうな奴が來たぞといへば、一方は直ぐ本國に言つてやつて友達を呼ぶなり、種々の手段を以て移住を奬勵して同じ勢力同じ人數で保つて行くから、此間が先づは穩かである、が、此間には始終やかましいことが起り通してある、最初に國境に村落が接して出來た時分には、佛蘭西獨逸兩政府は外交問題で絕間がなかつた、是では將來戰爭をしなければならぬ端緒を惹起すといふので、今度は國境から三里々々の處へ更に想像の一地點を置いて、此六里の間をバハグラウンドとして衝突の少き樣にした、此六里間は兩國管轄外で、此間に於ては如何なることが起るとも兩國の政府が採上げぬといふことになつて居る、現に獨逸から佛蘭西に架つて居る鐵道列車が此バハグラウンドにかゝる時は合圖の滊笛を鳴して注意する方々の國々の人が乘つて居るがバハグラウンドの內では如何なることが起つても兩國の政府が採上げぬから、種々の犯罪がバハグラウンドを通る間に起る、だが此間を通る時は自己の生命財產は自己のピストルに依て保護するより外はないとのことである、世界中の開化の先導者、ハイカラの親玉ともいふべき開けた國の國境でさへ、其列車の中に於ては自己の生命財產は自己のピストルに依てゞなければ保護が出來ぬといふやうな有樣である、此バハグラウンドの亂暴なこと何と言つて宜いか分らぬ。

私共が占守島に行つて小さな犬の小屋のやうなものを造つて居るが、向ふの角にはコサックの屯田兵が兵營を造つて居る、私共は今は自分の言ひたいことも主張せず、權利を主張せずに居るから今日までは何にもなかつたが、私共は此島に來て居つて來て居る甲斐がないやうな心持がある、言ひたいことは言ひ得ぬ、それは

双方の政府で採上げぬのが一般の慣例である、だから實力がなければ奈何とも仕方がない、彼の隊が吾に出會つて吾の方が多うければ彼は逃げる、が、私の方が常に少い。

國境移住と我々の任務

曾て岡本監輔氏がサカリエンに行つて此處を國境として、露西亞と日本との境として居つた際に、北風が吹くと誰か向ふの方からやつて來て放火する、そして此方の家を燒かれてしまふ、據なく一部落後方に居る日本人の居る所へ同居さして貰つて、前の處へ再び家を造らうと思へば、先方が早くも切込細工を持つて來て家を建て居る、それで日本の人が再三再四建白をした、其中には隨分悲慘なことも書いてある、國境の有樣を悉しく書いて、實力がないから仕方がない家は燒かれる段々日本の人が南に移つて折角開いた漁場も取られるから早く移住をして呉れといつたが、駄目で常に少い人を以て多くの人と爭ひをして辛き目に逢ふて居つた其後遂に全部を失つてしまつた、今は之を言ふ時代でないが今占守島とカムサカのバ、グラウンドは三里半の海である、此處に於て私共は齒痒いこともあるけれども、過去つたことを數へて見た所が愚な話であるから、いはないが是から先き一も失策のないやうに何時でも優勢にありたい。

私共が此島に臘虎を捕り鮭鱒を獲つて見る影もなき一漁夫として會員と共に居るといふことがあなた方にはどう解釋されるか、此占守島が日本國の圖として政府て作つたる葉書の中に入つて居らぬといふことに氣付かれずに居るといふことは、そも占守島に居る者にはどう云ふ感を與ふるとあなた方の御推察を戴くことが出來るか、平たく言へば餘り頓着が無さ過ぎる、私共最う占守島に行つてから十年、毎年のことも報告もし新聞にも出て居る、偶には諸君が日本の北海はどうだと顧れる必要があらう、それに掌大の國土の上に自分のことのみに奔走して、國家は如何にならうと頓着なく、自己自身の爲のみ考へて居る人が多くあるために國家は益々跛の發達を爲して行く。

今日の中學生を見るに唯自己の都合といふことにのみ考へて自分の爲すべき仕事を選んでござる、實に不審に堪へぬ、自分自身といふことを考へれば絶島へ行つて鮭狐を捕らずとも外に仕事はある、併し誰かしなければならぬ仕事である、申すも畏きことながら先年我陛

下は片岡侍從を遣されて占守島を探撿させられた、片岡侍從は勅命を奉じて探撿して歸られた結果幾度か移住を奬勵された、是地は是非とも日本人が住居をせぬといかぬのであります、一般國際法から言つても又何處の國たりと雖も或場處に人が行つて三十年政府からやかましく言はれずに住へば、其住む人に其所有權が移ることに極つて居る判決例が澤山ある、明治七年樺太と交換してから久しく日本人が行かぬ、却てヴイクトリアから來て居る者によし所有權が附くとまで行かなくても多少の條件を附けなければならぬ樣な事躰となつて居つた、私が行つた時却つて日本人が何しに來たと反對に聞かれたこともあつた。

私は不肖も顧ず自ら其任に當りて行つて見ました、今日になつては住慣れましたから餘り寒いとは感じません、サ小供も寒さも不自由も感ぜず居ります、とは言ふものゝ、内地に來て見て一般の生計に比べて見ては話にもなりません、實に言語同斷であります、獨逸の人がビスマークの勸誘に依て國境に移住した當時は如何に不自由であつたらうと思ふ、之を忍んだ結果が普佛の戰爭に勝を得た、佛蘭西の人も今は隨分國境に出て居る、併し双方共に困難を忍んで能く其國境を守つて居るのである。今露西亞カムサッカの沿岸に來て居るものは屯田兵である、私共彼地に行つて何の爲すこともなく十年ぼんやりして暮したやうであるが、此處に家を建てゝ居つたものは私共が行つた時に舊との家は焼いて捨てた、其後幾度かヴイクトリア人が來たが、穩かに吾々は此島に漁場を拵へて商賣するのであるから私共の漁場を荒して呉れては困るといつては、ヴイクトリア人を一度二度三度までは返したが、所謂バ、グラウンド、此間に於て如何なることが起つても兩國の政府が採上げぬといふことを知つてをるから、彼も唯言語でのみなく實力を以て私共に反抗したことさへあつて、時には思切つて私共も多少の火藥を燃した、隨分普通人の爲すべからざることまでも爲して、漸くに今はヴイクトリア人も此方のことを斷念して占守島に足を踏む者は無くなつた、それのみならずカムサッカの中の情況が段々日本人に多く紹介せられて、今日は函館は勿論、加賀、能登、越中、島根縣、下の關、或は伊勢、水戸、秋田、等から昨年は六十九艘からの船がカムサッカの沿岸へ行つて鮭鱒を捕つて日本に送ることになつて來た、さう云ふ風に段々進んで行つて仕事を爲る區域を擴めるといふことになつて來て居

る、即ち火藥を燃しての戰爭でなく仕事をするといふ側の戰爭に餘程氣運が向いて來た、私共も今は最初の議論計りではなく、鮭鱒鱈を捕り、畠を掘り、土方をする、單に土地を一つ拓くといふもそれはなか〳〵尠からぬ勞苦を要する。

商賣上より見たる占守島の將來

此占守島といふ土地はカムサツカに對して咽喉の土地といふ許りでなく、是は將來どう云ふ土地になるか、私が今まで見た所を一と口に言へば是から先きの日本人の仕事の一として、此近海の魚族を獲つて之をニンムの鹽に依て製造して濠斯太剌利亞に賣るといふことが、間違ない一の大事業でありまず、此事は何處の土地に依て行はれ、何處の土地に依て仕事が出來て行くかといふと、占守パラムシロ島の外にありませぬ、カムサツカの土地を日本人が取る取らぬといふとは今日言ふべきとでない、土地を取つて何にする、先きに行つて商賣して遺利を擧げて行けばそれで宜い、追々日本の人がカムサツカに渡つて行く中にはカムサツカと日本人の血が交つて遂にカムサツカ人は雜種になる、其雜種がカムサツカの商權を握ればそれで宜い話である、無粹に火藥を燃して威張つて戰爭をするに及ばない、極く靜かに店棧の前垂を掛けて頭を下げつゝ戰さに行かなければならぬ、此占守島はオコツク海の魚類の捕獲場ばかりでなく、ベーリング海の魚類も日本人が捕りに行くには占守島を根據にしなければならぬ、今は日本人が一月に東京を出て瀨戸内を通り日本海を通つて、此邊の膃虎膃肭臍を捕つて六月に函館に入つて休憩して千島に渡る、此邊で膃肭臍を捕りそれから進んでロントローレンスまで行つて此處へ歸る、是が今日日本人の膃肭臍獵である、日本人が幾ら威張つても力に限りがある、根據地がなければ出來るものでない、私共は此處に居つて内地の者を病人の世話を爲し、差支へれば代りの者を載せてやつて此處で休養させる、それで年々此方へ行く人が多くなつて行くことは、實に政府が報效義會に多少の補助を與へて今日に至らしめたことは大いなる力であるが、抑々又吾々會員が（私が會員のしたことを褒めるやうに當るとおかしいが）隨分私共見兼ねた位のことまでも忍んで今日までやつて來たことが、聊か與つて力あることとである。此仕事を今日までやり來つて來るまでに元々私の遣方が惡かつたか知れぬが五十幾人を殺して、尙ほ其人達の

遺族までが殘つて此仕事をして居るといふことは瘠我慢や何かで出來べきものでない、此土地に來るとどうしても此仕事は遣遂げなければならぬ、何としても此處に居らなければならぬといふ氣になる、譯の分らぬ人達も眞に來て見るとよく分る、それで女小供に至るまで永住する氣になつて今やつて來て居る。

定期航海に關する苦心

併し人は幾ら一生懸命になつてやつて居つたからとて或る程度まで世界一般の當り前の境遇になつて行かなければ長く續かぬ、當り前でないといふことはどんな事であるかといへば交通の事であります。

此土地は米は出來ず、それで馬鈴薯と肉とがあれば宜いぢやないかといふけれども、一時に食慣れた米を廢することは出來惡いことである、內地から米を持つて行くに、其大切なる食物を運ぶ船はどう云ふ船を使つて居るかといふと、只朝鮮海を經て膃肭臍を捕つて來るに使ふ八十五噸の報效丸といふ漁船に積んで行く有樣である、其船が一月に東京を出て六月に函館へ着き、それから働いて歸途に此千島の消息を取つて行く、それで年始狀は私共はあなた方から六月でなければ受取れぬ、私共の年始狀は其年の十一月でなければ諸君に渡せない、是が普通の用事ならば宜いが、國境といふものは實力の世界で此土地に於て如何なることが將來起らぬとも限らぬ、今までは十分言ひたいことも言はず、あゝ交通の便がないから仕方がない、何か事が起つた時に準備はなし勢力はなし、一人も殘らぬやうになつてしまつては何が何か分らぬやうになつてしまふ、交通の便が薄弱で勢力がなければ言ひたいことも言へぬ精々忍べ、今に政府に請ふて定期航海を開くと今まで辛抱したことと實に十年、是では堪へぬ東京から郵便を受取ることはあと何遍と算へる位であるから、定期航海開設のことを願つた、所が高岡參事官を北海道長官代理として占守島に派遣されて情況を調べられた、其高岡參事官の復命された所を見ても、占守島の今日は政府が金を以て保護する必要はない、あの島の者は何うにか斯うにか命を繫ぐまではやつた、唯氣の毒なのは航海のことで、其不便なることは話で聞くより行つて見て、初めて其船の着いた有樣や島の人の情態を見れば、せめては年二回の確實なる航海を開かなければならぬといふ復命である、に拘らず今日未だ占守島へ定期航海を開くことか出來ぬといふ譯てあ

る、それは抑々どう云ふ譯かといふと詰り北海道沿岸占守島どころではない、ずつと手前の處に於て定期の航海を開かなければならぬ處で、定期の航海を開いて居らぬ處が實に數多い、全く北海道に定期の航海は無いといつて宜い位、現に小樽と函館の間の定期航海は（小樽は北海道中一番の都會である）一昨年の十一月から開かれた、其外北海道には開かれねばならぬ處で開いて居らぬ處があつて、每年郡長有力家が寄つて長官に定期航海開設を迫つて居る、それに開けない、西の側になると殊に開けにくい、三十一二年にカムサツカの漁業が盛んになつた爲めに、多く漁船もカムサツカの方へ來る樣になり、從つて占守島の港へ漁船が入るやうになつた、結構なことゝ喜んで居た所不慣の致す所か、北洲丸といふ船が占守島とパラムシロの海峽に入つて暗礁にかゝつた、海軍省の海圖に其暗礁が漏れて居た爲めに、大きな漁船を一艘打壞はしてしまつた、それには海上保險の契約がしてあつたから、船主は割合に損をしなかつたが十六萬圓の損害を生じた、保險といふとは損害があり破損があるから保險を付けるので、水の上にあるものは時あつて沈むは當然のことである、世界の統計を取つても十萬噸に付て百噸は每年危難の中にある、日本は六十萬噸であるから六百噸は當然のことである、然るに唯一艘北洲丸が沈沒したといふ爲めに保險會社は如何に申合せたか、其以後保險は附けぬやうになつた、カムサツカ沿岸は危險だ、占守島は危い、北海道の方へ行く船はどうも儲かりさうもない、保險契約はせぬ方が宜いといふことになつた、強いて保險を賴まうとすれば三割五分寄越せといふ、まるで不當の話である、それで保險が付かぬやうになつた爲め漁船の航海がやまつてしまつた、是は抑々誰の罪です、も少し日本人が海のことに明るくなつて與れて居れば、何の一艘や二艘船が躓いたとて其事業に關係を生ずべきものでないと思ふ、只實に如何とも仕方がない。

それで此以上は自分の力で定期航海を開かなければならぬ、自分自身此仕事に當らなければならぬ、私共海軍で役立たぬといふ一艘の石川丸を貰つてから、もう十年間乘つて仕事を爲て居る、漸く今年多少の痛みを生じましたが、石川島に初めて生れた船が今年まで働いて居つたのを見ても、危險の處でない波の荒い處でないといふことが證據立てられる、今年も修繕を加へれば出來ぬことはありませぬが、他の者を乘せてやる

譯には往きませぬから廢船になりました、それを以ても北海の情況を察せられると思ふ。

私が新聞に石川丸の航海記事を出して呉れといへば、面白くないから出せないといふ、新聞記事には如何なることが書いてある、私共眞面目に考へれば三面記事よりも石川丸航海の記事の方がと思ふが私共の言ふことは受付けられぬ。

私がいろ〳〵お話した中に或は或點に於て御了解を戴くことが出來たか知らぬか、此樣に話の仕方の下手なために私が聞いて戴きたいと思ふことが或は通じて居らぬかも知れませぬ、唯今後あなた方に今少し北海の方の情況を注意して聞いて頂き見て戴きたいといふことを切に希望する所であります。（完）

余の見たる日本の國病

博士　リギョル

其二　日本人の習慣に就きて

人各々習癖を有す。習癖は一種の勢力なり。人生の半面は單調にして、半ば習癖の力に支配せられて云爲行動す。故に若し其習癖にして良く正しく清く高ければ、其生涯も亦其習癖の如く良く正しく清く高からん也。於是乎有終の美を濟さんと欲するものは其初めを愼むべき事言を俟たず。中途にして其習癖を改めんと欲せば必ず多大の苦痛を經ざるべからず。青年者に於て猶然り。老朽するに及んで之を矯めんとす。牛は遂に死すと雖其角を直にする事能はざるが如し。

國民としても亦各特有の習慣あり、所謂國民性と稱するもの是なり。國民は知らず〳〵其習慣に支配せられて無意識的に之れに從ふ。故に何人も其理由の存する所を極めんとせず所謂古來の習慣と稱して之れに盲從しつゝあるものなり。日本婦人が歯を染むるが如き、殆ど其理由を知るものなからん。唯此は斯く行はれ來りしを以て斯くするのみといふに過ぎず。所謂『仕來り』と稱する一種の勢力なり。而して其勢力や法律よりも永久的にして且普遍的なり。例へば年少者禁煙の法令が既に嚴密に行はれざるは即ち此理を明かにするものに非ずや。然れども其習慣にして正しく條規に叶ひ美はしき風俗に合するものならば其習慣に從ひて其國民の性情も亦正規に契ひ美風に浴する事、個人の生活に於ける場合に異らず。以上の如く國民性の異なる

に從ひ其習慣も亦皆同一ならず。延ひて其相貌をも別つものなり。

而して今總ての習慣を取除かんとするは其人の面貌を抹殺するに等しきものなれば到底不可能の事たるや論を俟たず。要は唯不正なる習慣を豫防し、在來の惡習慣を矯正するにあるのみ。

日本に於ては社會の狀態と人々相互の交際法が變遷し來りしを以て新しき習慣の輸入せしは勢の免れざる所、生活の狀態が變化し來れば其習慣も從て變化せざるべからず。然れども新しき習慣に付ては、思ふに日本國民は尙舊慣捨て難く僅かに新習を粧ふが如し。見よ彼等が外出する時は洋服を着用し。家に在る時は和服と足袋とを着て、寧ろ氣樂なりと思へり。されど此點に就て余は左程遺憾とする者に非ず。唯他日新風習の生ずるに當り確立一定の道德法が其精神たるべきを希ふのみ。苟も條規の之れを支配するに非ずんば美風も陋習も相混合して年所を流過せん、譬へば飯に砂を混じて食ふが如く腹中に入りて後之れを如何ともする能はざるべし。身を害する事夫れ幾何ぞ。

抑も日本に於ては習慣てふ文字は多くは惡しき意味に用ひらるゝが如し。舊習舊慣といへば直ちに舊弊痼疾を意味す。然れども唯「舊きが故に」といへる一端の理由の下に、又或る一種の弊害が之れに伴ふが爲めに所謂舊習の全體を非するは不當なりといふべし。夫れ弊害とは或る物の濫用なり又或は之を極端に用ふる事なり。其最初に於ては舊習と雖理由なく生ぜしものに非ず。元來理由其物の變化し消滅するものに非れば濫用と妄用が遂に暫く其理由を隱蔽するに至りしなり。故に習慣をして新らしき時勢に應じ新しき狀態に適せしめんとする時、其理由とする所を明かにして其精神を改むべからず。

今多少實例を擧げんに日本人の特有なる習慣は所謂義理人情なり。西洋人が此國に來りて先づ第一に感接するもの義理の習慣にあり。日本國には到る所に義理を藏す。一見するに日本人は上下を通じて義理の奴隷なるが如し。然れども或點に於ては必ずしも奴隷にあらざるべしと雖、古來因襲の久しき若し純然たる奴隷たらんには直に速かに其桎を脫却せざるべからず。思ふに義理とは義務の遂行なり、旣に社會あり家庭あれば其社會に對し家庭に對して義理を存せざるべからず。舊社會に於ては總ての人々殿樣と家來と、旦那と小僧との如く互に相關聯して生活し『オカゲ』の下に生活

せしかば其受けたる恩惠を報謝せんが爲めに各々盡すべき道を存せしなるべし。即ち各自受くる所の恩惠を報いざるべからずてふ觀念は人類當然の情操に非ずや。此意味に於ける義理は甚だ嚴密にして所謂義理に背く者は人に非ずと思惟せられしも無理ならざるなり。然るに今や人々多く獨立して自營自活の道を講ずる時代なれば、人に對する義務も亦異るに到れり。されど社會は恩惠と報謝との二者の交換なくんば成立するものに非ず。故に縱令報恩の精神が他の道又は外の名稱を以て言ひ表はされたりとするも報恩の念慮は人心に留存せしめざるべからず。

然れども爰に或る權利を有するものが義理の名の下に自己權利以上に亘りて金品を要求する等の事より弊害を醸す事あり。換言すれば自己の恩眷と保護とを賣りて報酬を得んと謀るもの、然も頗る高價に義理を賣らんとするものなり、義理を買ふ者は其要求する總てを爲さざるべからずとせば義理は即ち義務に非ず之れを別に惡義理といふ。今の世に流行する賄賂これなり。固より眞の義理と賄賂とは同一に非ずして義理を重んずるものは却て賄賂を輕んず、義理の濫用によりて習慣の惡變化を來せし事此一事を以て知るべし。

又家庭に於て兄或は叔父なるものありとし、且金力あり勢力ある時は、所謂一家の事件に際して先づ其意見を伺ふ事敢て怪むに足らず。然れども兄或は叔父と雖も何等の理由もなく自己の利害若くは意志(我意なり)に契はざる時は無理に之れを抑壓する特權を有するものに非ず、況んや兄叔の資格は弟甥の保護と稱する口實の下に其財産をも自由にする權利をや又かゝる壓制に從ふ事を以て義理と思ふは甚だしき誤謬にして之をしも義理篤き者と云ふべくんば日本人の義理は誠に憐れむべきものなり。かゝる弟甥を見る毎に余は常に何が故に兄叔は其弟甥よりもより多くの財産を讓り受けたるかを怪しむ。受け得たる財産と權利とは彼等を壓制する爲めか將た彼等を保護する爲めか

又結婚に就きても一種の習慣あり。此國に於て年若き婦人及び未だ經驗なき青年は互に相交際せず。殊に結婚前に於ては嚴密に相互を警戒す。これ名譽といふ一種の制裁力が斯く要求するならんか。其注意警戒や誠に宜し、然れども自己を守るに事に於て斯くの如く嚴密にして然も他を待つに何ぞ其れ斯くの如く寛容輕卒なりや。一面の識もなき男女を擁し來りて直ちに之れ汝の妻なりと告げ夫なりと命ず恰も疾風の如く迅雷の

如し。然も多くは父兄の都合上より打算し來りて、單に斯くの如くすべしと宣告するに過ぎず、殆ど不義に近し。抑も結婚は斯くの如く前途長き子女を他人の利害の犧牲に供するの謂に非ずして、彼等をして自由なる新天地を開拓せしむるにあり一對の男女をして琴瑟相和し互に仲善く生活せしむるにあり。其第一要件として先づ互に相知り、信任と尊敬とを新天地創造の神の御前に捧げしめざるべからず。

斯く——互に相知らずして相婚するは一個の弊害なりとせば、又餘りに相知る事過ぎたるは猶及ばざるが如く同じく害なしとせず。然れどもかゝる自由結婚の弊は未だ多くあらず、之れを憂ふるの日は尙遠きにあり。今一言風規正しき結婚法を附記すれば、そは一男一女が道德法に合したる合法的契約を以て之を定むるにあるのみ。

又子女が成人して其兩親と共に働き生計の道を助くるは至當の道なり。且其親の老いたる時は自身が幼時に受ける恩惠に報ずる事亦子女第一の義務なり。されど父母の權利にも一つの限界ありて絕對的の親權と雖法規に反する事は之を行ふ能はず。凡て無理なる事過激なる事は誰が行ひても矢張無理なり過激なり。日本に於ける親の權利なるものに就て恐るゝ所は餘り無理に過ぐるにあり。過激に亘りて飽くまでも其權能を執行する時は却りて反抗を生じ對者に於ても亦無理を行ひ過激を敢てするに到らざる事なきか。若し兩親が子弟に要求するに自己の權利以上に出づる時は後日必ず其要求すべき權内なる服從と尊敬とをも受くる事能はざるに至るべし、

又父母の死に臨みて落膽せず傷心せず、人々に餘計な心配を懸けまじと强ひて平氣を粧ひ悲歎を包み、或は朋友親族等の葬に會するものに對してワザと何等の變事もなく不幸もなき樣子に取繕ふは或は日本人の一種の勇氣ならん。然れども直に死人を折り疊みて棺に納め、恰も一個の小包荷物の如く包み終りて家の片隅の薄暗き所に置き或は談笑し飲酒する底の勇氣に到りては吾人亦何をか言はん。最後に大切なる遺骸を墓所に送るに及び、下等なる傭人足の多きを誇り。人通り多き道を迂回して練り行く習慣は、恐らくは東洋の禮式に適はざるべし。

來世の有無に就て人々種々なる所說をなすと雖も、要するに死は人間が現界より他界に移轉する人生最後の大儀にして最も眞面目なる出來事なり。故に飽くまで

も重々しく取扱はざるべからず。余は此點に於て大に反省を希望するものなり、否事實其物が之れを要求す、如何なる器物に死者が入れられても、未だ知らざる他界に旅立つ者に向ひて常に尊敬と沈默とを守るは人間至當の事に非ずや。見よ葬儀の禮を。花と香を捧ぐるは僅かに尊敬と沈默の至誠を表するなり。死者の前に至誠を表して猶且喧鬧を顧みざるは大罪と云ふべし。」

又公吏或は會社員等に就て一言すべきは、此等の人々が常に交情を温むると稱し或は胸襟を開いて談笑すと稱して集會する所に於て相互間の友情と利益とを要求し、又公共の利益もこれによりて計る事を得べし。然れども此等の集會は一定の目的もなく多々益繁くなりて、或は單に義務的に習慣的に行はれ、何等の益する所もなく、唯其費用のみ嵩みて遂に吏員は其收入、資産をも呑み盡すに到る。而して彼等の集會は多くは亂酔狂舞に終るなり。憐むべし交際場裏に立てる人々は正しき家庭の父たる事を得ず。正しき夫の資格を得する事を得ざるに至る。弊害是より大なるはなし、其害家庭を傷け、延ひて社會全般に惡影響を及ぼすを以てなり。

以上を要するに、吾人の最も禍殃とする所は習慣なるものは假令不正なりとも遂に法律と成る事にあり、而して人一たびかゝる習慣法に支配せらるゝ時は假令其非を自覺するも、これ習慣なるを以て之を如何ともする事能はずと、終に之れに反抗する力もなく又之れを怪むものなし。習慣法を脱却するの難きは今更に前言を繰り返すの要なし、唯吾人の言ふ所夫れ或は斯くの如き一言の下に葬られんか。

故に眞に憂世愛國の至誠を有する者の戒心すべきは實に此點にあり。如何なる習慣の前に出でゝも、其習慣が不正不當ならば斷乎として之を斥けざるべからず。如何なる勢力と雖正義と道德法に反抗する能はざる事を確信せざるべからず。良心が一たび命じ一たび禁ずる所に於て、習慣が如何に之れに反對するも、必ず良心に歩を讓りて、服從せざるべからず。眞に國家の風俗習慣を改良せんと思ふ志あるものは、此勇氣と見識を以て世海の風浪に向はざるべからず。嗚呼かゝる人物果して幾何ぞ。

（未完）

太平洋の兩雄

旭旗と星旆の今後

北米にて　篠原沼東

「曩きには食料品を輸出して、歐洲の農業界を苦しめたる米國は、亦更らに製造品の洪水を以て全歐洲の產業界を溺らしめむとす」と。嘗てボリユー氏をして嘆ぜしめたる彼れは、今や愈々商務省開設の必要に迫られ、其の議案すでに上下兩院を通過して、二月十四日、大統領は檢事總長フックス氏と協り、諸內閣員の面前に於て、最後の署名をなせり。而して其の商務卿の任に當る可きはヂョージ、コルテルユー氏にして、七月一日を以て、新省の事務を執らんとすと。氏は故マッキンレー及び現大統領ルーズベルト氏の秘書官として知られたる人、米國實業界の前途、これよりや益々見る可きものあらん。

近時の實狀を以て觀ば、米人は自ら經濟世界の覇權者を以て期し、歐洲人は只管恐米熱に驅られて、彼の恐黃病の如きは、最早昔日の夢と去れり。さりながら米國商業の勢力の波及する所、豈に啻に歐洲のみとせんや、東洋に於ても亦、支那に、滿洲に、西比利亞に、はた日本に、米洲の產物は到る所盛に輸入せられて、而も年々多大の增額を示しつゝあるを見ずや。殊に東洋と米國との貿易は、將來益々密接の關係を有す可き、自然の道理の存するあり。即ち現時の狀況よりするも、東洋は米國の產物を必要とし、米國は亦東洋の供給を仰かざる可からず、況んや地峽運河の開鑿せられ、米國商業の中心と、東洋商業の中心と、互に大平洋によりて、直接の交通を開始し、共に起つて其の海上權を左右せんとするに至らば、兩地の貿易、果して尙盛ならざるを得可きか。米大陸を代表する合衆國と、大東洋の母國たる日本と、共に大平洋岸の雄物、其の前途の關係も亦密接繁多ならざるを得んや。

（一）

地中海時代大西洋時代を經て、東より西に旋轉しつゝある世界帝國の中心は、今や眞に大平洋岸に移り來れり。東は南北亞米利加の海岸より、南は大洋洲、ボルネシヤ諸島に及び、西は東部西比利亞、支那、日本、暹羅、東印度、蘭領印度より、濠洲沿岸に延長し、十四億の人口、約其の一半を抱有し、其の海上貿易額、年々殆んど十億磅に達しつゝある大平洋は、正さに現世紀の活劇場となれり。されば其の沿岸に於ける出來事の、歐米人士の眼に映ずるは、さながら閃電の射るにも似たり、斯かる中に立つて、列強の何れよりも勝りて、此上なき天惠を有するものは、實に北米合衆國な

り。

今こゝに其の數點を擧げて例せんか。米國は大平洋岸に於て、幾多の良港に富むこと、是れ其の一なり。米國は對岸に於て亞細亞の好華客を有し、歐洲諸國が印度洋を迂回し來るの不便なきこと、是れ其の二なり。貨物集散の中心としてマニラを有すること、是れ其の三なり。ブリトーより布哇を經て、マニラに至る航路は、赤道潮流により、マニラより、上海、横濱、桑港を經て、ブリトーに歸航せんには、年中絶間なき順風のあるありて、大平洋航行に少なからざる便宜を與ふること、是れ其の四なり。加之、彼れが無盡藏なる天然の富源は、何ものか能く之れに優るを得ん。彼れは實に現世紀の寵兒なり。米國が今歐洲に向つて開始したる商戰は、全世界の凡ての國民を、その經濟力の膝下に屈服し終る迄は、止む可からざらんとするもの、是れ或は眞に彼等國民が、現時の抱負たる可し。

民族の膨脹と、經濟の膨脹とは、是れ現に列强の取れる唯一の政策にして、彼の所謂帝國主義の如きも、其の動機は亦た、全然經濟を離れて解する能はざるに至れり。於是か、世は擧つて殖民事業の擴張を計り、商業的競爭の劇甚を來たし、更らに進んでは、自己が勢力範圍を擴めんとするの急なるより、波響は遂に小國の運命に及び、大王の壓迫益々甚しく、彼等は今や大國の併呑に甘ずるか、幾多小國の團結して、大國の壓迫に對抗するか、兩者其の一に居らざる可からざるに至れり。さりながら斯かる現象は、長へに如此にして止む可きか。縱しや軟弱なる無能の種族は、容易に同化し去らる可しと雖も、苟も氣概ある硬骨の種族は、却てこれが爲めに警醒せられ、訓戒せられ、一大團結の下に、有力なる反抗的競爭を試むるの機あるや必せり。若夫れ然らんか、結果は即ち兩者の和合となり、更らに人種の統合となり、これよりや國家は、國際法によりて活動し、正義によりて交を通ずるの世界とならん。是れ必らずしも今日の夢想にあらず、近き將來に於て現出せんとする、寧ろ然らざる可からざる現世紀の趨向なり。

大勢果して然りとせば、商業の勢力も亦これに則らざる可からず。世界の列强が競うて保護政策を遂行するあらんか、極端なる結果は、其の商業的壓迫の劇甚となり、大團結と、小團結との、壓倒、反抗、また如上の狀態に終らざるを得ず。於是か、再び自由貿易の盛に行はれて、諸種の團體はこゝに消滅し、所謂世界を

通じて貿易に國境なきの觀を呈するに至らん。此等の現象より推して、吾人は我が親好國米國、殊に商務卿コルテルユー氏に望まんとする所あり。

若し公平に米國と東洋との貿易、寧ろ日米の通商貿易に就て觀せしめば、恐らくは、必らずやこゝに奇怪なる感を促すものあらん。米國は其の製造品を保護するの國なり、其の輸出品の重なるものは、悉く未製品に屬せり。日本は製造品を需用するの國なり、而して其の我國に輸入するもの丶多くは、何れも皆な歐洲、就中英國を主とせり。是れ畢竟他なし、米國が製品保護の結果として、其價邦内に貴くして、爲めに進んで邦外の諸國と競ふに堪へざるなり。如此く國家の庇陰によりて發達せる工業品、關税の城壁中に製造せられたる産物の、外國の市場に現はれて、自由制度の下に産出せられたる、他國品に壓倒せられんとするは、到底數の免れざる所、敢て怪しむに足らずとするも、今日の米國にして若し尚ほ將來に向って、斯かる保護政策を去る能はず、斯かる城壁を壞つ能はずとせば、本邦も亦多くの製品を彼れに求むる能はず、兩者互に其の對岸に於て睥睨せざる可からず。橋渠を撤して、益なきに迂路を取らざる可からず。兩國現時の内狀果して如此き現象を以て利なりとするか。大平洋に於ける兩雄國、果して如此き狀態を以て安ず可きか。若し假りに現今の米國にして少なくとも桑港輸入の貨物に對して、彼の法外なる課税を免れしむの量あらしめば、吾人は斷言す東洋の貨物は忽ちにして輻湊し、やがては運賃の廉價となり、米洲の製品亦歐洲の製品を東洋に凌ぐの結果となり、更らに進んでは大平洋貿易の隆盛日米英通商の均勢を持するに至らん。是れ今日に於て智者を待つて後ち知る所にあらざるなり。

知るものぞ知らん、一千七百七十六年七月四日、合衆國獨立の教示に云つらく、英國は世界各國と吾人との貿易を絕てりと、而も彼れは今や自ら世界の重なる保護貿易國となれり、或はまた彼れはこれによりて今日の富强を得たりとせば、何ぞ進んで其の幼稚なる境域より更らに堂々として大人らしく自由貿易の域に入らんとはせざる、ツラストの合衆國内に暴横なる、主として關税の援助によるもの多く、同國内常に物價の不廉なるも、亦主として關税の障壁あるが爲めなり、マキンレーは流石に國内に於けるトラストの横行に堪へ兼ねけん、殆んど多年の保護政策を放拋せんとして、不幸兇刃の銹となりぬ。縱しや然らずとするも、斯か

る組織の結果は勢ひ外國に向つて其の産出品の輸出を迫らざる可からず、否らずんば終には今日の獨逸の如く、生産過多の患ひを恐れざる可からず。近年合衆國が暗々裡に頻りに世界の各方面に向つて販路の擴張を急ぎつゝある所以のもの、畢竟するに此所に慮る所ありて然るのみ。新商務卿コルテルユー氏は故マッキンレー及び現大統領ルーズヴエルト氏と志を同うする人、吾人は意を強くして早晩日米兩國間に於けるレシプロシチー、ツリーテーの締結あるの日を待たんとす、是れ獨り日米通商の爲めのみならず、亦實に大平洋上の貿易、世界商業の動靜に對して、時勢の趨向が正しく世界經濟の覇權者に向つて要求する所なり。

(二)

如此く米國に望むからには、又更らに我國民の注意を促す可きものあり、苟くも東洋の母國を以て居り、振運隆々の米國と並び起つて權を大平洋上に爭はんとする程のもの、須らく今一層の奮勵と思慮とを要せざる可からず。

濠、米、亞、三大陸間に介在して、自ら世界貿易の問屋たる好當の地位を有する日本、若し英國今日の成功が其のはじめ歐米兩大陸の中間に位して、所謂兩者の中繼ぎ貿易者たりしにあるを思はゞ、之れと狀態を同じうしつゝも何故に逡巡其の隆盛を計らんとはせざる、吾人は海軍の必要を認めざるにあらず、而も其の唯一の機關たる商船の增加に代ふる能はず、海岸攻擊の爲め、沿岸貿易妨害の爲めには、海軍は最も其の必要を感じたる時代ありき、然るに今や一國の各部及び中立なる貿易港の間に於ては、商品を運搬するに專ら鐵道を使用するに至るを以て、海軍の力は頗る減少せりと云はざる可からず。本邦に於ては海軍は寧ろ現狀に止め、更らに商船の增加を計り、低廉なる貨物の運搬に注意せざる可からず。見よ我が商船の數は世界の二等國、若しくは三等國にも及ばざらんとするにあらずや。殊に帆船の數の極めて僅少なるは誠に我海國民として其の本分を辨へざるの甚しきものならずや。みだりに海軍擴張を唱ふること勿れ、將來の海軍はたゞ商船の保護を以て足れりとせんのみ。是れ吾人が我國民に望むの一なり。

近時の帝國主義は領地の獲收よりも更らに貿易の擴張に付て、ひとしほ重大の關係を有せり、されば强大なる國家は、益々海外の市場に賴らざる可からず。四千五百万の人々を有し、年々の增加殆んど五十万、世界

稀れなる増殖力を以てして、今日すでに國土の狹隘を感じつゝある日本、其の殖民の狀況は如何、海外市場の設備は如何、これ今更ら吾人の言を要する迄もなく、識者の夙に憂慮する所、而かも尙ほ依然微々として振ふなきは如何、此に於てか吾人は我が宗教家に向つてこれが振張の一助を得んと欲するなり。今や歐米列强が其の民族的發達を計るに當つて、先づ第一に注意す可きは布教の勢力なり、所謂國權は宣教師に從ひ貿易は國權に從ふとの語あるを以てするも、如何に其の重きをこゝに措かるゝかを知り得ずや。殆んど我國民一般の心靈を支配しつゝある佛教、其精神上の領域は雪山々下のニーポールより印度洋頭の錫蘭に至り絕東、中央亞細亞、西比利亞に達し又遠く瑞典のらぷらんど地方に及べり、而して此の教理中に生死するもの凡そ五億万に垂たり、我が宗教家は先づ海外に於ける我殖民を教導すると共に、進んで大に此等國民を警醒し、世界に並び起つて宇內衆生を濟度せん事の望ましきなり、是れ精神上の領土を擴張すると共に、并せて殖民事業の振張を行ふ可き所以ならずや、或る程度を超へざる限りは、正統なる野心は凡ての方面に於て缺く可からざるなり。知らず我が宗教家果してこの氣力ありや否や。是れ吾人が我國民及び宗教家に望むの二なり。

地位上よりするも地勢上よりするも、我國は到底商業を以て起たざる可からざるの國なり、而して其の多大なる人々の増加は相俟て殖民事業の擴張と海外新市場の設備とを急務とする所なり、然るに由來郷士に戀々たる我國民は未だ其の隆盛を來す能はざるのみならず、すでに海外に移住せるものに就て見るも、其の思想其の行爲到底將來の殖民成功者として迎ふる能はざるなり、猶太人の富獨逸人の忍耐は所詮我國民に望み難からんとせり。

我國民は或る點に於て能く佛人に髣髴たるものあり、殊に其の商業上の狀態に於て最も能く類似する所あり、即ち一般に坐商人にして海外の出貿易を好まず、其規模概ね小仕掛けなり、剩へその信用を重せざるは寧ろ支那人種にも劣れる事遙かなり、如此にして尙ほ東洋の母國として起ち權を大平洋上に爭ひ得可きか、我國の地位は正しくこれを證して餘りあり、且つ我國民の大國民たるの大思想なきを如何せん。噫我國民は何時までか醜業婦供給國として知られんとするか、太平洋岸に新日本を創設するの日は如何、此の新世界の地に於て行宮を營み、行幸の榮を待つ果して何の日ぞ。

せめては我教育者の速に獨立の氣象と遠大の思想とを鼓吹して、有爲なる次代國民を養成せん事を望まざるを得ず。教科書問題の醜聞の如きは我國民の耳にせんとする所ならんや、これ吾人が我が國民に望むの三なり。

今に當て吾人が如此きの言をなすは必らずしも日本を罵倒せんが爲めにあらず、彼の米國と並び起つて、竟に世界帝國の中心たらんとする大平洋上の兩雄、即ち世界的大日本の國民を勵まさんとするの微意のみ。シーレーが英國の膨脹を論ずるの中に云はく「吾人が亞米利加を占領したるは、其空虛に乘じたるが爲めにあらず、他國よりも多くの殖民者を輸送す可き船舶を有したるにもあらず、固より亦他國の占領より横奪したるにもあらず、唯吾人は移殖の事業に於て競爭者を有したり、或る關係に於ては吾人よりも一着を先じたる競爭者佛國を有したればなり」と、吾國民は幸に好敵手米國を有せり。望むらくは旭旗星旆と共に大平洋上を照して後の史家をして再びシーレーの言を我れに繰返さしめよ。



海外大勢

佛國殖民の衰勢に就て

佛國殖民地は曾て勢隆々たる觀ありしも、今や全く一の失敗に外ならず、彼國多數の有名なる論者は皆かくの如き說を抱きぬ殖民帝國の建設は到底佛國々民の才能に適はざる事業にして、豫想の多くは前途の衰退慘落を意味せり、殖民地の半官報たる巴里發行の「ジユールナルドートルカール」は佛の殖民帝國の生命に關する多くの腫物(則ち國民の病弊)を滅盡すべき大勇氣を要求し、殖民地豫算事務官長たる元老院議員ルイボーリトア氏は全今紙上に於て殖民地支出增加の憂ふ可き現象あるを示して、曰く

支出金額は千八百八十五年に三千四百七十二万フランクに上り尚其外に補助準備費として七百八十四万四千フランクを用意し置かざる可ら

ず、然るに殖民地にては能ふ限りの節約を試むるにも係らず議會にて協賛を與へたる此補助準備費は常に不足勝なりき、例之千九百年殖民地に要せし總額は實に一億二千九百九十二万八千フランクに上れり、同誌記者は如此にして佛國は何等の利益を殖民地より得つゝありやと嘆じ不調和極まる統計上の實例を掲げて曰く

佛國と其殖民地間の商業は三億一千三百万フランクに上れり、もし之を大英國の殖民地商業と比較する時は直に其の十分の合理なるを知る可し、大英帝國は僅かに年々六千二百万フランクを其殖民地に費やし、依つて以て事業上の收入五十三億五千六百八十八万八千フランクを得つゝあり。云々

佛國殖民地に於ける悲慘の現象事實は此に止まらず、元老院議員ポーリアト氏は過去六年間に佛本國より殖民地に移住せるもの僅々四千人に超ざるを悲しみ、更に現在住民の數を知る能はざるを說ひて曰く

吾人は殖民地に於ける歐洲人全體の人數を知るを得るも、佛國人の全數を知る能はず我政府は之を知るを以て不必要の事なりと思へるか、然り極て少數なる佛國移民の數を知るは何等の必要もなかるべし、蓋し佛國殖民地の少しも振はざるは些も疑なき所にして、吾人は此等の點よりして佛國は過去二十年間殖民帝國建設の爲に大々的失敗をなせりと斷案を下さゞる可らず、換言すれば吾人は無益の勤勉に我精力を消耗せり、吾人をしてかく悲觀せしむるを休めて第三共和政體時代に於て了手せし此事業を永久に殘さるべき名譽の一紀念にたらしむる果して何れの時ぞ

ポーリアト氏の意見は佛本國は其殖民地より年々生産價額十二億万フランクを得ざる可らずと云ふにありて、尚ほ大英國殖民地と同じく自治政治の實施を說けり　且つ氏は佛國が爲すべきは殖民的に適する自國民の製造にありと續けて曰く

二十年前佛國が殖民地を割取せんと企てし時、彼は一の意志を有せり、其意志たるや出來得る限り速に諸地方を征服し、他國をして一指を染めしめざらしめんとせり、然れども今日に至ては殖民地掠取の時代は已に過ぎて深遠なる基礎上國民性格の根本的新時期を建設すべき時代となれり。と

更に巴里發行の「ジユールナルデンエンスミリテール」誌は曰く、佛國殖民地に要すべき策は以上の外、内外の敵を防止し爲めに佛國殖民地に於ける軍隊整頓に努めざる可らず云々。

現下の露國對バルカン問題

已に屢く傳へられし如くマセドニヤに蜂起せし叛徒の勢力侮る可らざるものあり、近日に至り更に大活躍をなさんとするの狀態となり、爲に露國外相は嚴しき警戒書を同事件に直接間接の關係を有せる土耳其、ブルガリヤ、セルヴイヤ、其他の巴爾幹諸國に送り、別にマセドニヤ改革綱領及事體已に收む可らざるに至れる由を記して一書を土耳其政府に送り大に言ふ所あり、而して又外相ラムスドルフ伯は自から墺太利セルヴイヤの首府を訪ふて叛徒に對し又マセドニヤの改革に付き步調の一致を約せり、土耳其政府も改革に付ては之を約束せり、然れども其申出せる提案に就き土耳古政府及び墺露の新聞紙は全然不合理のものなりとせり、此問題に關し聖ペテルブルグの「ノウオスチ」紙曰く

今やマセドニヤ問題は近き未來に於て實際の結局を來たすべき狀況に迫れるは明なり、もし土耳其政府の提出せる改革案にして不完全ならば此をして一層完全ならしめ直に土耳其政府に其實行を施さしむべし、吾人の論斷を以てすれば此叛亂を鎮るの方法は只一あるのみ、即

ちマセドニヤを全然自治體となし基督教の首領又は總督を戴かしめ、而して其に對する土耳其の主權を明に認めしむるにあり、如此方法を實施するに付き土耳其皇帝の許容を得ん事は中々に難かるべし、されども土耳其皇帝の永久の利益より見るも此問題の最上の解決はマセドニヤに完全なる自治を行なはしむるにあるのみ、蓋し此は遂に彼の承認すべきものならんか。

同紙は尙進んで曰く、巴爾幹半島に勢力平均を約せる墺露兩國はマセドニヤの叛徒を煽動して土耳其政府に對する反抗を激ましつゝあるブルガリヤに向て大打擊を加へざる可らずと。

而して一方に於て歐洲各國に送りし土耳其政府のマセドニヤ事件に關する通牒に曰く

マセドニヤ洲に於ける不穩なる狀態の主たる原因は改革黨の中心ブルガリヤに存する故なり、此叛亂は國內平和の爲にも、亦マセドニヤの基教人民の爲にも必ず鎭壓せしめざる可らず、而して諸地方に於ける擾亂に對し責を我政府に皈するは不當の事なり、擾亂に付て只恐る可きものはブルガリヤ國內に於ける叛徒の動作を彼國政府が默認せるにあり、蓋し現今の狀態はブルガリヤ政府の野心と貪慾に基ひするものなり。

此を以て見れば、ブルガリヤはマセドニヤ獨立戰爭に依て利を攫み又あはよくば其土耳其領を掠取せんと欲せるものゝ如し、「ノウエーウレミヤ」の如きも「ノウオスチ」と仝樣の意見を揭げ、尙千八百九十七年の墺露條約即ち巴爾幹半島に於ける勢力平均は、今尙充分有効活動せるものなりと言へり、又墺太利外務省の半官報「フレムデンブラット」紙も露國新聞に仝意し、巴爾幹半島の諸獨立國は墺國政府に寸毫の援助なら希ふ可らず、而して土耳其國の基教地方に關するに國障の紛擾は大ならしむ可らず、と論せり。



彈丸の上に座せる土耳古

濠洲に於ける民政黨

濠洲は貴族政治に一變せんとする危險なる傾向ありとて激しき反對の呼聞えつゝあり、新合同政府は官吏を以て人民以上のものとなす思想を發達せしめつゝあり、此傾向に付て勞働者機關紙の如き頗る壯快なる批評を試みたりシドニー市の急進新聞「ブレッチン」の如きも激烈なる攻擊の矢を放ち、「もし所謂進步せる濠洲思想を仔細に解剖せば其裡面には民政々治をして貴族政治に代らしめん

とする秘密顯明かに存生せり」と、云へり蓋し此はかの官吏派の機關紙たるメルボーン市の「アーガス」がなせる言に對して言へるものにして、此アーガス紙は未だ決定せざる濠洲の首府に付き論じて曰く

今後數年間は我濠洲總督の地位に付て疑問解決せられざるべし、吾人は濠洲總督は加奈陀總督より低位なるものと確信す、彼が得る所の俸給手當は加奈陀に比し甚しく少なく、而して要する所は五割の多額を要する事已に明白なり、而して最も富有なる都市は以て我首府たる可きが如し、若し反對に吾人にして偏鄙の地に首府を有せば社會上の快樂利益を失なふに至るべし

と暗に首府を華盛頓の如く大都會以外に置かんとする一派の議論に抗したり勞働者機關紙は之を以て明白なる總督に對する辯護なりとせり、「アーガス」紙は更に總督に論及して總督は單に記章に非ずと切言し、曰く大なる自治體の首長は如何なる場合に於ても其勇氣や智識と才能の發現を要するものなり、彼は一國の勢力附著地たり、全く複雜なる事務や交渉等を離れて見るも、法律圏内に秩序を整止するは彼の使命なり而して他の高等官吏等又は本國の閣臣は其有する權力に依り殊に議會開かれざる時機に於ては容易く專制行動を行ない得可し、此危險に逆ふ可きものは即ち會議中の總督あるのみ、總督の勢力は花々しく現出せられざるもかゝる狀況に於て絶へず注がれつゝあり、されぱもし總督にして存生せざらんか政躰一日も安全なる能はず爭奪分割の紛紜終に絶ゆる時なかるべし。

今や我南岸の濠洲は共和政治の希望者と總督政保持者と兩者の衝突やうやく甚しからんとし英國に取ては加奈陀よりも却て濠洲に對する統治難を呼ばしめつゝあり。

海外雜纂

トルストイ伯の現代教育觀

トルストーイ伯は近來現代教育に關して一大痛棒を加へ其大意は載せて露國の新聞にあり主意に曰く

人は自己の特性を發揮せんが爲に存在す、而して現代の教育は此自己を殺すものなり、現代の教育は自からは惡人ながらも如何にして兒童にのみ其風習を敎かんかと希ふ一の科學なり、又自然に逆ひ健康の法則に背き生活の方法を顧みずして只偏に如何にして善たらしむ可きかを教ゆる一の學問たるのみ、二ながら狹隘無用の事にして大目的を逸し去れるものと云ふ可し。

自己の性質改善を打捨て置きて只單に他人の性情を導き教へんとせば其は中々一通りの困難事に止まらざるべし、只複雜只困難而して結果は何物も無し、一度吾人にして躬濟ふして后初めて人を教ゆべき事を實現せしむれば、困難は消へ疑問は單純明白なるものとなる可し、如何にして生活せんかを知るは如何にして教へんかを知るなり、教育に對し根本の原則たる可きものは適度なる生活をなして后躬を濟ふせよ、完ふせよ、而して兒童に對し何物も隱す所勿れ、小兒をして父母の弱點を知らしむるは、反對に小兒をして父母に明暗兩樣の性質ありと思はしむるよりもむしろ勝れり、然るに父母は自分等の短所缺點を修正改善する事なく、

徒に兒孫の誤を正さんとなす謬哉、小兒は成年者よりも感動し易きものにして父母の缺點短所は直ぐ之を見聞し實現せしむ、殊に最大の惡たる僞善虛飾の風の如き尤も感染し易き者にして、其結果は父母に對する當然の敬意を失し、道德上の訓戒を用ひざるに至る故に尤も效力ある德育の最上最高の要件は眞なるにあり、從つて眞を語るに適はんと欲せば、父母は宜しく自分等の生涯をして高潔純眞ならしめざる可らず、然らずんば果して何の效かあらんと、

正直なれ而して眞實なれ、兒童に隱す所勿れ而して隱すべき理由なき生活をなせ、是教育の大要素なり。

スペンサー氏の逸話

二月の「ウオールヅウオーク」誌上にジョージイレス氏はハーバードスペンサー氏に付き面白き逸話を公にせり今其一二を抄せんに

何如にして大著述を成功せしか

千八百六十年、彼が始めて「哲學原論」に筆を染めし頃、彼は蘇古蘭の一湖畔にありて筆記者を備ひ居れり、其頃の慣習は十五分間口述して十五分間血液の循環を盛かんならしむる爲に撓漕をなす、又十五分間口述し、かくて一時間を四分し、午前中は口述と漕撓に費し、而して午后に至ては決して働く事なかりき、其より十年後に至り健康甚しく衰へし頃には、毎日ラツケツトを肩にして倫敦の北部なる某テニス場に遊び、筆記者と競技の隙々に口述せり、彼の心理學中の尤も奥妙なる部分は實に如此時代になされしものなり。

又かの「綜合哲學」を成せし頃の彼の日々の慣習は、午前九時に家を出てケンシントン公苑に往きて十時近くまで散歩せり、其狀頭を少しく垂れて歩調割に急にして心は想に耽れり、されども知人に遭ふも知らざる程にてはなかりき、而して十時に至れば正確に家に皈りて著述に從事せり、此家はレーンスタープレースにありて恐らく何人も知らざりし隱家なり、一度執業し始むれば午后一時晝飯の時來る迄は寸秒の休みもなく筆を走らせり、されどもし少しにても身躰に異狀を感ぜんか直に家を出てゝ散策せり、又氣色勝れたる時は葉卷を喫する事もありて、自から之は思想の湧出を促がすものなりと言へり。

彼は一度口述せし言葉を決して繰返す事なく又決して誤る事なかりき、約二週間位口述せし后彼は其訂正に從事するを常とせしが、其時は只長き句を短かき句と替ゆる位にて少しも大躰に變更を來し又は少許の增訂をなす如き事なかりき、氣色勝れたる時は半日よく一千語を口述し、不健康の時と雖とも平均一朝三百語を下らす。

彼は決して多讀家に非ず

彼は決して多讀家に非ず、されば圖書館等より書籍を借用するとも少なく、自から購入する事も稀なりき、而して其讀書時間は朝飯或は晝飯の后と云ふ如き零細なる時に多くして午后はアセニーヽクラブに行ける時などの外讀むヿ稀に夜に入つては少しも手にせざりき、不眠症に罹るを恐れし故なり。

彼はかくの如く諸事に注意せしを以て健康をよく保持するを得、體力氣力六十歳迄は少しも衰ふる事なく八十一の高齡に至る迄眼鏡を用ふる事なかりき、又其運動に至ても今年八十三歳に達して漸くブライトンなる住邸の周圍を馬にて廻乘せし習慣を減ぜし位にて、壯時にはローンテニスに熱中し、芝居やオペラにも屢通ひ、又よく北海岸にて自己の創意になる釣針を用ひて釣魚に耽りしともありき、而して亦外に出てゝ食事をなすとも數度にして何等の務もなき時はたゞ骨牌打球を弄せり、亦巧妙なる談話者として名を博し、或時の如き一貴女彼と共に踊らんヿを請ひし

時、余はダンスを好まず又其樣なる婦人に撰はずとて大に赤面せしめし事ありしと云ふ、併も彼は多くの親友を有しジョージエリオット夫妻の如きも其中に算せらる。

文學者は貧困ならず又薄倖ならず

プレットハートの死后遺產を檢査せしに僅に千八百弗以上に上らさりしより小說家遭遇の聲歐米に聞ゆるに至れり、或論者の如き小說家は一の大傑作を公にすれば彼は必ず貧困に死すべしと言へり、然に細直なる「コムマーシアルアドヴアータイザー」紙は反對論を唱へて曰く

人は死后に遺せし財產の高を以て生前の收入を推量し得可きものにあらず、其は只彼の經濟が如何に爲されしかを知る手掛りたるのみ、一般の風習規則として文學的職業は其歷史より見るも甚だ好き報酬を得つゝあるに非ずや、此は今日に於てのみならず過去に於ても然り、名高き演戲者たりしゴールドスミスは貧に死せり、されども勤儉なりしポープは富めり、サーウオーダースコットは困死せり、されども彼が放縱無賴に費せし其著述の收入は優に一大財產をなす可きものなりしなり、ディッケレスは塲洗ひより身を起せしも死時には全く著述に依て儲けし財產二十五万圓以上を殘せり、其他サッカレーの如き、ブルワーリットンの如きは又ッロロップの如きは官職の俸給を別にして年々筆に依りて得る所四百弗に上ると自から言へるに非すや、由來詩人に至ては薄倖の名を附すれども是亦事實決して然らざるなり、見よバイロンは如何、テニズンはよく詩作を以て貴族生活を送りしに非すや。

顧て米國に見るも亦仝樣なり、アービングは文學上の述作により財を積み、フエニモーアクーパー亦富有に死し、其他ホーソーンの如きロングフエローの如きローヰエルの如き何れも筆に依て安けく世を送れり、勿論エッガーアーレンポーの如き貧に生れて貧に終りしものもあれとも、云ば全く彼の性情に任せ奔放せし故にしてもし少しく引締りしならんには決して貧に苦しむを要せざりしならん、充分安けく生活し得可き地位を得しとも數度ありしも、都度直に其を捨てゝ顧みざりしが如き、畢竟自暴自棄と稱するの外なし。

以上より見れば或文學者の死后は遺產の數ふ可きものなきを以て直に文學者薄倖と叫ぶが如きは實に淺薄なる事にして、遺產の多少は決して生前收入の多少を證するものに非ず、見よ大銀行家の死后一厘の遺財を存せざりし事實存するに非ずや、謹直苟くもせざる銀行家にして然り、放縱散漫の著述家如何んぞ然らざるを得んや。

獨逸皇帝の性格

獨帝維廉二世の政策を充分熟知せんと欲せばかのマキヤベリーの著書を讀に若かずとは近時獨帝を細に研究せる外國諸新聞雜誌中有名なる識者の等しく唱ふる所なり、獨帝がマキヤベリ主義の浴爐中に成長せしとは吾人の屢々耳にせし所なるが、かのマ氏ハ名聲はジヨンモーレー氏の穩健なる辨護なるにも係らず、到底世の歡迎を受くる能はず愈出愈酷なるの觀あり、獨帝のマキヤベリー主義感染に付て倫敦「スペクテートル」誌は曰く

維廉二世は少壯尤も感動され易き時代に於て、プリンスビスマルクの新マキヤベリー主義の下に育まれ、獨國を主宰するは自己最大の義務たる

を知ると同時に、不幸にも一國を左右するには尋常一樣の手段の到底用ゆ可らざるものなる事を悟り、又大なる經世家たるものは約四世紀前狹猾なる一以太利人が計畫せる政略を行はざる可らずと信せり、而して帝は此主義を深く研究すると、共に其性格上に萬古消ざる印象をなすに至れり、されば吾人は帝の性格を觀察するに極て不思議なる結合物たるを見るべし、半面は敏捷多藝にして半面に深遠と公平を缺ける彼の性質は全くビスマルク主義に養はれたるものにして皇帝たる品位より見て完全なる能はざるべし、ビスマルク黨の狹猾なる政策は熱心及浮躁を以て混合せられたり、其結果は思ふに極めて紛雜破格のものなるべしと雖ども、他國民の見地より言へば此混合は又頗る危險なる一なり。

獨帝は吾人より見れば決して特殊の大智力を有する人にあらず、勿論又決して腦力の缺乏せる人にはあらず、されども彼は聰明深妙なる智識よりも寧ろ却て浮誇敏鋭の人たり、彼が怜悧の人たると同時に非常なる智力を有せるは疑なきも、併も彼は只事物の表面をのみ觀て眞髓に於てよりも却て零細たる邊に於て喜ぶの風あり、彼の精神は一二の大目的を把つて結局迄之に固着執持する如きものならずしく、有りと有ゆる事物の見本を以て充され、併も直に霧散しさる風なり、要するに獨帝は一の成功せる精神上の新聞とも云ふべし、彼は常に新奇の問題を揭出して世を驚かし、又常に豐富なる智識を以て世を愕かしむるは實に儕輩に超越せる論說記者たるに非ずや、新書物や新思想は少しも彼を驚かさず、又恐れしめず、又困厄せしめず、只單に其好奇心を惹くのみ、彼の心は新事物を吸收しかの舊文明に戀々する人にある如き精神の固定の如き決して彼に近付かざるものなり、されども此浮誇熱心活躍せる精神は多くの長所を有すると共に時として人と物に對し公平を缺く事あり、もとより遲鈍の人常に正當に判じ急燥の人常に中正を誤るとは言ふ可らざるも、法外に急燥なる思想は或問題の眞髓を透見するに於て大なる誤謬をなす事甚だ稀ならず、其心常に新事物の續出にのみ繫かれ徒に其送迎に隙なくして遂に深く思ひ遠く慮る能はず、彼は實に一面急燥の人にして公平なる判斷力を有すること眞に少なき人なり。

歐埃米塵

▲世界には　三千零六十四種の言語、一千以上の宗教有り、各人種平均の壽命三十三歲、百歲に達するものは一千人中一人の割合となる

▲著述を爲す第一の好時間は午前九時より午後三時までなりとはトルストイ伯の語るところ

▲獨逸一國　及び他の歐洲内にビスマークの紀念銅像三百零一個有り

▲英國にて　最初の鐵道は千八百二十五年より始まる、墺地利及び佛蘭西は千八百二十八年より、北米合衆國は仝二十八年、白耳義、獨逸は仝三十五年、露西亞は三十八年、伊太利は三十九年より

▲充分成長せる象は一頭三噸の荷を擔ひ能ふ

▲紐育高架鐵道の切符に用ゆる紙は一年間に一千噸の重量を消費す

▲人の骸骨は齒を除ひて二百零八個の骨有り

▲月の光り　月球より地球に達するまで一秒と四分一の時間を要す

▲死海の中に注ぐヨルダン川の水量　年間六百五十萬噸と算せらる



徳川時代の蘭人來聘

山縣五十雄

下

▲西洋學者の日本探險

世界へ對して固く門戸を鎖し、桃源武陵の夢を見て居た、然し一種の文明を有つて居る徳川時代の日本は學者の研究の材料として頗る面白い國である、夫であるから其時代に和蘭人に附き從つて我國を訪ふた西洋の學者が三人ある。一番初めに來たのは獨逸人ケムペル(Kämpfer)で、第二に來たのは瑞典人ツーンベルグ(Thunberg)、最後に來たのが獨逸人シーボルド(Siebold)である。此等の學者は皆和蘭商館附の醫者として和蘭人と詐稱して來た者である。いづれも熱心に非常の困難を犯して、日本の歴史風俗習慣動植物等を研究して、それ〲書物を著はした、其書物は猶ほ存在して居るが、徳川時代の歴史風俗等を研究するに當り、日本人の書いたものとは違つて、自ら異なる方面よりの觀察があるから、頗る有益なものである。さてツーンベルグとシイボルトと、此二人の事は他日に讓りて、こゝには專らケムペルの事を話さう。

▲ケムペルの『日本歴史』

ケムペルは名をエンゲルベルト(Engelbert)といひ、一千六百五十一年獨逸リッペ郡に生れた人で、若い時醫學を修めて醫者になつた。天性旅行が好きであつたから、初めに波斯に行き、暫く同國に止つた後、印度を經てジャバに渡り、同地に於て日本に於ける和蘭商館附きの醫者に任ぜられて、一千六百九十年即ち我元祿三年五代將軍綱吉の治世の頃日本へ渡來した。それから二年間日本に滯在して、其間に二度江戸へ旅行した後歸國して、日本に於て研究した結果を著述した。其書は『日本歴史』といふ題で、五卷に分れて居る。第一卷には地理、第二卷には歴史政躰等、第三卷には宗

致、第四卷には日本の外國交通及び貿易、第五卷には長崎より江戸への旅行が書いてある。

▲和蘭使節の江戸上り

其第五卷に據れば、ケムペルは元祿四年及び同五年の二回將軍の御機嫌伺ひに上る和蘭使節に隨行して江戸へ上つたのである。其使節となるのは長崎に於ける和蘭商館長で、隨行者は副使一人醫者一人、即ち一行は三人より成立つ。其出發の時節は二月中旬で、此時凡そ二萬圓ばかりの價のある將軍家への献上物を始め、其他幕府の主なる役人への贈物を用意して行くのであるが、其費用往復の旅費とを合す時は少なからぬ金額に上つた、それから旅行の途中は宛も諸大名と同じく大勢の供人を從へ、其他に日本の役人通辯等が多人數附いて行くのであるが、それ等の費用は皆和蘭人が支出するのであつた。順路は長崎から門司迄陸路をとり、そこから瀬戸内の海を船で大阪迄行き、大阪から伏見を經て東海道を江戸へと上つたのであるが、此長の旅路に一月以上の日數がかゝつた、其途中の模樣を一々お話して居る譯に行かぬから、一足飛びに江戸へ到着して、其後の事を御話しやう

▲將軍綱吉に謁見の模樣

ケムペルの初めて江戸へ行つた時には、二月中旬に長崎を出發して、三月中旬に到着し、其月末に和蘭使節は將軍に謁見を仰せつけられた。其時の模樣をケムペルは詳しく記述して居るが、これに據りて見ると、使節等三人の蘭人は江戸城中へ案内され、謁見室なる千疊敷の次ぎの室に於て暫く待たされる。其うちに將軍への献上品は千疊敷に並べられ、用意が整ふと使節たる商館長だけ謁見室へ案内されて、將軍の出て來る迄控へて居る。將軍は其室の一方の高くなつて居る所に簾がかけてあつて、其簾の後ろに座るのであるが、やがて將軍が其處に現はれて簾が捲上げられると同時に、役人が高い聲を以て『和蘭陀甲比丹』と言上する、それと同時に使節は匍匐して頭を疊にすりつけつゝ、將軍の膝下に進んで平伏する。かくて暫く平伏した後又膝をすりつけた儘恭しく引き下がるので、これで謁見の式は濟むのであつた。之を今日の外國公使の謁見と比ぶれば大層な相違で、若しも今日外國公使が我國に於て斯の如き取扱ひを受けたならば、直に戰爭が始まるであらう、時世の變遷とはいひながら變れば變るものである。

▲江戸城中の和蘭人演藝

それからこれはかりならばまだ宜しいが、和蘭人等は更に一層の淩辱を受けたのである。正式の謁見が濟むと此度は三人の和蘭人は更に奥の間に案内せられて、其處で種々の藝を演ずるべく命ぜられた。其頃西洋人は珍らしいから、將軍御臺所を始め、老中、若年寄、奥女中の主なる者、其他將軍の近侍の者等が和蘭人を見物するのであつて、無論將軍と御臺所とは一番高い所へ簾を掛けて座つて居て、其他の者は位に從つて順次に着席し、和蘭人は一番下の疊も敷いてない所に座を與へられた。やがて一同着席すると、老中の首座の者が將軍の詞を取次いで和蘭人への挨拶を述べる、之を通辯が聞いて和蘭人へ通ずると使節たる商館長は謹んで之に對して御禮を申上げる、通辯は之を老中に取次ぐと、老中から又之を將軍に申上げる。馬鹿々々しく手數のかゝる次第であるが、ケムペルは之を記述して曰く『通辯の聲は充分高くしてよく將軍に聞えるのに、老中が更に之を取次いでいふのは、通辯の如き卑賤の者の言葉を直接に將軍の耳に入れるのは恐れ多いといふ考からするのである』と。それから此挨拶が濟むと、和蘭人は種々雜多の馬鹿々々しき事を問はれ、又命ぜられた。先づ彼等は名を問はれ、年を問はれ、名を書けと命ぜられ、用意して來たペン、インキ壺、紙等を出して名を書くと、老中は之を取次いで將軍に見せる、やがてペンもインキ壺も命に因つて御覽に入れる、それから上衣を脱いで見よ、立つて見よ、歩け、互に挨拶をせよ、泥醉者の眞似をせよ、片言交りの日本語をいつて見よ、和蘭の本を讀め、書をかけ、歌をうたへ、舞踏れ、其他いろ／＼さま／＼の事を二時間ばかりさせられた。まるで淺草から藝人をつれて來たやうである。それからケムペルは醫者であるから、病氣の事についていろ／＼質問された、其うちに何といふ病氣が一番惡いか、長壽の藥は無いか等の面白い質問もあつた。

此等の演藝がすむと御暇が出て、御馳走を給はつたが、元より儀式ばかりの御馳走で和蘭人の口に適ふものはないが、それを皆頂戴して歸らねばならぬのであつた。

ケムペルが第二回の江戸上りの時の謁見も先づ前と同樣であつたが、此時はそう／＼馬鹿にされて堪るものかといふ考から、此方でも一番馬鹿にしてやれと、ケムペルは歌を唱へと命ぜられた時に、自分が若い時分愛して居つた女の爲めに作つた獨逸語の戀愛の歌を聲

高らかに唱つた。元より將軍等には何の歌だか分らない、通辯も獨逸語だから同じく分らない、そこでその歌の意味は如何との問が出たところ、ケムペルは濟まし込んで、これは將軍家の御世萬歳を祝する歌であると答へたが、同行の和蘭人は可笑しくて堪らぬのを笑ふ譯には行かぬから大に苦んだといふことだ。

▲告別の登城

將軍の謁見が濟むだ後、和蘭人一行は老中初め幕府の諸有司を訪問するのが慣例で、それ等の用事のために四月の初め迄江戸に滯在して居る。それから又江戸城へ伺候して將軍家へ御告別をする、此時も例の千疊敷て四つ這ひになつて敬禮をすると、將軍家から時服三十領を給はる、これを忝なく頂戴して退出し、それから東海道から往きの路を取つて長崎へ歸り行くのであつた。

完

日本宗教と動物との關係

加藤咄堂

印度並に支那の風習、一度び我が固有の宗教風俗と混和してより動物と宗教との關係は頗る密接と爲り、山村水郭、凡そ人の住む所悉く動物崇拜の現象を呈せざるはなく、高く聳ゆる山には天狗棲めりとし、長く流るゝ河には龍神いませりとし、彼の森には狼あり、此の野には狐ありとて、小祠を建て、食餌を供し、恐懼崇敬いたらざるなし。今試みにこれら崇拜の對象となれるものを分類せむに、動物其者が直接に崇拜の對象となれるものと、或る神佛の侍者として間接に崇拜せらるゝものとの二あり、其直に崇拜の對象となれるものは、多く有無だに判然せざる怪物にして、天狗龍神の如き其主なるものとす、天狗に關しては、護法資治論に曰く、

世に傳ふ天狗なるものあり災禍を主る、是れ天狗星の類にあらず、地藏經にいふ天魔夜叉天狗土后と、これ一種の鬼神なり、

と、玉勝間に

王の鼻といふもの天狗の面ともいふ、これ猿田彦神の御形なりと

と、天狗果して猿田彦神なるか、地藏經に所謂鬼神なるか、善庵隨筆に

狐にも天狐白狐玄狐とて各年數を以て差別あり、天狐は其最も古き狐にて精神のみ存在して形はなし（中略）もしや天狗は天狐にてはなきや。

といへり、天狗抑も狐屬なるか、民間描く所の天狗の像なるものは隆準にして羽團扇を携ふ、狀頗る山伏に

類し顔面猿田彥神に似たり、然らば超人類のものにして、こゝに云ふ動物にあらざるか如し、されど其羽翼を具へ鳥類の如き顔容を有する俗に所謂烏天狗の類は動物と目すべきか、或る人曰く世に傳ふる天狗は胎藏曼荼羅の迦樓羅王金翅鳥なりと、兎に角原籍の頗る曖昧なるものなりと雖、高山の頂上に住し、京都鞍馬の魔王に隷屬し、九州には彥山の豐前坊あり、四國には讃岐の象頭權現あり、本州には愛宕の太郎坊、秋葉の三尺坊あり、東北には鳥海羽黑の權現これが盟主たり、皆な災禍を掌り殊に火難を免るゝに驗ありとして信ぜらる、これらの中には高僧碩德の化したまひしありと云はれ、牽强附會の傳記を以て愚民を籠絡すと雖、其動物崇拜の一現象たるや疑ひなし、山嶽に天狗あり、河海に龍神あり、龍其者の存否は愚民の問ふ所にあらず、八大龍王雨を主りたまひ、これに祈りて旱魃を免るゝとし、又海上保險を屬托し、羽前の善寶寺最も繁榮を極め、中國の海上には嚴島の辨天あり、琵琶の湖心には竹生島辨天あり、其他苟くも湖沼のある所必らず辨天を勸請し、甚しきは白蛇を以て神躰とし直にこれを崇拜の對象とし、富士淺間權現も亦蛇躰なりとし、同じく白蛇を神躰視してこれに奉仕するもの少からず、されど一般民俗に於ては蛇をこれらの神の侍者として崇拜怠らず、陸中の十和田湖には南泉坊と呼べる龍神あり、羽後の八郎潟には八郎といへる龍棲めりと傳へらる、これらは動物其者を直に人格化してこれを崇拜するものなるが、其間接なるものゝ往々直接の動物崇拜に陷れるもの少からず、辨天の蛇に於けるは已に云ひぬ、稻荷の狐に於ける、三峰山の狼に於ける如き此類なり、稻荷は倉魂神にして狐とは何等の關係あるや知り難しと雖、古來狐を稻荷の侍者とし全國無數の狐は皆な山城伏見の稻荷明神より官位を受け其等級によつて諸方に配置せらると信ぜられ、終には狐其者を以て稻荷の神躰とし、源五郎狐、太郎狐等と稱し、これを人格化し且つ通力自在なりと信ぜらるゝに至り油揚を供して其救助を請ふもの國中殆んどこれあらざるはなし、狼は秩父三峯山に祀らるゝものを最も有名なりとし、但馬の養父明神、越前の日野宮神社これに次ぐ、これらの神祠よりは狼の符咒を出し、これを門戶に貼るものは盜難を免ると傳へらる、殊に養父明神內山口神社は神躰を千匹狼とし、盜難の恐れあるものは此神に詣でゝ其一躰を借り受け、これを其家に祀れば其憂なしと云はれ、日野宮神社にても狼様を

御貸し下されと祈れは、惡事災難あるとなしと云はる、大黑天の鼠、毘沙門天の蜈蚣、摩利支天の猪等も亦間接に崇拜せらるゝ動物なりと雖、其勢力遠く狐狼に及ばず。直接崇拜の對象たる天狗並に或る時は直接崇拜の對象たる蛇狐等を瀆すの行爲あるものには、其身躰に憑據して諸種の祟を爲す、天狗憑、狐憑、とうびやう憑の如きこれなり、これらは一種の精神病に過ぎずと雖、其のこれあるは、是等に對する信仰の高度なるを證すべし、天狗憑狐憑は日本全國に行はるゝと雖、とうびやう憑と稱するものは、四國の一隅伊豫地方に限れるが如し、此地方に於て小蛇を瀆すものは、直に其者に祟りて狐憑の如き狀態を演ず、此とうびやう憑には血統ありて其血統のものゝ外には多く及ばざれど、其者と緣組する時はとうびやう(小蛇)も亦之に從ひ、其者の憎を受くるものには、小蛇其意に從つて之を害すと信ぜらる。土佐の犬神の如き亦同一信仰にして犬神持とは結婚を謝絕するの俗あり、關東平原には狐の一種、尾先狐と稱するもの亦諸種の祟を爲し、信越地方には飯綱憑と稱するものあり、こは天狗と狐との中間に位する如きものにて其害これらと大差なしとす。

斯く動物は人類を害すると雖、亦人類に便益を與ふると信ぜらるゝが故に畏懼の情を以てこれを崇拜す、其殊に營業保護として崇拜せらるゝものは養蠶地方に於ける蛇なりとす、磐城國の山津見神社、岩代國湯野明神及平野明神に蛇を借り來りて鼠害を除くの風習あること猶ほ狼を借り來りて盜難を免れむとするか如し。されば養蠶國には、おのづから蛇を保護する習慣あり、農業國には其耕作に一日も欠くべからざる牛馬を保護するの風習はいふまでもなきことゝなるが、此牛馬保護と宗教との關係を明に知り得べきは、奧羽地方に行はるゝ馬頭觀音の信仰并に蒼前(?)樣の崇拜なり、陸中鬼越の蒼前に詣てゝ其幣を受けこれを廐に懸くれば馬はこれによつて災厄を免ると云はれ、仝水澤の駒形神社は、白馬の像二を安置して馬の神と稱せられ、陸前の竹駒神社も亦馬の病氣に驗ありと傳へらる、牛に就ては、紀伊の熊野神社に詣てゝ其病を癒すことを得との信仰は仝地方に行はれ、中國地方に於ては伯耆の大山に詣て、山中の草を得て牛に食はしむる時は健全となると信ぜらる、これらは動物保護の精神より出でたるものにして、よし其事の迷妄に屬するとは云へ、人類自然の美はしき情を見るべきにあらずや。

これら美しき情を見るべきものに反し、最も寒心せしむべき風習は人身犧牲のことなりとす、人身犧牲は神を以て動物性なりとせる昔より、動物を以て神なりとせる近古に至ても盛んに行はれたる習俗にて、「日本名勝地誌」の記する所によれば、上總坂戸明神には今も人身犧牲の形式遺りて此神の祭日には氏子の中より籤を以て人を定め、大俎の上に載せ大なる庖刀を以て三たびこれを切るの狀を爲すといふ、筑前宗像明神にもかゝることのありしにや、續風土記に宗像緣起を引て、

昔は彼の穴にて高棚をかまへ、未嫁女を生贄とせしに、神出てゝ白馬の形を現じ、或は大蛇の形を現はして其女を食せしといふ、いふかしきことにこそ云々

想ふに河内茨田堤の人身犧牲といひ、土佐の蔓橋、攝津の松王人柱といひ、これらは神を以て全く動物となし、若くは猛獰なる動物がこれを奇貨として食人の實を行ひしに基因するや知るべからずと雖、以て古代民俗が如何に神と動物とを混視せしやを知るべきにあらずや、而してこれらの習俗の今は人身犧牲の甚しきに至らずとも、人身に代るに動物を以てし神に供するもの少からず、信濃の諏訪明神には猪鹿七十五頭を俎に載せて神前に供するの式ある如き其一例なり。

以上大略我が國に於ける動物と宗教との關係を觀察し來りしが、尙ほ支那干支の輸入せられて十二支に配當せられたる動物は、其年には歲神として崇敬せられ、印度習俗の傳來と共に枳枳尼（狐の類？）の如きものゝ崇拜せらるゝことも少からず、若し夫れ太古神話に遡りて大巳貴命の因幡の兎を救ひたまひし事蹟よりさては日本武尊の白鳥と化したまひしこと等を查究し、印度支那の習俗をも合せ考へなば、いと興あることならむと雖、今は唯だ現時に於ける狀態如何を縷述し左の一表を示して筆を擱かむとす、われらは之によりて古代宗教の面影を認むると共に、將來に發展せらるべき宗教の精髓を認め得べきなり。

日本宗教と動物との關係

- 動物に依て冥助を得むとする者
  - 直接
    - 天狗（火難）
    - 龍（水難）
    - 狼（盜難）
  - 間接（蛇、鼠、蜈蚣等）
- 動物か人類を害する者
  - 全國（天狗憑、狐憑）
  - 一地方（犬神、とうびやう、飯綱）
- 人類が動物の保護を祈る者
  - 牛（熊野權現、犬山神社）
  - 馬（駒形神社、蒼前、馬頭觀音）

善魔曰く（其九）

靑柳有美

○劍舞詩吟は男色の誘因となり、男色は劍舞詩吟の流行を來たす。これ遊蕩家の端唄都々逸振事に上達し、端唄都々逸振事の、又遊蕩を誘起するが如し。

○古物を國寶に編入する既に遲し、美術製作の秀拔なるもの、よろしく其新らしきに於て、早く國寶の取扱を爲すべし。是れ急務なり。

○宦官の支那にありて過大の勢力あるは、なほ日本の俳優が、其上、政權を左右するに預りて力ありしが如し。時世に容れられざりし傑士、日本にありては退いて俳となる支那にありては隱れて宦官となりしもの乎。○畵家樂人彫像師として成功する能はざる女性、豈に獨り俳優として成功すべきの所因あらんや。繪畵樂音彫刻演劇共にこれ藝術なり。しかも、演劇は藝術中の藝術ならずや。

○「僕も變りものだからチ……ドウも世間に容れられ無いでチ……」これ當世才子の通語なり。

○人もし「死」を慮りて他意餘念なくんば、誰か發狂せざらんや。

○快樂の多少とは、己れを忘るゝの多少を云ふ。詳く云へば、「存在」を忘るゝ多少なり。

○女子は素と驢鈍なるものなり。故に男子の弱點に對する好伴侶なり。故に又其事業と思索との大障害なり。

○女子はよろしく總て之を女郎視すべし。然らずんば、男たるもの必ずや大に苦まむ。あゝ女郎なるかな女郎なる哉。女郎以外に女郎あること無し。

○美しとて南京玉を弄ぶは、高價なりとて金剛石を賞するに勝る。

○人の風貌に二種あり。一は父祖兩親の風貌の混合せるものにして、他は化合せるものなり。故に、前者は稱して物理的相貌といふを得べく、後者は化學的相貌と稱するを得んか。

○ルナン以爲らく、基督は天才にしてしかも丈夫なりと。

○技量を蓄ふるも、イヤ味タップリ鼻もちのならぬ如き人は、よろしく走りて商賈の雇人となるべし。彼は利によりてその人を重用し、其イヤ味を恕せむ。

○無學は必ずしも恥づべきことに非ず。されど、富者

の無學は恥づべきことなり。

○演劇改良の第一着手は學生の、觀劇心を奬勵するにあるは、既に之をいへり。鷗外の「玉手匣二人浦島」は、この目的を達するに最良なる端緒として、深く之を歡迎す。

○懸想ひを療すの道、△△△△△。

○智慧の表情は、女子の魔力をして頗る有力のものたらしむ。女學生と藝者との男を惑はしむる所因、まことにこゝにあり。名古屋女の天下に勇飛する所因も又こゝにあり。而して、又智慧の表情の、女子の魔力をして有力ならしむる所因は、顔面筋肉を引き締らしむるにあり。

○初心の女の、男の結婚申込(プロポーザル)を唯譯も無く拒絶するは、恐怖心によるなり。

○洋畵は淺薄なり。

○今の日本人は、その職務と其事業とよりも、更に己れを愛す。

○容積の細小なる物躰にありてシムメトリーは形躰美の要件にあらず。蓋し、その全躰が能く一眼に映寫せられ得るを以てなり。

○シムメトリーの美を爲す所以は、人に兩眼あればなり。もし、兩眼各々相矛盾せる印象を受けんか、其苦や計るべからず。なほ雙手各々異りたるメチュア(拍子)の運動を爲せば、いひ難き苦痛あるに同じ。

○劇場の「出方」と觀客との間にのみ、西洋の婦人保護の風行はる。

○女の男を動さんとするもの、必ずまづ其男の許に到りて、世間の口さかなき批評が、彼是れと二人の仲を噂しつゝあるを語り、それとなく我が身を持ちかけゆくものぞ。

○人餘りに遠大の希望を抱くべからず。未だ實行せざるに當りて、早くまづ時世と包圍との變化あらん。

○市川久米八事守住月華の、大に其頭角を現さんとして、しかも現す能はざる所因のものは、其亭主持にして、品行方正なるが故なり。

○日本の歴史は、皇室を祝福して天孫なりとなす。故に、宗教の力を假りて之を神聖にする必要なけれども、歐西にはこの歴史なし。これ帝王の即位に僧正を煩はし、神の名を假らざるべからざる所因なり。

○西洋煙草は、これを吸ふに。パイプを用ふべし。これ經濟なり。

○ルチーサンスは、詩的の以太利人をして詣に發達せ

しめ、推理的なる獨逸人を驅りて音樂に發達せしめたり。

○バイロンの「マンフレッド」は、沙翁の「マクベス」に依るところ、必ずや多かりつらむ。

○大阪なる秋月桂太郎は、明治に於ける時代精神の、まことに俳優に權化せしものなり。過ぐる歳、「白無垢鐵火」に始めてこの優を觀、この感なり。近く高田實の言秋月に及ぶを聞く。高田は能く秋月を識るものか。

○今に至りて俳優の大なるもの僅に三。曰く市川團十郞。曰く市川女寅。曰く秋月桂太郎。

○接吻は女をして其抵抗力を失ふに至らしむ。

○つまらぬ人物も、なほこれに高俸給を與えて採用せよ。これ、自ら無能にして、なほ能く我が好地を持續し得る所因なり。

●●●次號一先づ完結●●●

英國の國會には目今十人の猶太人有り
日本の國會には目今一人の新平民有り

凄慘見るに忍びず

……花の三月歌舞伎の秋色……

伊藤銀月

上

其一　狼狽を展覽す

歌舞伎座の三月興行は、歌舞伎座の狼狽を展覽せり。團十、菊五が形影に死氣を帶べるや久し、最近數歲、彼等は塚中の枯骨を劇壇に躍らしめて、松旭齊天一々流の手品に看客を吸引しつゝありし也、彼等が時として、他優の改名披露等に其滑々たる禿頭を晒すや、直ちに看客に向つて手品の種を示さるゝの感を與ふ、鐵の如き壯漢を出し玉の如き少婦を現ずるの原料として、扨も見苦しき兩個の衰皃を陳列するものに過ぎざりき。

團十、菊五が有するの未來は、一般に其長からざるを信ぜられしと共に、其長からざる範圍に於て、比較的菊五郞の長かるべきを信ぜられたりし也、測らざりき、春寒俄に梅の老幹を折らんとは。

菊五郞俄に病みて、大別五種の驚愕を喚起せり。一に其家族の驚愕也、二に老友團十郞の驚愕也、三に門下

の驚愕也、四に歌舞伎座の驚愕也、五に知人及び一般好劇者の驚愕也、而して、五種の驚愕は平等に一の落膽を與へられたり。

就中最も公開せられたるものを、團十郎の落膽、歌舞伎座の落膽の二とす、二種の落膽化合して歌舞伎座の狼狽となり、而して歌舞伎座は、其狼狽を三月興行に展覽せり。

其二　團十郎眞に毒饅頭を食へり

死は豫想を超越して菊五郎に來れり、即ち歌舞伎座は驚愕せり、落膽せり、然れども未だ甚しく狼狽するには至らざりし。

唯團十郎が「持ちつ持たれつ」(彼自身の語)の菊五郎を失ひて、頓に「片腕をモガレ」(同)たる感に打たれ、無常の冷風颯々として後頭部の殘毛を吹くの落寞に堪へず「俺ア、おめへか死んだら俳優を止す積もりだ」(菊五郎の病褥に於ける團十郎の語)の老人的套語を、或は事實に現ぜしむる傾向無きにあらざるを見るに及びて、三月興行を目前に控へたる歌舞伎座は、即ち大に狼狽し始めたり。

其唯一の伴侶たる菊五郎を失ひし老衰團十郎は、再び劇壇に假髪を著くるの勇氣あるものにあらず、最早俳優として公衆の指目を迎ふるの彈力あるものにあらず、然れども、猶ほ一片死灰の中に包まれて彼に殘存するの火氣あり、そは、菊五郎死後の己自身が情懷、菊五郎死後の己自身が位置を、公衆の耳に訴へ、公衆の目に示して、溜まり／＼たる胸底の涙を、一度思ひの儘に瀉いで見たき心也、此心端なく歌舞伎座の利用する所となりぬ。

一番目狂言は、團十郎をして其得意たる毒饅頭の清正を演ぜしむるにあらず、彼をして直ちに、菊五郎死後の己自身が情懷を述べしめ、菊五郎死後の己自身が位置を示さしむるものに外ならざる也、清正誠忠録の爾く不自然に爾く支離滅裂なる脚本に倚りて、能く許の如き鬼神倶に泣くの妙に入り得たるものは、技藝にあらずして實情なれば也、團十郎眞に毒饅頭を食ひたればなり也。

其三　凄慘の美

大阪城中の訣別、團十郎眞に泣けり、技藝神に入るは平生の彼也と雖も、毒饅頭の清正に至りては、神を超

越して彼自身に入れり、毒饅頭食後の清正と菊五郎死後の團十郎とを打つて一丸となせる也。彼既に眞に泣く、看客豈涙無きを得んや。

一個の秀頼、之を清正より見れば幼弱なる主君也、之を團十郎より見れば衰弱せる自己の生命也、彼が生命の弱きは、且元の膝に坐せる幼君の弱きに讓るものならず、而も、頼み切つたる菊五郎――竹馬の友にして自己より齢少なき――の、卒然自己を棄てゝ逝きしが爲めに、血肉皆寒きの無常感を起したる彼は、饅頭の深毒骨髓に浸染して、死期漸く迫るを覺るの清正と何の異なる所無き也。

必ずしも團十郎は、菊五郎死し彼自身死したる後の劇壇を憂慮するが爲め、爾く凄慘たるにはあらずと雖も、「梅が枯るれば尾花が茂る」の俗謠の如き、菊五郎死して尾上一家が空原曠野の觀を呈したるを、改めて團十郎の口より告げらるゝの感あり、加之裏面に團菊沒後の梨園に關する豫言を含み、武藏野のすゝき尾花が、互に歸する所を失ふて己がまに／＼風に靡くの將來、恍として眼前に畫かるゝが如し。

花の如き淀君、玉の如き秀頼、老猾なる道犬、沈毅なる且元、及び土間棧敷滿場に塡充する看客は、一樣に衰颯たる秋風に蔽はれて凄慘の色を帶び、長髯の老武夫獨り此曠野に立ちて、滿目の暮景に枯木一樹の觀を與ふ、固より技藝の妙に因せざるにあらずと雖も、此間に技藝以上の物あるを看取せざるべからず。

若し團十郎をして先だち逝かしめば、是れ吾人の不幸にして、許の如く感慨深き凄慘の美を、殘存せる菊五郎に待望すること能はざりしなるべし。

其四　清正を染め拔きたる幕

竹田街道の清正、境と人と倶に詩、技と情と兩つ乍ら絕頂、想ふに、團十郎の壽命此幕切れ毎に一寸宛縮まり行くなるべし。

五月雨の晴れ間に、夢よりも淡き霄星の影、露繁き稻荷の森の松が枝を小手に拂ひて、名馬帝釋栗毛の平首に添へたる大薙刀、地に落ちたる三日月かと疑ひ、手綱緩めて靜に步ませ出づる陣羽織姿、一生幾百戰未だ曾て後を顧みしこと無き其額に、暗として死の影を浮べつゝあり。

『膽にこたゆる其一言、やがて成就の期に至らば、神ともあがめん清正殿』は、之を康政の言と聞かずして、八百藏の言と聞くに妙味あり、團十郎崇拜者は、

違からず彼が死して劇道の神とあがめらるゝに至るべき前表となし、此一語に過大の拍手を拂へり。

康政を送って將に歸らんとすれば、雲裡に裂帛の聲あり、松梢を掠めて馬頭に落つ、清正頭を傾けて聲の來る處を仰ぎ、馬亦人意を解して鬣を揮ふ、巨眼大刀倶に閃灼、書に此韵無く詩に此致無し「我が命數も月影と、共に傾く夏の夜に、雲間を分けし一聲は、やがて不如歸の」と、半ば云ひて聲を呑む所に演劇以上の感慨あり、颯爽たる英姿を其儘石像に化し去らんとして恰も柝聲を聞く。

凄慘見るに忍びずして頭を低るれば、死氣を帶べる團十郎は、依稀として我が眼中に在り、再び頭を擧げて前面を望めば、死氣を帶べる清正は、彷彿として薄鼠色に染め拔かれたる如く、引幕の前に浮べり。

其五　生え拔きの江戸ッ兒

菊五郎死後に於ける己自身の情懷を訴へ、菊五郎死後に於ける己自身の位置を示すの感興に驅られたる團十郎を利用して、纔に一番目を張り得たる歌舞伎座は、之を以て兎に角菊五郎を失ひし缺陷の半ばを埋めたり。此に於て、問題は何を以て其餘れる半ばを埋むべきかに移らざるべからず、此問題も亦團十郎を中心として解釋せざる能はざるを以て、再び多く團十郎の感興を利用するの方針を取りたり、即ち菊五郎が遺子の改名披露に、團十郎の泣き場と名附くべき一幕を設け、清正として泣き足らざりし團十郎をば、更に禿頭の團十郎として充分心の行く儘に泣かしむ。

吾人は、東西々々申上升的口調を斥けて、看客を相手に俗談平話をやらかしたる、團十郎の眞率を喜ぶもの也、吾人は、加藤清正にあらず、武藏坊辨慶にあらず、大口屋曉雨にあらず、幡隨院長兵衞にあらず、天下を望む大伴の黑主にあらず、戸隱山の鬼神にあらざる、能く愚痴を云ひ能く繰言を言ふ一個の衰叟堀越秀に就いて、彼が亡友寺島清と親交の歷史を語るを聞き、平生交遊懇話の狀態を寫眞的に述ぶるを聞き、劇中の彼とのコントラストに非常の趣味を感じ得たるを謝するもの也「なんと堀越、俺もモウ年を取ったから」と故人の口吻を摸するが如き『二人で相談をして何か面白いものを演らうぢやないか』と、故人と懇話する己自身の面目を示すが如き、莊重なる團十郎的臭味を脱却したる彼と、飽迄も江戸ッ兒的なる菊五郎とが舞臺以外の生活をば、其唇頭眉間數寸の際に活現せ

しめたり。

『生え抜きの江戸ッ兒と申しますのは先づ故人菊五郎に私二人位のもので御座います』と云ふに至りて、始めて加藤清正が生え抜きの江戸ッ兒なるを知る、終に感極まつて老涙の潸々たるに堪へず、赭黑の長面を懷紙に掩むるに及べば、看客は却つて此演劇以外の演劇に多くの感動を受くる也（以下次號）

日本の芝居と音樂

左は昨千九百二年發行のClarencle L. Brownell著The Heart of Japan中より抄譯せしものなり、著者自からは五年間日本内地（北陸地方）に住居して外人の容易く窺ふ能はざる風俗習慣を知悉せりと稱すれど通讀したる處左程にも思はれず、併し又思ひ當らしむる所も少なからざる樣なり、（古弦）

（一）芝居

日本の役者が顔を作るのに熟達せる事實に驚く可きものがある、かの盛暑の候には諸方の國に置かれる日本の團扇の表に描いてある繪は即ち役者の肖像である、而して其像で少しも實物と異なる事はない、繪にある派手な衣服は全く其儘で肉體の恰好を包み隱くして了まつてるが、其曲つた歪んだ肖像は日本藝界の明星ともいはるゝ者のみで少し芝居に精しい人は一目で誰であるか知つてる、思ふに日本の役者程扮粧を盛にして居るものは世界中にあるまい。

又彼等の多藝は驚く可きもので、悲劇喜劇滑稽劇者として通せざるものなく、男性ともなり女性ともなり獸類にもなり、皆一樣な輕快と巧妙を顯はして居る、彼等が此技術に熟達するのは抑も大なる原因の存ずる事で、日本では役者は世襲の業となつて居る、彼等の父も祖父も曾祖父も皆此業に生れて此業に死んだものであるから此遺傳其訓練を經たる日本俳優が技藝に勝れたるは蓋し當然の事と云ふ可しである。

本名を堀越秀と呼ばるゝ團十郎の如き喜劇の名優菊五郎の如き全然何物も知らぬ吾々外人をさへ或は笑ひ或は泣かしむる程の入神の技を有して居る。

かゝる秀抜なる技能を有せるにも係らず彼等がミカド帝國に於て重ぜらるゝ樣になつたのは實に近年の事で、千八百八十七年の秋外務大臣カウント井上が俳優の地位を高めしむる爲に園遊會を催ふした時、皇帝陛

下臨幸ありて親しく俳優の技藝を御覽被遊優渥なる御褒詞を玉はつたので其以前迄は紳士との交通を禁止されて居た彼等は玆に始めて人間の仲間入が出來たのである。

古代の人口取調記錄を見れば、役者の人數を算へるのに一疋二疋三疋と呼んだものである、一躰日本では物を算へる時に此一二三等の數字の外に算へる對象物に依て夫々の形容語をくッ付ける、例へば人間なれば一名二名又は一人二人と呼び、紙の如き扁平のものは一枚二枚、家などは一軒二軒、船は一艘二艘、人と鳥を除ひて外の動物を一疋二疋と勘定する、即ち俳優役者は獸類の階級に編入せられて居たものと見へる。

されば近年迄上流社會の人々には少しも近寄る事が出來なかつたが、夫にも係らず名優は續々として輩出した、そして前記の園遊會以來は高貴の邸に招かれて、厚き待遇を享くるに至つた。

劇場は古代日本を實際に研究すべき唯一の場所である、其の中には往古の荒唐無稽なる傳説なども混つては居るが、兎に角已に人々の記憶より逸失し去つた風習や物語を目前に現出せしめる、其言葉は禮儀正しく四角張つた古風のもので、之を語る役者の音調は恐ろしき程大い聲である、かゝる音聲は舞臺以外に於て決して聞く事が出來ない、もし泰西人にして日本役者の聲色を眞似やうと思つたら半分間で氣管支炎を引起す事請合である、悲劇扮粧者の如き咽喉は緊縮して血管は膨れ一々の毛孔からは今にも血が吹き出さうに見へる、そして兩眼は各箇別々に運動して一方が天を睨めば一方は地に俯し、一方東を見れば一方は西に向ひ、ぐる〳〵廻轉させて終には紅彩が全く隱れて只白眼丈て眼を塡める樣にする、此は多く奸惡な人物などの時て、觀者をして實地に臨むの感あらしむる。

皇帝や女皇などに扮した時の狀は實に奇妙で、古代の神話劇を見る樣である、殊に其步行の容態は全く普通の人物とは異なり、一步〳〵足を頤の高さに擧げて、彼方此方を見廻はす其眼は直徑二吋にも餘ろうかと思はれる。

日本の見物人は技の妙を賞讃する時に拍手をせずして其役者の名を叫ぶ、日本の芝居は大抵朝八時に始まつて夜七時迄續ける、中には只夜間丈開場するものもある、そして其內部は殆も將棋盤の樣に區劃がして在つて一寸我國のに似て居るが別席がなくて、凡て柔かい疊を敷き敷物より一呎程高く欄杆を渡して區別されて

居る、此一區劃に六人座る事が出來る。

一躰に見物人は自から茶道具と辨當を持參する、田舍では殊にさうである、外に酒樽などを持て行く人もあるが都會では場內に茶屋があつて一切の飲食を廉價で需に應ずる、而して劇の幕間に見物人は相互に知友を訪ひ酒杯を交換する、又時には役者が見物人の所にお伺に來る事もある、此時には常にかの藝者と同じく若干の纏頭を貰ふのである、幕が下りて居る間は無數の食物呼賣が欄杆の上を傳ふて八釜ましく叫び步ひて觀客に賣り付ける、少時の絕間もなく喫烟は行なはれ、衣服には少しの規定もなく、又自分の好まない劇を演じてる間假睡をするなどは決して珍らしくない事實である。（以下次號）

▲英國には傳道會社有り　四十二個の傳道會社有り北米合衆國には四十九の傳道會社有り

▲英國々教　チヤーチ、チフ、イングランドの一年收入總額五千七百五十三万五千五百七十圓



時事諷壇

新罪言

藍川

▲茅渟海

扶桑正屬太平春。博覽開場百貨陳。內外包羅千里貢。東西蒐輯萬方珍。梳櫓林立茅渟海。車馬雷轟浪速津。笙皷聲中聞警蹕。鑾輿肅々不揚塵。

▲杜鵑哀

法門龍象見宏才。踏破坤輿亦快哉。孤錫遠從雲裡響。一楼遙自日邊回。觀光果是徵文物。布敎何唯闢草萊。只奈東山春寂々。花前灑淚杜鵑哀。

▲賞艷陽

諸公拱手坐朝堂。滿目鶯花賞艷陽。休咎下僚多狗鼠。

未看當路有豺狼。衣冠肅々擁兵衞。車馬匆々源太郎。
天下泰平無事久。須陳酒肉擧杯觴。

▲向夜臺

東瀛萬里訪蓬萊。曼衍魚龍眼界開。未暇神山求藥草。
欲徵文物育人材。依稀客夢迷暘谷。早已游魂向夜臺。
經世貽謀無所用。茫々禹域陳雲堆。

▲歸穢土

高軒駟馬聲轔々。得意誰歟稱搢紳。白日青天驕盜賊。
千門萬戸祭錢神。苞苴以外無權勢。骨肉之間有敵人。
三界到頭歸穢土。不知何地置斯身。

▲散黃金

黨人無復濟時心。五月城南又盍簪。閤々群蛙相鬪日。
棣棠花發散黃金。

▲天狗飛

函嶺以東無怪物。古人警語總非々。請看今日開明世。
銀座街頭天狗飛。

▲聲已微

鑛毒問題聲已微。流氓依舊泣寒饑。誰知粉陣香圍裡。
得意銅翁體益肥。

▲太郎妻

哭聲動地青森縣。菜色鵠形何慘悽。香雪軒中春夢暖。
金環約臂太郎妻。

▲養盜才

後先疑獄不堪哀。俸祿何圖養盜才。八字毿々髯幾寸。
忽爲縲絏縛身來。

新へなづち

久良岐

▲春光駘蕩

春來れば山には櫻野は菫花もてかざる大八洲國

▲百花爛熳

又しても花爛熳と咲きにけりいざ一瓢を肩にしてまし

▲主人風流

一本の赤芽櫻を移し栽ゑて花の澁茶を人にすゝむる

▲園遊會合

花に賣る突扱團子ぬかつぎ被衣姿のふさはしの妹

▲康孃演說

いぎたなき國のねぶりを醒すとや聴くもかなしき鶯の聲

▲對花言志

敷島の大倭心は花にのみなほ新らしく匂ふ春かな

▲天狗議士

○十の岩谷の朝臣がフロックの朱のコートを着せるよろしも

▲印度探險

法の道ふみ開かんとインデヤの荒山越えていそしみし君

▲善勤善遊

花見酒さめての後の心あらば百日酔ふとも我は咎めず

SUCCESS comes—but it has to be invited.

Common-sense is instinct, and enough of it is genius.

No man is so strong that he does not have some weakness.

Some men lose their own health drinking the health of others.

思潮

儒教主義は世界共通の古代主義なり

「慶應義塾學報」　慶應義塾長　鎌田　榮吉氏

儒教主義も人知未開不忠不孝の充満した昔の社會には必要であつたが今日ではこれ丈に満足する譯には行かぬ、殊に亂臣賊子の輩出した春秋戰國の世に孔孟の之を絶叫したのは恰かも佛國ボルボン朝の末にルーソーのコントラソシアルを唱道した様なもので、皆時代の必要から起ッたのである、今日日本の必要は文明世界に乗出すべき國民の品格を作るべき道を講ぜねばならぬのである、而して此儒教主義は東洋の専有だと思ふと大變な間違である、西洋でも昔は矢張儒教主義が行はれたと云ふとおかしい様だが、只儒教と云ふ名がない丈です、忠孝は古代の通有主義であるから古代主義と云つたら宜かろう、忠孝主義が支那日本に限つたとてはない、社會發達の或る程度に於ては何國も同じやうな道徳主義が行はれて居る、古代の羅馬ではパテリヤポステスタス即ち親權を以て道徳

上法律上最も重いものにしてある、所謂家族制で家長の命に背く者は殺されても仕方がない、親は子を殺すと云ふ權を有つて居るといふことに至ると羅馬人の方が支那人よりもモットえらい、即ち孝の教に於て羅馬は支那よりモッとえらかつたと云つて宜しいのである、それより遡ッて希臘時代の哲學者も同じくてありましてアリストトレスは是は實驗學派てプラトーは全く反對の直覺學派であつても矢張服從の外に道德上の教がない、服從と云ふことは即ち支那流の言葉に直すと忠孝である、忠孝の一義に歸一して居ッたと云ふことは同じことであります、それから希臘の中には色々國があッて君主國共和國その共和國の中にも寡人政治貴族政治庶民政治富豪政治云く何云く何と色々あるが、何れの國でも社會の權力は無限であッて、一人一家は全く無權力になつて居る、又一家の中では家長の權力が無限であつて子弟たる者は全く之が爲めに占用されて居る、社會も一個人との關係家族と一個人の關係も同じとて、個人の權利は少しも認められて居らぬ、さうして見ると西洋も古代に在ては矢張儒教で支配されたと云つても宜しい。

世界の標本國民

農學博士　新渡戸稻造氏

「成　功」

一躰に西洋人と云ふも獨人もあれば佛人もある、英人もあれば露人もある、そこで其性質も中々一樣でない、詩人ハイネの云つた言に、獨人は國を愛すると、老婆を愛するが如く、英人は之を愛する本妻の如く、佛人は之を愛する妾を愛するが如しと云つてる、老婆を愛する如しとは何うかと云ふに、我國〱の一點張で非常に大切にして居る、即ち國が無理な事を云つても、ハイ〱と聽いて居る、本妻を愛する如しとは如何と云ふに、惡るい事があると之れを叱り、良い事があると、流石に己の妻だと云ふ顏して居る、妾を愛する如しとは、可愛がる時は、無暗に可愛がり、憎むに時は無暗に憎む、即ち各國皆性質を異にして居るのである。

然らば歐洲の標本ともなる國民は如何なる長所を有するやと云ふに、英人は餘程大きい所がある、一例を擧げ見ると、余が汽船で外國から來る時、其の甲板上で、英人二十人ばかりと日本人二十人ばかりで綱引を行つた事がある、一方は大男、他方は小男であつたにかゝはらず、到頭日本人が勝つた、不思議にも勝つた、で彼等は定めて怒氣心頭に顯れ、顏が眞赤になるであらうと思ひの外、アベコベに日本人を褒めたのである、若し負けた方が日本人であつたならば、イマ〱しい此奴等と、其夜、水でもあびせかけやうが、彼等は、却つて敵の强いのを褒めたのである、流石は英人と思ふて感心した、

先づ西洋人を通覽するに英米人が、最も發達した人類であらう、英人米人共に躰が大きくて、丈が高い、筋肉も太い、生れると直ぐ、牛乳を飲ませ、齒が出來ればビスケットを與れて育てるのだから、大根ばかり食つて大きくなる我々とは其身躰が餘に違ふ、有名なニッケス、伊の勞働者は胃を以て貯藏銀行の最大なる物と考へてると云ふたが、實に滋養物は必要で、滋養を充分にして育つた物は身躰が强壯で、事に堪へ得るのである。

余が教育上の經驗によると、日本人は普通四十分乃至四十五分以上ジッとして、コミ入つた話を聽くに堪へぬ、余の如きは平生幾分か甘い物を食ふと思ふが二時間讀書すると倦む、四時間行ると最高度である。

英人は又遊ぶべき時に遊び、勉むべき時に勉める、佛人は勉强家で殆ど遊ぶとなく、夜の十時までも仕事をして居るが、餘りアセるので餘裕がな

い、英人は事が起つた時それに處する餘裕がある、先づ餘裕のある點と、耐え忍ぶ力が強く永遠の計を立てゝ倒るゝ所まで行ることは彼等歐人の長所で、特に英米人は多く此長所を有して居る、悲しい哉日本人は今日此點に於て大に彼等に及ばぬ。

二三年間は經濟界の厄年なり

男爵　金子堅太郎氏
「太陽」

本年一月以來の新聞雜誌等を閲覽するに、本年の經濟を論ずる者は、概ね曰く、本年は日本銀行の正貨準備も一億圓を超え、貿易の實況も恢復しつゝあれば本年は必ず順境に赴くならんと、余は之に反して本年の經濟界は順境に赴くことは決して望むべからず、否或は昨年よりも益々悲境に陷らざるやを憂ふる者なり。語を換えて之を言へば、世の經濟を論ずる者の大半と全く所見を異にせり。

二十八年以後昨年に至るまで我邦の經濟を觀察するに、經營したる民間事業は過半蹉跌失敗に終り、商工業殆んど言ふ可からざる悲況を呈したり。然るに世の論者は、昨年以來東京に大阪に其の他の都府の銀行に於て、現在金餘り金利引下げを續々實行して金融の緩慢を告げたるは、即ち我經濟界の恢復なりと唱道せり。是れ一面より觀察したる實況にして、其の一面を以て直ちに我が經濟界の實況なりと斷言するは、余の取らざる所なり、余は何が故に此の如く銀行に現金を回收せられたるやの理由を見るに、是れ多くは二十八年經營したる民間會社が當初の目的を誤つて蹉跌し、其會社に貸付けたる資金の回收期に達したるが爲め、又た回收せざるを得ざる破產の淸算に依り、銀行に現金を收入したるものと信ず、故に現今信用確實なる銀行に資金豐富にして、之が貸付に苦むは却つて我が商工業の不振衰微を徴せるにあらずして何ぞや。彼の米國の如き銀行より貸出したる資金は、其商工業の隆盛と共もに、既定の利息、及資金償却の方法、當初の目的の如く誤らず實行せられたる結果として、銀行に現金が回收せられたるものなれば、其國の經濟社會は順境なり貿易の將來は多望なりといふを得べきは勿論なり。然れども、我邦の加き銀行より貸出したる、商工業の會社は破產し其淸算に依り貸付けたる資金の一割乃至二割を回收して、貸金償却の方法を以て集りたる現金は一時銀行の金庫に各方面より集中すると雖も、是米國の如く銀行に集中するものと同日の論にあらざるは識者を待たずして明かなり。故に今日日本の銀行に現金の積堆するの傾きは、亞米利加の銀行に現金の積堆するとは正反對にして、彼れは商工業の隆盛の結果として銀行に現金を集中せられ、我邦にては商工業の浮沈又は衰滅の結果として、曾て貸出したる資金の銀行に集中せられたるものなれば、其結果こそ同一なれ其原因は殆ど霄壤も啻ならざるを奈何せん。

此の實況に依つて現今及將來を觀察すれば、今二三年間は余未だ順境の傾向と斷言する能はざるのみならず、今年は日清戰爭後にける膨脹の死活の定まる厄年と謂ふも憚らず、殆んど今年まで四苦八苦して彼より借り是より借り、辛うじて工場又は會社を維持し來りしものも、本年に至つて到底氣息奄々の命脈を繫ぐこと能はずして自ら破產をなし、或は破產宣告を受け、遂に其の處分をなして債務を免かるゝ現象を本年に現はすものは多々あるべしと余輩は豫測するを憚らず、現に東京、京都、大阪、名古屋、九州地方に於ける工業の閉鎖銀行の破產其他を以つて見るも、既往七八年間辛うじて繼續したりし事業も破綻して遂に治療するこ

と能はざるに至たり、而して清算勘定をなすは今年又は來年に及ばんと思惟す、然らば今年の如きは昔年失敗の跡片附の年にして決して順境の年にあらざるなり、跡片附の結果として銀行に一時回收したる金高を計算して我經濟界は順境に向ひたりと言ふは、恰も五人の家族の中二人死亡したる爲め、飯米其他生活費に餘りあるを以て我家は繁昌せり我家計は順境なりと言ふと均しく、一笑に附せざるを得ず。

以上陳述する所に依れば、本年は商工業の清算勘定として一時銀行に集金するは事實然るべしと信ず、然れども其集金したる資本を再び放下する事業の興らざる間は、決して經濟界が順境に向ひたりと言ふべきものにあらず、否其放下すべき事業なきが爲、銀行家は本年或は本年以後は其資金を以て株券を買入れ、其利息を以て銀行の業務を經營するが如き拙策を執らざるを得ざるやも計り難し。事此に到れば予は順境に向ふと言はんより寧ろ我經濟界は退歩して再び未開の經濟界に立戻りたるものなりと信ず、是等の事情を綜合して本年に於ける我邦の經濟界は、寧ろ順境より逆境に傾くと言ふも誣言にあらざるなり。

婦人に於ける猜忌嫉妬の必要

「東洋學藝雜誌」　醫學博士　三宅　秀氏

女子の精神の動かされ易いのは唯弊害のみあつて社會に利益することが一向にない樣に思ふのは謬見である、女子は愛憐の情が男子より深いと云ふことは誰も知つて居る事實である、此情の起るのは畢竟外圍の物事に懸動され易いからで直に同情を表するのである、他人の苦惱を察し思遣りが能い、其處て病人の看護をなしたり困窮者を救濟したり孤兒若しくは棄兒を養育したりする慈惡の業は恰も女子の天職となつて居る、此同情を懷くとの厚いのは婦人の淑德として社會に大功德を爲して居る、又女子は男子に比して權能に於ては劣りて居る代りに、社會に害惡を致すことも遙かに男子より少ない、尤も男子は皆惡人て女子は悉く善女であると云ふとは勿論ないが、前年中の罪惡を犯したものゝ統計を擧げて比較すると、左の通りである、三十四年度末の罪囚の數を調べて見ました所が、男の囚徒は五萬五千二百五人ありまして、女の囚徒は三千六百七十三人女の犯罪者と云ふものは極めて少ないものである、男が五萬からありまして女は三千しかない位いてありますから、凡そ十五分の一てあつて、女の犯罪行爲は甚だ少ない、何故女は斯の如く犯罪行爲が少からうか、是も尙又精しく此方を研究して參りますと、女は罪を犯す時は何樣な行爲をして罪を犯すか、如何なる種類の罪を犯すかと云ふことを調べると餘程面白いが、今日はそこまで論ずる暇がありませぬ、唯女は罪を犯さうと云ふ程の思ひ切つた所爲、猛劇なことをやり得ませぬてある、原來女子は決斷の悪しきものにて舊を捨てゝ新を取ることを好まぬものてるあ、男子は進取女子は保守主義である、故に思切りの惡いことを女々しき所業だと申します、併し此守舊主義は天の配劑にて餘りに氣の變り易いのを防がする手段でありましやう、恰も此惡事を爲ることの少ないのも自ら大に愼む所の心、即ち自制心があつて進んで事を爲さぬからてある、總て女は多少の教育を加へませぬても自ら引込み思案て、能く前後を省み粗暴なことを思切つて爲る樣なことはない、それは自ら制し自ら愼むと云ふ方の心が天性備つて居る、此性も亦己の子孫を育成するに利があるからてある、それだから女の方が男より遙かに柔和從順てある、此柔和從順の性を何故に女子に與へられたものであるかと云ひます

と全く反抗敵對な爲れば子孫繁昌の爲にならぬ術も已の種族を殖して安らかに子孫を養育する爲には成るべく人に扶助して貰はなければならぬ、自分が先きに立つて果斷な事を爲したり、亂暴なことをしたり、人を騙ますして物事をすると云ふことはしない、畢竟自分は子供等を養ふ爲に人に手倚つて居る方が、却て人に能く扶助せらるるからである、そこからして自然に女と云ふものは柔順なのであらう、女の方て最も愼むべく戒むべきことは猜忌嫉妬の心てありますが、此嫉み妬むなと云ふことは男の方にも全くないてはないが女の方に多くある心てあります、何故猜忌心だの嫉妬心か常に女子にあるかと云ふと、是も矢張り已の子を人に害せられないやう、人にいつまでも扶助せられて見離されない樣に心配するからである、詰り已の子を充分育上げるまでの間、自分か人の補助を失はぬやうに思ひ過ぎの結果から今の猜忌心とか嫉妬心とか起つて來る、實は好ましくない心性でありますが、已むを得ざる譯で、其心性か女の方は發達して居ります、何らかして其子供を養つて子孫を繁昌さして行くに都合の宜い仕組になつて居ります。

畏縮せる商工業の興奮劑

「實業評論」　三井銀行理事　波多野承五郎氏

米英のトラストが着々成功して往く々々は小資本小會社のものが翻弄されて見る影がなくならぬとも言へぬ、成程日本は東洋に僻在して居る從て其の影響も今日迄は尠なかつた、が併し世界の趨勢は最早や如何なる事にもトラストは攻め込んで居るから日本ばかり其例外たと言ふ事は出來ぬ、聞けば非トラスト案が米國下院を通過した相だが有意的防害を他衆に加へぬ以上は早晩形を換へ姿を變して現れすには居らぬ、言はゞ商業は自由である、經濟には國境が無いのだ、眞理の上からして法律が之れを壓迫するの理由かない、左すれば必ず我國を襲ふべきの時がある、否々小さいながらも業已に侵入して居るては無いか、スタンダード石油會社は其一てある、村井兄弟會社も其一てある、横濱あたりでも其一部らしいものが現はれて來た是れても邦人は安閑として常陸山や梅ケ谷の相撲を評するの暇があらうか、昔しの戰爭は歷山王が希臘人を率ひて亞細亞を征服したとか或はタメルランが蒙古民族を率いて歐羅巴を蹂躙したとか與に劍戟を執つての爭てあつたが、是れからの戰ひと言ふのは煙草をふかして資本の上に强弱を決すると言ふことに成るのだ、郵船會社や東洋汽船の占めて居る太平洋の航海權も早晩鉾を交へるの日が有るのだ。伊勢の神風ても有つてトラストを吹き飛はすことが出來れば格別だが今は其神風も當てには成らんから我邦は我邦丈て立派に其侵入を防かねば成らぬ更らに換言すれば日本は日本丈て商工業を遣り遂くるの覺悟をせねば成らぬ。

つまりトラストに當るにはトラストを以てせよと言ふに止るのだ、と言へば突飛な議論と思ふだらう、併し我が日本が三十餘年前までは三百諸侯が割據して三百國か三百箇の心てあつて互に相容れなかつたに拘はらず維新の大業と與に心機一轉玆に何千万圓と言ふ會社が幾箇も出來たてないか、況して征清の役には擧國一致て二億の軍費を一轉瞬の間に決したては無いか、事外國に係り外國との成敗て其防けぬ理由が何所にかある。

之を要するにトラストの侵入するは早晩免るべからざる事だ、否既に其の幾分は邦內にも見受くる樣になつたのだ、我れは決して之を恐るゝものてない、黑船の侵入に因つて我政權の二途は一途に歸したので同時に三百諸侯の割據が解けて今日の日本と成つたのだ、無事殆んと三十年人

心願る優越して國族内に爭ふの時征清の役となつて大に我が日本を活躍したのだ、併し是れは政治上の事だが今や内商外商の戰爭と見て宜いのた、畏縮せる商工業の興奮劑として昊天我れに幸ひし商工業の日本と爲すの天意かと推測すれば心自ら活躍する、敵國外患なければ國即ち亡ぶとの格言我れを欺かす斯道に志すもの千載の一遇として奮起すべきの時である、

店員の採用法

「實業の日本」　土屋　長吉氏

人物の鑑識は至難のとなれども、大凡左の標準を以つてせば誤りなからん。

一、店員を採用するに先ち必ず面語すべし、蓋し人は各其見る所を異にするものなれば、たとへ何人の推擧に依るとも、自ら面談するに非ざるよりは、自己の信頼すべき補助者を得難ければなり。

二、店員の採用は店舗に於てすべし、蓋し私宅の門悉は私宅に於てすべしと雖も、店舗に雇入るべきものは、先づ其店舗の規模管理の實況を一見せしめ、被雇者をして自己店舗の身を委ぬるに足るべきを覺悟せしめたる上、雇入を爲すを可とす、況んや私宅に於ける制度中には往々情弊の混じ易きに於てをや。

三、面會時刻を定むる事、此の如きは固より各人の隨意なれども、抑も我邦人には槪して時間の觀念乏しきが故に之を定むるときは、被雇者が時を重んずるの習慣ありや否やを知るの一助ともなりぬべし。

四、紹介狀及證明書の類に留意すべき事、若し他の商店より移り來れる者に就ては、以前に雇はれ居りたる商店の證明書を差出さしむるをよしとす。

五、履歷書に注意する事、即ち學術の有無、年齡の多少、出身せる會社、從前の職業及び成蹟等にして、殊に年次に間隙ある時は詳しく之を質すと肝要なり。

六、其嗜好如何を見る可し、惡嗜好は固より不可なれども亦嗜好なき人物は、只機械として使用するに適するのみにて、到底有望なる店員となるべきものに非ず、尙ほ其他其信教を問ふも一策なり。

七、言語動作及び身の廻はりに注目す可し、徒らに容貌を飾るは好ましきとに非ざれども、さりとて蓬頭垢衣豪傑風を氣取るは、決して「ビヂチス、マン」に適するものに非らず、又た言語は叮嚀なるを要し、動作は靜粛にして而かも活潑なるを可とす。

聖影安置に代ゆるに遙拜式を以てすべし

「讀賣新聞」　記者

過日岩手縣下の小學校に於て火災ありたるの際、使丁は、陛下の眞影を火災の難より擁護し奉らんとしたる爲め、燒死するの不幸に至れり。此の事件に關し、我同業時事新報は昨日の紙上に於いて一論說を載せたり。其大要に曰く、

皇室に對し敬意を表するは、我が國民の美德にして、火災の如き場合に於ても、一命を捨てゝ尊影を擁護し奉らんとするが如きは、其の心事に於て誠に嘉すべきものありと雖、しかも其の行に至りては果して

能く忠君の實を擧げ得たりと云ふべきや、畏れ多き事ながら若しこの事にして陛下の尊聽に達することあらば、少からず叡慮を煩し給ふべく、却て君に忠なる所以に欠くる所ありと曰ふべし云々

我輩はこの點に關し大體に於て同記者と感を同ふするものなり、然れども、我輩は又自ら別個の意見を抱持するものなり、今や此の問題が、漸く世人の注意を牽きつゝあるを機とし、試みに自家の所見を一言せんとす。

我輩は　陛下の聖影を各小學校に奉置することの是非に就いて疑を有するものなり。詳く言はゞ火災水害等の難あるの際、聖影を擁護し奉らんが爲めに、命を抛つ者を生ずる是非如何の問題に先ち、尊影を各學校に奉置すること其れ自身に就いて是非の疑を有するもの也。現に各學校より願ひ出づる時は、當局者が直ちに尊影を下賜し給ふことを奏請するは、無論學生をして忠君の念を深きが上に深からしめんとするの意に出でしものなるべきも、吾輩は寧ろ此の事の是非に就いて疑を有するもの也。

抑も火災の如きは、時に人爲の過失に基くことありと雖、水害地震の如き天變地異に至りては殆ど人爲を以て如何とも爲し難き塲合多し、然るに、是等の天變地異に對し絶對の豫防を講ずるが如きは、設備の完からざる小學校に向つては到底望み得べきことに非らず、之が爲に、從來天變地異の起る毎に、聖影を擁護し奉らんとして一命を捨てしもの、殆んど數ふるに耐ゆべからざるものあり、又不幸にして尊影に故障を生ぜしめたる塲合には、校長は世人攻擊の中心となり、是が爲め遂に自殺したるの例さへ無きにあらず、嗚呼これ聖代の一大恨事に非らずして何ぞ。陛下にして、もしこの事を聞しめさば如何ばかり大御心を煩し給ふべき、推測し奉つるだに畏しと謂ふべし。

我輩は是に於てか聖影を各所に奉置するを見合し、之に代ふるに遙拜式を以てせむことを主張せざるを得ざる也、

國語調査に就て

「教育時論」　文學博士　上田萬年氏

國語調査會は爾來熱心に調査を續けて居る。かの應急の調査としてまづ着手した假字遣の法には、隨分苦心して調査をして居るゆゑ、遠からず成案が出來るであらう、かの延音のーには、世間では、大分感情上の非難もあるが、種々研究して見るに、どうもこれより外に延音を顯はすに便利なものはないやうである。かの外國地名人名取調の結果も、原音の級に拘はらず、ーを用ひるとになつたのは、他に仕方がないからであらう。且これを片假字の間に交へて用ひる方は、一見した上でも調和して居て、今日では、誰も奇とせぬ有様であるが、平假字の間に交へて用ひるとなると、出線の間に直線が入るのであるから、聊か不調和であり、從來の慣用もないからして、少しこまる、且しの字と紛れる恐もあるといふので非難が出るのであるが、然らばーを用ひないで何を用ひようかと考へて見るに、どうも外に適當の字がない。今延音の塲合にーを用ひるのがどれほど利益であるかを實例に徴して比較して見るに、かきくけこの延音を記すに、かあ、きい、くう、けえ、こおとあいうえおの五で記すもの一法、かあ、きい、くう、けい、こうとあいうの三で記すのも一法であるが、そのいづれよりも、すべてーを用ひて、かー、きー、くー、けー、こーと記す方が最便利である、唯動詞の終止言だけは、うを以て止めるが至當であると思ふ。これらの事を始として、他にもいろ〳〵



藤

漱石選

小魚とる山川岸や藤の花　文雄
小弓引く侍衆や藤の棚　不破
白藤や神の御苑の廣くして　夏月
谷奥や藤の紫たなびきぬ　北芳
藤さくや朱丹ぬりたる女人堂　梧郎
茶坊主の講釋顔や藤の花　紅子
裏門を明け放ちけり藤の庵　汀溪
楚々として藤の花房風渡る　陽炎

藤棚や草餅つくる婆々が茶屋　梧村
藤棚にすき洩る春の日脚かな　同
行春を物思はれて藤の花　捌月
藤さくや源氏ひもどく窓の先　同
谷間の細き流れや藤の花　踈石
夕映や松くれのこる藤の花　同
虻の聲やみけり藤の日は暮れぬ　紫染
蜂去つて虻來て藤の日はくれぬ　同
遅れたる道連まつや藤の茶屋　千笑
藤の茶屋藤のステツキ求めけり　同
堂守が自慢の藤や花五尺　同
沓ぬぎに藤の落花や池の亭　文狂
汐風や藤の花さく磯馴松　同
茶をすゝむ赤前垂や藤の下　同
藤棚や庭の芝生に人あらず　休戸
草臥や藤の床几に憩ひけり　同
しら藤や宮新しき初祭　同
白藤や尊き神ときくからに　夏風
藤棚や額にふるゝ房うれし　同
藤の花鳥居に垂れて野宮かな　同
白瀧の數十尺や藤の花　薬子

藤の花神の御池の赤き橋　葉子
藤棚の下に古びし床几かな　同
崖上の藤や不動を拜しけり　三面庵
吐き返す緋鯉の口や藤落花　同
藤の花社は古りて繕はず　琵琶舟
我庭や藤の下影つゝじ咲く　同
藤棚や目白の籠を吊るしたる　同
藤咲くや蛇口を落つる寺の瀧　柳家
太皷橋渡る社や藤の花　同
白藤やからむたゑだの門榎　同
崕端のちよろ〳〵瀧や藤の花　雨人
棒鼻に茶を賣る店や藤の花　同
駕下ろす峠の茶屋や藤の花　同
小つゝみや藤の花散る神樂堂　禿山
鉢植の藤ちる床や刀掛　同
小瀧ある村社の裏や藤の花　同
藤咲くや大津の宿の蜆汁　越楼
擊柝の村塾午なり藤の花　同
藤棚や女名前の琴指南　同
絶壁や瀧もあるなり藤の花　萩生
藤の花虫もとまらぬ盛りかな　同

祝結婚

藤の花末長かれと祝ひけり　萩生
藤咲くや蜂とぶ寺の板庇　蝮童
葛餅に客よふ亭や藤の花　同
宴はてゝ人さゝめくや藤の亭　同
藤棚やつなぐ鸚鵡の片言葉　同
藤咲くや世は藤原の世なりけり　丁堂
禁庭や緋袴の官女藤の花　同
藤の花散るや緋鯉は知らぬふり　同
幼子や手のとゞかざる藤の花　同
春惜しむ藤の茶見世や鯉料理　芒生
君が戀藤紫の褪やすき　同
白藤や白蛇を祭る神の庭　同
藤の花雉子鳴く山を下りけり　同

題比翼塚

藤咲くや白井權八小紫　同
藤棚や時めく人の下屋敷　摩天鶴
下午にして雨催ひや藤の花　同
手ずさびや落ち散る藤の小半丁　同
白藤や虻ないて心そゞろなる　同
薔薇驕り藤つゝましき花壇哉　同

人　藤の花かよはき松も頼かな　　三而庵

地　藤の花合歡の若芽や女學校　　萩生

天　藤いけて弗函の漆新らしき　　摩天嶺

選者吟

奈良は社の古き杉の木藤の花

藤の花風なき晝となりにけり

年若き妾を連れて藤の茶屋

辮の藤尾上の櫻明けにけり

温泉の宿や寢轉んで見る藤の花

大方は隣りへ咲きぬ垣の藤

白藤や躑躅植えたる庭の門

藤棚におでんの旗や園遊會

藤の茶屋足だるき日の旅夕

隣る鉢の松へ這はんの鉢の藤

課題

蝿　「四月十八日限」

汗　「五月十八日限」

草若葉

森　鬩　堂

比叡山通夜の一夜を常樂のかぜかんばしくわれ夢に入りぬ。

探り得たり山かげ老い木五株の梅いさゝ川岸草青きところ。

宜しめのひたひに細き眉ずみの夫れより淡き三日月のかげ。

吾妹子が手すさぶ雪の白うさぎ其目ふさはし南天の實の。

栗　山　直　扶

漁父あらず舟人あらずうつろ舟一つ浮びて江の水さむし。

枕べに氷る硯に息かけてあられ降る夜をひとりうた書く。

雪とけて入江さにごる淀川の岸のさゝ原うぐひすのこえ。

いかめしき命婦しづかに駕籠とめて春のまつ原鶯を聞く。

爪や飛びし琴柱やはねし六段の隣りの曲は今とだえた

り。

あかつきをうまやぢ出れば星まばら行手の山は靄にかくれて。

○　　正富汪洋

よくつよく酔うて狂うてほゝゑみてこのあめつちはわれ一人ゆかむ。

あけぼのゝ菫ふく風清きかな今の詩の神うた誦するこころ。

あかつきの菫のひろ野君はあらて美くし羽のめをの蝶とぶ。

窓に倚り袖かみしめてかみしめてきみをうらむとあゝ何とせん。

前髪の房なすこほれ美くしな朝戸に倚りて牡丹見るきみ。

あまりにもきみが思ひの深かるにヒユームの説ををかしとゑみぬ。

○　　谷川雙美

小止みなき雨の夕のわたし舟旅の嫗を一人のせゆく

小雀の群れて餌をはむ朝庭にさゞんかの花散りみだれたり。

○　　岡野美代子

たゞひとりそゞろありきのあはれなり梅の影ふむ朧夜の月。

少女子が薺摘み取る川沿のつゝみつゝきに梅の花咲く

○　　田中花涙

雛の間に雛の衣をあらそひぬくれなゐの袖むらさきの襟。

折々に星閃めきて椰子の樹の森の彼方に荒獅子吠ゆる

夜はふけて燈うすらぐ細殿を誰そや過ぎゆく衣ずれの音。

牛追ひて乙女無心に眺め入りぬ風に吹かるゝ二本小百合。

米洗ふ里の乙女が黒髪のかざし美くし白もゝの花

漢詩

日本高島呑象屬題　清内閣大學士宰相　榮祿

卜筮之書未經秦火紅。徐福當年挾以遊海東。海東世歷二千五百載。神山三島亹々多儒風。濤聲震蕩。雲影空濛。有人寛衣博帶正危坐。拂龜端策默語通蒼穹。天擇存其宜。物治愛其同。神靈朝歌鬼夜嘯。手振玉簡光玲瓏。水火氣化亦纛迹。吉凶禍福非人功。九尺之蓍不盈握。

呑魚龍。有響如雷氣如虹。陰陽激海至今巳七日。起視渤海浩々世界盡入冥心中。我言持贈高島翁。天道深微未可窮。

呑象翁著易斷、問諸海外、彼土名公鉅卿碩學鴻儒、爭致賛揚之辭、裒然成冊、翁頃梓行、以頒交友、中有此一篇、頗堪諷誦、便抄出之、示未讀者、

次信夫恕軒翁賀鑄鐘詩韻以呈日龜上人　新井蘆村

治鎔古鏡作洪鐘。瀏亮之聲制毒龍。誰向禪林稱活佛。我於淨界拜詞宗。善男善女集將聽。法弟法兄爭欲撞。喧寂悟來元一致。上人傾耳笑從容。

相題下筆、句々流動、字々靈活、性靈一派、是爲極致。

送日龜上人之池上

行雲流水濟生涯。此趣世人知不知。池上白櫻欽慕久。中山黃鳥別離悲。唱君妙法蓮華偈。和我回文錦字詩。更有道心堅且固。與他鐵鉢永維持。

池上中山、蓮宗靈蹟、人所遍知、一入詩筆、自爲佳聯、妙法回文、亦才子之筆、匪夷所思、

菅公

學問兼和漢。文章冠古今。不言流謫苦。只說帝恩深。

後半十字、說盡公心事、無復餘蘊、

自題小照

落地春風七十年。萬梅花底絕塵緣。自疑吟骨老逾健。不是前身姑射仙。

七十老翁、詩筆益健、亦是鐵骨氷心、

盆魚

盆裡擬成蘆荻洲。豆人垂釣也風流。小魚看做大天地。出沒浮沈儘自由。

寬政諸家、獲此種作、以爲一代壓卷、

江上春興

江上春深水亦霞。抽青三寸有蘆芽。乍看渲碧渦紋處。一隊游魚逐落花。

亦是在寬齋詩佛間、

訪關精軒先生　小林雨峰

飄零湖海儘消魂。學業依誰遡古源。一夢十年蹤舊雨。宿緣今日訪高軒。春尾麥氣青連野。淺水梅花雪滿園。對晤尊前忘彼我。閑雲倦鳥又黃昏。

前聯敘情靈活自可喜、後聯描景平淡雅潔可愛

白河懷古

碧海桑田一夢悠。江山千歲使人愁。蟬邊落照銜巖岫。鳥外浮雲壓郭樓。兵馬當年八州亂。炊煙今日萬家稠。

幽花啼露晩蕭瑟。風冷白河關上秋。

感慨之作、自具氣骨、

偶成　　前田含潤

我聞人間壽、平準二十四。我今近五十。既是壽併二。
乃死亦無憾。生固所不忌。生死兩從容。唯俟天命至。
人事盡當盡。不敢貪名利。故於忙劇間。閑遊有餘地。
花影流水村。鳥聲脩竹寺。一瓢隨雙屐。到處儘成醉。
富貴縱及身。去就應從意。若辜負風煙。此是小人事。

春興二首

才人常有務。鈍者自無營。晏起春眠足。初晴旭日鶯。
庭花帶餘濕。檐鳥弄佳聲。聊想村園興。暫忘城市情。
平生聊有養。俯仰此心安。容膝茅茨窄。出門天地寬。
煙消初日麗。花醒鳥聲歡。春服携童子。浩歌沂水端。

春夕偶書

名走利奔迷路長。卅年閱盡世間忙。春風一夜閑公案。
修到梅花骨亦香。

夜歸

夜色壓城人語低。幽栖隔在萬櫻西。飛花一路亂煙月。
歸到門前猶欲迷。

五言閑澹放曠、安分知足之意、使達人首肯、絕句風

神韻約、自饒餘情、

次青柳峽南見似詩韻　　水原眉山

陶冶群才有義方。嘉譽早已冠州鄉。子孫應見芝蘭秀。
名利難淫鐵石腸。白日園棋心自靜。陰綠煎茗味偏長。
欽君風采異凡俗。一夜論文分半床。
未學仙人辟穀方。多年寄食滯他鄉。登臨賴有溪山勝。
題詠慚無錦繡腸。晝靜階前紅藥落。霧深崖上碧蘿長。
偶然邂逅風流士。半日清談共對床。
浮生不用養生方。秖合優遊入醉鄉。滿坐清風嫌惡客。
百壺佳釀洗塵腸。鳶飛魚躍相高下。鶴嘴鳧脛各短長。
安分得宜無所願。豈懸金紫踞華床。
貧賤驕人田子方。心之所適是吾鄉。繡衣難慣鹿麋性。
玉食何須藜莧腸。世上招譏才本短。山中省慮壽應長。
清泉白石松陰下。一陣涼風六尺床。
客歲王師駐朔方。南征又見入蠻鄉。逡巡憐彼犬羊質。
饕餮恐他豺虎腸。廟算終難扶弱小。隣交未可得全長。
我生慷慨爲何用。獨向溪山臥簟床。

首々雅健

調査したこともあるから、これらの凡てに付てはいづれ世間にも公にして大方諸君子の批評を乞ふつもりである。又それまでには吏員を地方に派して、先年の字音假字遣改正が、どの位の成績を擧げて居るか、又どの位影響を他に及ぼしたか等の事實を調べさせるつもりである。

△歐埃米塵

▲英國の海外貿易總額一年八億磅、其四分の一は領地及び殖民地との貿易にて、他は外國との取引なり

▲輸出額の平均、英國民は一年一人に就き五磅十九志六片、合衆國は一人二磅十八志四片

▲合衆國は二十年間に遞信の收入八千四百万圓より二億五千万圓に増加せり

▲過去三十年間獨逸は其人口の四割を増し、英國は三割、合衆國は一倍となれり、而して佛蘭西は僅に二分を増加せしに過ぎず

▲那威より一昨年海外へ移住したるもの一万一千人、昨年は増して一万六千人となれり

▲西班牙は一年に三千五百時間晴天日光を受くるの割合となる歐洲にて最も晴天多き國なり

▲西比利亞に一万以上人口有る都會三個に過ぎず

▲新月より新月までの時間、二十九日十二時四十四分二秒と八七を精密なる間隔とす

▲人間の血液千分の七百七十九までは水なり

評論

三たび某博士を訪ふ

米峰

いつも君にやッて來られると、實は又かと思ふこともあるのサ。しかし妙なもので、時々來るものが、二月も三月も顏を見せないと、何だかもう來てもよさそうなものだ位には思ふヂ。ハ、、、、それにいつも君の來る時は、話の種がなくなッて困ッて居るところだらう、ところがこの頃はなか〳〵あるテ、そりやア實に名論卓說山の如しなのだから、かういふ時に君の來ないといふのは、ちようど山海の珍味を並べて客を招い

たのに、一人も來て呉れない時の心持もかくやと言ひたい位のものだ、今日は一番、僕の舌が爛れるか、君の筆が坊主になるか、根氣競べをやりたいと思ふがどうだネ。ナニ？忙しいから要點だけ話して呉れッて、隨分蟲のよい事を言ふてはないか、そッちの都合さへよけりや、僕の忙しい時でも何でもお構ひなしに話させて、そッちの都合の惡い時は、僕の方に十分意見を述べさせまいとするなンかは、なか／＼づるいぞ。新聞記者や雜誌記者もいろ／＼來るが、君のやうな厚皮しいのはあンまりないなア…………。お茶か、イヤ今日はチト御馳走をしてやッて呉れ、と言ッたところが、禁酒なンて野暮先生ては仕方もない、奥さんにさう言ッて、チョコレートにカステラでも、うンと持ッて來て呉れ…………。それから僕にはビールだ、成るたけ早く。

學齡兒と區役所の干涉

僕の一番末の忰が學齡期に達したので、少し路は遠いが、この區では評判もよし、又實際設備も整ッて居るから、〇〇小學校へ入學させやうと思ッて、區役所へ學齡期に達して居るといふ證明を貰ひにやッたのサ。ところが君、區役所の先生どういふつもりか、その證明と何時に、ツイそこにある△△小學校といふのへ入學させろと指圖してよこしたが、實に怪しからンぢやないか、一體區役所が、兒童の就學を督勵するのは惡くないが、父兄の學校撰擇の自由を束縛して、何校へ入學させろなど〻指圖するなんて、甚だ出過ぎた處置だと思ふがどうだらう。マア君考へて見給へ、親の身になれば、誰れだッて設備の完然した學校へ入れたいに極まッてらアネ。なアに僕なンかは、貴族的な階級的な事は大嫌ひだが、さうかと言ッて、薄暗い空氣の流通の惡い、夏は暑く冬は寒く、黑板がひンまがッて居ても直すでもなく、腰掛の足が折れて居ても繕はうともせず、夫婦かけ向ひかなンかで生徒を取扱ッて居るやうな、あの代用小學校ネ、あンな學校へはどう考へても可愛忰や娘はやられないサ。なア君、さうぢやないか……。よし／＼そこへ置いてけ……、さア君は食ひながら聞き給へ、僕は飲みながら喋るから……。然るに君、〇〇小學校へ入れやうと思ッて居るものに向ッて、△△小學校へ入學させるなンて、どういふ御都合が區役所樣におありなさるか知らないが、僕は何だか僕の自由を蹂躙されたやうな氣がして、不愉快でたまらなかッた。それから君御大將御自身に區

役所まで御出馬あつて、いろ〳〵理窟を並べて、とう〳〵〇〇小學校へ入れることにして、先づ大勝利万歳な譯サ。それからいろ〳〵人の話を聞くと、理窟でも言はないと、それをいゝ事にして、どし〳〵この壓制的生徒分配法を行ふのださうだが、どうも不都合な事だと思ふ。父兄の希望して居る學校が、どれもこれも滿員になッて、行き場がないといふやうな時には、さういふ指圖もして貰はにやならないが、のッけからどこへ行けないッて、實に有りがた迷惑な話ぢやないか。

代川小學校と濟美小學校

君は調べた事があるか知らンが、あの代用小學校といふものは困ッたものだヨ。設備の不完全は言ふまでもなく、教師などでも、人間らしいのはまア見當らない位、しかし、既に代用小學校といふのだから、すべての資格があたりまへの小學校と違ふべき筈はないのだが、サテ實際にあたッて見ると、なか〳〵さうはいかないことがある。宅へ出入の大工の話だが、先月まで下谷に住ンで居て、娘をその近所の代用小學校へ通はせて置いたのだが、今度本郷へ轉宅したので、◎◎といふ可なり評判のよい小學校へ轉校させやうと思ッて願ひ出た。するとその學校では、その娘が今まで代用小學校に居たのだといふ事を聞いて、そンなら何町に某と云ふ代用小學校があるから、そこへ入れたらよからうと言ッて、どうしても自分の學校へ入れやうと言はないので、大工先生忽ちむかッ腹を立てゝ、ペランメーを二ッ三ッ振りまいて歸ッたさうだ。成程今の代用小學校のやうに、有らゆる點が不備では、氣の利いた小學校が連絡を厭がるのも無理はない。しかし、既に代用小學校である以上は。厭だからッてその連絡を謝絶するといふ理由はない、その連絡が出來ない位なら、代用といふ名をなぜ許したか、こりやア實に聞きどころだ……。と言ッてなにも君に喰ッてかゝる譯ぢやないよ、アハ……。要するに、あンな不完全な代用小學校なンかは、どし〳〵叩きつぶして、代りに立派な小學校をどし〳〵建てゝ、學齡兒童をまごつかさないやうにしなくッては、東洋の文明國たる、日本の首府たる、東京市の面目を如何せむやだ。

近頃、嘉納君や上田君が、なにか素的に貴族的な小學を建てたとか言ッて、僕にもどうですと言ッたものがあッたが、僕は不贊成だ、東修二百圓もよいサ、月謝の高いのもよいサ、しかし、たゞさへ階級的で、官尊民卑的で、拜富家的で、貴族威張りの平民へこたれ的

であるこの日本に、しかも學習院といふものさへあるその上に。あンな貴族的なものをこしらへて何とするつもりだらう。上田君なッかは、自分の子供をやる學校がなくて困るから、とか何んとか言譯して居るさうだが、さうなにもお高くとまらなくッてもよいではないか。市立の小學校微なりと雖も、尚上田君等の子供の敎育位は出來ようよ。若しまた小學校が不足だからといふのなら、あンな貴族的なものをこしらふだけの費用と勞力とで以て、普通の小學校の三ッも四ッも建てる方が、東京市全體のためから言ッても、非常に都合がよいのである、僕はたゞあんな變てこな學校で小供を育てゝ、この上にも一層、位階や官等の力に依賴するやうな卑屈な精神を養ひ、金の力に媚びるやうなさもしい心持を吹込まれるのが恐しいのである。僕は飽くまで不贊成だ。

哲學館事件

一私立學校の出來事で、あの位人氣の立ッたといふのは、日本もなか／＼進歩したものだと、實は心竊に感心して居るのサ。久米さんの論文チ、あンな事てさへ一同恐入ッて、誰一人久米さんのために辯護して呉れなかッた時代があッたのに……、イヤまア何にしても忠君愛國といふ思想が段々と進歩して、島國的でなく、重箱の隅楊子的でなくなるのは、至極結構な事で、是非さうなくてはならないのだ。それにつけても不思議なのは、平常倫理とか、敎育とか、宗教とか、言ふ方面の、專賣所よろしくといふ、中島力造君や井上哲次郎君などが、この度の事件について、ウンともスンとも言はないことだ。

學者の本分

一體日本の學術界へ、ミユアヘッドの倫理學を推薦したのは、中島（力造）君だッていふぢやアないか。僕か若しさういふ地位に居たら默ッて居ないチ、イヤとても默ッて居られないチ。縱令又、ミユアヘッドの倫理學を推薦しないにしても、大學の敎授として倫理學の講義をして居るものが、こンな實際問題の起ッた時に働かないで、何の役に立つ、實にくだらンぢやないか。法律上の實際問題の起ッた時に、法學者連が沈默して居たら、醫學上の實際問頭が起ッた時に、醫學者共が知らぬ顏をして居るといふ位なら、學者も何も入ッたものではない。學者々々とえらさうな顏して、多少世間の人に尊敬を拂はせて居ながら、世間の人が或る問題の解決について、學者を待つて居る時に、あち

ら向いて我關せず焉と濟して居て、それでも學者の本分學者の天職を盡すといへやうか。井上哲次郎君などもさうだ、平常は賴みもしないのに、倫理即ち宗教だの、現象即實在だのと、隨分學者らしい議論もして居ながら、今度の事については、何も言はないではないか。何でも養子だとか養子にするのだとかいふ文學士をけしかけて、日本新聞へ愚論を書かせたとか何とか言ッたものがあッたが、實際どうだか知らないけれども、そンなつまらない見戲的行動をすべき時ではあるまいぢやないか。井上君の位地と言ひ、又平常のやり口と言ひ、かういふ時に、堂々と學者らしい意見を吐かないで何になる。僕は逢ッたら面責しやうと思ッて居るのだが、近來とンと逢ふ機會がない。それに君、中島君や井上君の敎へ子である。

哲學科第三年生

一同が、隨分皮肉な公開狀まで出して、學者の意見を求めて居るてはないか。それに誰あつて一言の答もなし得ないといふのは、一體どういふものだらう。どうも文科の敎授連は、一體に利巧で、おとなしくッて、おまけに金を溜める事が上手だと見える、アハヽ。オイ〳〵ビールのお代りだ、チョコレートもお代はり。

だ、ア、大部氣分がよくなッて來た……。おとなしいと言へば、近來大學の學生のおとなしさ加減といふものは大したものだ。我々が學生であッた時代と比較して見ると、そりやア實に非常な相違だ。カラの高いのは則ち在り、やたらにコスメつかせるものは則ち在り、インバチスをひけらかすものは則ち在り、而して元氣はと言へば消耗、意氣はと言へば銷沈、大きな聲で理屈さへ言ひきらない連中ばかりで、誠に張合がないのだ。ところがその中でも、殊におとなしい方の文科の哲學科の三年生が、擧ッてこの哲學館事件について起ッたといふのは、稍々人意を強うするに足るの出來事で、赤門大學尙多少の命脈を存すと謂つべしだ。唯々返す〳〵も、世の學者達が意見を發表しないで、このけなげな學生等をして、曖昧と腕押しの感を起させるのが、殘念でたまらない。

中島德藏君

僕はまだ面識はないが、中島德藏君は氣の毒だ。一體こンな事からして、一個有用の人材を犧牲にし、四方八方、何處へも手足の出せないやうにして仕舞ふといふのは、殘酷だと思ふ。そりやア文科の敎授連のやうに、一生涯樂にやッて行ける丈の財產でもあるもの

は格別だが、中島(德藏)君などは、失禮な申分だが、まだ金は溜まつては居まい、早速起るのはパンの問題だ。世間では、青森地方凶作の慘狀を見るに忍びないとか何とか言ッて、義捐金を募ッて居るが、僕は寧しろ、この眞理の忠臣をして、區々たる衣食のために、心を勞させるといふやうな事のないやうに、してやりたいと思ふがどうだチ。筆も達者、口も達者といふのだから、構はないで置いたッて、のたれ死するやうなことはあるまいが、かういふ人を助けるといふことは、謂はゆる學者輩、及び青年連に、非常に有功な教訓を與へることゝなるのである……　○アヽ、大部酔が廻はッて來た、今日はこれで勘辨して吳れ給へ、ゲーップ。

文藝時觀

ニーチェ論の再燃

虎溪

煙を見て火あるを證すべくんば、抱月子對竹風子のニーチェ論は、やかては炎々として思想の野を燎くべき火焔の導火線たることとなからんか、蓋し解決せる如く見えて、而も未だ解決せざる問題多きは、我が思想界の特徵にして、ニーチェ論の如きも、確かに其の撰に入るべきものなり。夫れ時流に順ひ、時好に投じ、雷同附和して枝葉の論爭にうつゝをぬかすものは、到底大なる主題を論ずる資なし、眞贄の研究は、愼重にして忍あるものならでは能くせざる所なり。

されば是れよりこの問題を論ぜんものは、下の如き制約の下に立つを要す、曰はく主題の意義を明らかにすべし、おなじくニーチェ論なり、而も彼れを偉人として崇拜せんとするものと、單に彼れが學說を評論せんとするものとは其の旨同じからず。又倫理觀より彼れを論ずるものと、詩人としての彼れを評するものとは一列に論ずべからず。總じてこれまでの論戰が往々其の的を外れて、互にあらぬ方に仇矢を放つが如き觀ありしは、其の立脚地の明らかならざりしに坐するものなり。

次に陳套の辨論をくりかへすなかれ。わかりきつたる事を再三再四絮說し、或は甲の旣に縷陳したるもの、乙取つて自家の說となし、以て論壇を賑やかにし、さはがしくして、得たりかしこしとするもの多きは我が思想界の弊なり。彼等おもへらく、彼の味者は反覆砕說せざれば了解する能はざればなりと、されど是れ所

謂味者の蒙を啓かん爲に、思想問題を弄ぶものなり、一方より見れば思想界を侮辱するものと謂ふべし。夫れ度し難き一二の大愚に數へん爲に、事陳りたることを一人の口もてのみならず、數十百人の口もて一度のみならず、數十百回喧々囂々たらんか、聾いたものゝ外はのぼせざるもの稀なるべし。而してかの一知半解の徒、術學の輩、漫に詭辯を弄して思想界を攪亂するものは論ずる限りにあらじ。

善と美と

善美の意識を致一なりといふものは謂へらく、善の極致はこれ美にして、美の極致はこれ善なりと、又曰く美ならざるものはこれ未だ眞の善にあらず、而して善ならざるものは又美ならざるなりと。されど其の終極（若しくは始源）に於て善美は一なりと說くは、差別なきものは同一なりといふペチチオプリンシピイの過誤に陷いれるなり。次に單なる意識（或は活動）の派生に成れる善と美とを同一なりとするは、善意識と美意識との性質を誤解したるものなり。即ち善は有目的にして、有利害關心なれども、美は無目的にして沒利害（無關心）なり、かくして彼等（美と善と）は、自らなる領域を占め、其の一致と不一致とを意とせざるなり。

かの古き心理學者が、知情意の三意識を心が有する三活動と見たりしが如く、眞善美の三意識を以て三個の活動と見るものあり、余は是れ等の說に名づくるに心的三元論の語を以てすべし、そは三個の特殊なる活動を承認するを以てなり。かゝる論者は必らず又各活動に配するに、殊なる對象を以てせんと企つべし、例令ば美的活動の對象は自然界にして、善的活動の對象は精神界なりと論ずるが如し。されど論者は心に三種三元の活動を認めて、三個の對象を配しながら、如何なれば實際千種萬樣の活動を有すべき心に、千種萬樣の對象を分配せざるか。余は知情意を特殊の活動と見ざる如く、眞善美を同一活動より生じたる三個の現象（若くは觀念）と見做すが故に、其の對象の物的たると、心的たるは毫も關係することとなし。余が難者「善美一致論」の評に二元論の誤謬といへるものは、形而上學の所謂物心二元論を指したるものにあらで、かの論者が善と美との特殊の活動を立したる心的二元の誤謬を指摘したるに在りき、今にしておも

へば彼れは三元論者なりしならん。

▲片々錄

◎新小説の柳浪子が「磯の煙」たしかに近頃の佳什なり、其の品等はおなじ人の作「骨ぬすみ」「紫被布」などに比ぶべきや。物は「河内屋」などの如くトラジカルなれど、主公お國の死に至る經過、餘りに無造作にして、大に感興を牽く能はざるは惜し。

◎原抱一庵氏が飜譯の筆のいよ〳〵老熟の境に入れるは其の「聖人か盜賊か」に於て見つべし。而も大に讀者の注意を惹く能はざるは、所謂漢文くづし流の文體が、小説として適當ならぬとを證するものなり。氏は意地きたなく讀者に同情を強ふるを止め、自から大に覺悟することなくば、今後の運命知るに難からじ。

◎坪内博士が「通俗倫理談」出づ、例の穩健なる氏の說とて、理論、實踐兩つながら今の思想界に資すること大なるべし。余は善惡の標準及び性論に關して、稍ゝ異なれる說を有す、他日を竢ちて教を乞ふところあらん。

◎おなじ博士が監督の下に在る「通俗世界文學」第壹編出づ、ミルトン失樂園物語これなり。かれて新體詩人として知られたる繁野天來氏の筆とて、莊重典雅、能く原文と似通ひたりといふべくや。併しこの種の文が、如何なる階級の讀者に喜ばるべきかは余の知らざる所なり。

◎歌舞伎三十四號「オセロ」に關する評論もて滿たされたり。坪内博士の「オセロ」談大に見るべく、米僊氏が、おなじ歐洲劇の面影を顯はさんとならば、詞を日本に直したゞけで、場處、服裝、筋、詞等そつくりそのまゝ演じたらばといふ注文も理りありと聞え、米齋氏が書割に就きての意見、學海居士が原書に對する批判など又有益の文字なり。其他川上高田藤澤等が「オセロ」「イヤゴー」等に關する用意や理想など〳〵合せ見ばいと興深かゝるべし。

◎早稻田學報八十一號、綱島梁川氏の動機論を載す、これは二號に渡るべき大論文なりとか、抑ゝ桑木中島諸氏の說に對して一生面を拓開し得たりしや否、これを他日の細評に讓らざるべからず、唯余が一言を添ひ得べきは氏が病床に在りてなほ筆硯に親み、常に斯學に貢献することを怠らざる不撓の精神の歎美すべきこと是れなり。

◎この頃宗教や哲學の研究がメキ〳〵と頭を擧げ來れるに連れ、靈魂不滅の論提供せられる、淚香氏の其れの如きも其の一なり。夫れ靈魂不滅の科學的說明は事隙りたり、カントの如き倫理的說明亦おさなし。なべては主觀的說明、即ち自覺が死後に繼續すといふは超絕的にして又空想的なり。余も亦靈魂不滅を信ずる一人なり、而も余は特に言ふ、靈魂は客觀的に不滅なるものと、そは靈魂が世界精神の上に不滅なるべしとの謂ひなり。

◎余が新詩社(鐵幹子の)の諸氏に問ひたきは、君等の短歌は、見るためか、讀むためか、將見且つ讀むためか、三者何れにありやといふことなり、かの態ゝ難解の文字章句をつられて獨りよがりする手合は甚し度し難き輩なり。

◎紅葉氏が胃を病めるはかれ〳〵人の知る所なれど、遂に胃癌を患ふと聞くはいと氣の毒なり、氏は大いに老ひたりと稱せらるも、兎も角斯壇の重鎭なり、牛込の先生なり。氏が硯友社の首領として、數多の人才を養成せるを見ば、其の作家として才分の勝れたるのみならず又人物として決して凡ならざる知るべく、これを露伴が狷介にして獨りを善くするに比して一歩を拔くものと謂ふべし。而して將來吾人が氏に竢つ所、單

に金色夜叉の完成に止まらざるに今この報に接す余は『嗚呼この人にしてこの病あり』の語を思ひ出さゞるを得ず。

▲文壇怪氣焰

◎竹風ちう男も、え加減によしたらよからうに、まだ味噌がつけたらないかして、又々錆び腐つた一本槍を擔ぎ出したわい。まあ修業の爲なら戰つて見るも可から、が、立合うなら立派にやつてもらひたいれ。何うぢやあの腰つきは、見つともないぢやないか。臆病犬が敵に出つくはしたやうに、尻尾を股の下へ引つ込めて、逃身になつて、鼻先ばかりいやにしかめた處、見られたものぢやありませんぜ。

◎傍觀子曰く「あれ／＼竹風殿の旗色がゑらう變つて見えるぞえ「どう見えるぞえ」白う見えるぞえ「さては白旗が揭げられたかアーメン。

◎いりほが子曰く「いや／＼白う見えるはおことの僻目ぢや／＼、あれはえな、靑年の血で染めなつた、深紅色な本能滿足ちう旗が、雨風にうたれて、白らちやけてまゐつたのぢやわい。

◎御注進／＼「なんぢや／＼「ニーチャン(兄ィチャン)が灰(肺)になつてうせなつたから、もう大事ないとなもうたら、又々何ぢやら騷々しい物音がきこえるぞえ「いや大事ない／＼あれは風ぢやわい「はあて何の風ぢやぞえ「竹風ぢや／＼。

◎諷天が「韻語陽秋」に、何が何して何とやら『常識余推哲次郎』ちう句があつた、常識博士とはこの事よりぞ始まりけると來さか、どうか、赤門外漢の乃公にはとんとわからぬわい。

◎アラ不思議／＼常識博士の旗下から、天才學士がヒョコリ／＼とお出やるとは。天才學士の御のものと呼ばれ給ふは、そもなにびとにて候らふぞ、さん候らふ、桂月漁郎を筆頭に、天隨竹風等の二三子にてさふらう。

◎天溪ちうは文士中の議論家ぢやと「文庫」で賞められた男、又紅見のオセロの作劇を手傳つたちう男ぢや、が、イヤゴーの性格を評して『惡業の物を動機として惡事を爲す好物』なぞと古くさいことを言ひよろたゐ、なんたるイルラショナルなことをいふ男ぢやらう。其處へいくと親分だけに逍遙は話せるわい、彼れはこう言つてゐる、同胞を弄び悉く之れを自身か惡戲の餌食にするのが面白いといふやうな氣で惡事を働くのかと見える』師は弟子より優るものなりッと賞めておかう。

◎天隨ちう男・はノートブック切賣て飯を食つてゐる癖に途方もない大法螺を吹き立てる男ぢやわい。乃公は生學なる天隨が時文壇に立つ、むしろツー／＼しさ加減にあきれてゐるのであるが、この男が生まじめに『予は漢學者に非ず又宋學者に非ず世界に於ける東亞文獻研究者の一人のみ』とほざくに至つては、滑稽も極まるぢやないか。

◎古手文士が不遇の天才ぢやの、狷介孤立ぢやのと大それた囈語を吐いて、世間の意氣地なしどもの同情を釣らうちうは、見下げはてた下司根性ぢや。この奴輩は、仰山に愛國心呼ばゝりをして、屁臭い煙草を賣りつけよる岩谷天狗と好一對ぢや。

◎抱一庵ちゆ男のどろぼうとか何とかいう小說と來たらエタイが分らぬぢやないか、この男のは飜譯を賣るのが本領か序文を賣るのが本領かトンと、旗幟が鮮明でないやうぢや。それも善い、が、紹介の依賴狀へ『何卒作者の不遇をあはれみ云々』なぞと言つてくるたあナァサケないぢやないか、その位ならいつそ文士をやめて乞丐になつたらどうぢや、乃公も十錢位ならはづんでやらうよ。

◎花外ちう男　のことはこの前も言つたがちよつと氣の毒のやうでもある。この意氣地がないらしい男は、とう〳〵東の都に居たゝまれなくつて、のつぺりした人種の多い、西の京へ逃げうせたさうな。彼れが空谷ちう男に送つた新躰詩を見ると、こんなことが書いてある。甲斐の峽の雪分けて、雪の日京に入り來れば、君も窶るゝ面影や、纏ふ互の薄袷、何うぢやらう、このシリの方へ、男ながらも目に涙、ホーカイちうのを附けて、街上を流したら。

◎街外ちう男　もなんちう氣まぐれぢやらう。なんだつてお手前は盤城あたりの山ン中へすつこんでやがるんだい、おい〳〵出てこい、出てこいよッ、ちやつと採んでやらうわ、どうもな、田舎力士は腰がよわうてならん、それともお手前は老込みになりなつたちうて、賣買を止めて、勵をつかまうちうのかえ、なにッ、議員の候補…ブッ、お前の頭にあまだ有美の善寛がついてるな。

◎栢蔭ちう男　から乃公の處へ一封の手紙をよこした。この男、大隈夫人から御褒美を頂戴したかどうか、そこんとこは千葉鑛蔵にきいて見なかつたから分らないが、早稲田の秀才には違ひなからう、其の叉手紙といふがゴーヂなものぢやから一寸披露しやう。虎渓たあお前かえ（さうだよ）そでなかつたから手紙をかへしてもらはうぞ、（はあ返信料は頂戴しましたな）お前はな、よくも乃公の誤迷論へケチをつけおつたな、（いかにも）さあ、二元論の謬妄ちうが何處にあるか明白に言つて見ろ、（言はぬが花ぢやらう）乃公が私書で訊問するたあ、特別なお情だぞ、（お前の得手勝手だらう）若しか公刊紙上でぶちまけて見ろ、貴樣は二度とふたゝび世間へ野面をさらけだすとはなるまいぞ。（あべこべだ）併し文士は相見互ぢや、なんてもよろしい、恐かつたとあやまれ（お氣の毒ながら關東ッ兒だ）さすればシヤッポの臺だけは繋いてつかはすぞ、（米の代ばどうしてくださる）。一體が貴樣の哲學は何ぢや、（活動一元論！）つゝまず言つて見ろ。（お前にあ言つても無益だらうよ）なんぢや貴樣のやうに、物心の對立も分らぬ癖に、（二元論も分らぬ癖に）やれ主觀ぢやの、やれ客觀ぢやのと、口幅廣いことをいふ何處に權利がある（方寸の中に）。乃公が公刊紙上で返答をせなんだ理由は先つこの通りぢや（大出來〳〵）貴樣が恐いからではないぞ。（さうだとは誰もいはぬッ！）貴樣もな、よく〳〵思案して、心得違ひぢや、見當違ひぢやと氣がついたら、（お互樣ぢや）四五日の中に返答をよこせ。若し何等の挨拶もないに於いては、量見ならん、早速公沙汰にして了うぞ、（こつちの望みだ）其の時になつてほえづらかくまいぞ。（京都人ぢやあるまいし）

宗教時観

佛蹟探險概記

里山

左に記するは大谷光瑞師亞細亞大陸探檢の一部、印度に關しての大記錄に依り、佛蹟に就て概要を摘めるものなり。全部の詳細は數處に分遣せられたる一行の全部が歸着の上にて綜合し、本年九月を以て發表せらるべしと云ふ。

此記は他欄に掲載すべき筈なるも、編輯期日の都合にて本欄に收め他の宗教評論を省けり。

法顯は晉隆安三年今を去る一千五百年前、玄奘は唐貞觀三年今を去る一千二百五十年前、共に諸國を經て印度に入れり、其支那に於ける求法の高僧入竺せる者寡きにあらざるも人口に膾炙せるは此の二師あり、我邦眞如法親王の一人あり既に一千年前能く此の大業を企て給ひしも不幸中道にして殂落し給ひ、未た一人の入竺親く諸靈蹟を探れる者を聞かざるなり。

玄奘の西域記に記する邦國一百三十八あり、多くは佛敎弘宣の靈地、佛祖出現の聖蹤たり、昔時は諸高僧踵を接して東西往來し東漸の機を爲したりしも、治亂興亡の變遷と共に佛敎漸く衰へ、東西の交通亦た絶ゆ、古代佛敎旺盛の地今如何、千年の久き之を尋る者なし、近時交通機關の發達に依り僅に三五靈蹟を拜する者なきにあらざるも、其の奥を探り秘を究めんと企てたる者あるを聞かず、却て佛者ならざる歐人にして往々探險を試み、其結果我に向て印度佛敎の興起及び傳來の事跡を敎へんとするの傾きあり、佛者豈に坐して彼等の敎を待つに忍びんや、今回の行奮て錫を歐西に飛はし轉して印度諸國を歴遊せる豈に故なからんや。

法主の企圖せられたるは、西域記載する所の諸國を探り、其靈蹟を知り、以て古を考へ今に徴し、斯敎の興起宣傳盛衰に依り其將來に資する所あらんと欲し給ひしに外ならず、然に印度の地たる熱帶に屬し、煩熱堪ゆべからず、冬季と雖も常に華氏七十度の温度なり、故に彼地に入て事に堪ゆるの時期は十、十一、十二、一、二、の五ヶ月のみ、他は炎熱燬くが如くにして土人の外は生命を全ふする能はず、故に法主は一人にして此短時日に事業を全ふし難きを察し十數の随員を部署し、視察探究の方案を示して之を遂行することゝせられたり、斯くの如く印度は概して冬季猶ほ我邦の夏季の如くなるも、其北境所謂葱嶺の險を踰るに方ては三伏の天猶ほ雪を見る、法主が露國より、チャイニストルキスタン（昔時の龜玆國于闐國地方）に入られしは九月にして、内地にては褐衣重きに堪へざるの時なるも、若し此地に數十日を閲せば降雪の爲め入竺するに由なきを以て此の方面の調査をば随員渡邊哲信、堀賢雄二氏に命し、袖を分て印度に入られたり、然に其雪山々脈を越へらるゝに當ては白雪皚々、積て脛を沒することありき、前記渡邊堀の二氏は大沙漠周邊の古蹟を探り未發見の事實を得んとするに在り、此地方は所謂流沙即ち大風

の爲めに沙礫の流れ來て人畜家屋を埋むるが故に冬季ならざれば來往するに由なし、二氏は堆沙に埋沒せる遺跡を探らんことを期せり。

法主の「カシユミル」國に達せられたる迄の記事は已に渡邊本多二氏の通信世に發表せられしあり今は之を省き、同國以南の事を記すべし。

「カシユミル」の佛蹟

「カシユミル」の首都「スリナガール」に二週間滯在、其地古蹟の調査に從事せらる、カシユミルの記事は印度又は支那の書二つながらに出づ、印度にしてカシユミルを知りたるは彼の無憂王則ち阿逾迦王の時なりき、同王のとき五百の羅漢此の國に來至す、無憂王來て過を謝す、遂に王は羅漢の爲めに五百の僧伽藍を建て此國を以て衆僧に奉施すとあれば、此王の時を以て文明は輸入せられたるものならん、西域記に依れば伽藍百餘所、僧徒五千人、四卒堵婆あり並に無憂王の建ろ所なりとあり以て昔時の盛を想ふべし。

前漢書西域傳に依るに匈奴六月氏を破り、大月氏逃れて西方大夏に君たり、大夏の塞王又逃れて南方罽賓に君たりとありて漢時代を以て知られ、武帝の頃カシユミルに通ぜしを記せり、罽賓は即ちカシユミルにして西域記には迦濕彌羅國に註するに舊に罽賓と曰ふ、北印度の境なりとせり、抑もカシユミル國は玄奘が記する如く四境山を負ひ首都スリナガール近傍を除く外は總て山岳重疊、地として峻嶺嶮坂ならざるなし、其首都附近と雖も其最初は湖水にして都を定むるに由なかりしならん、玄奘は舊記を引て曰く國地は本龍池なり、如來滅後五十年、末田底迦羅漢佛の懸記に依て此地に來至す、即ち大山嶺に於て大神通を現す、龍此の羅漢に歸向して池水を縮め其地を以て羅漢に奉施す、池水盡きて却て龍地を羅漢に請ふ、爲めに西北に一池を留め、他は悉く羅漢に奉施すと云ふ、是に依て之を見れば最初は是地悉く湖水たりしを知るべし、今は「ウラル」「マナスバル」「ダル」の小湖を存するのみ、蓋し上古河水の浸蝕作用或は地震等の爲め湖水漸次減少して陸地を成し、其最も低き地即ち今の三小湖を留め、他は都市田園と變ずるに至りしならんか、玄奘の記に依るに、新城東南十餘里故城の北、大山の陽に僧伽藍あり、僧徒三百、其窣都婆中に佛牙あり云々とあり、「カルハナ」の史に依るに國都「スリナガール」の東南五哩に在る「ハンドレートン」は其舊都なりと云ふ、舊都は漢書に之を脩鮮城と稱し、魏書に之を善見城と名

く、此地は末田底迦羅漢の初めて都城を開きて衆庶を利導し、佛教を宣傳せし以來、佛教繁盛を極め、佛滅第一百年には五百の羅漢此に來至し、無憂王爲めに五百の僧伽藍を建つ、佛滅第四百年には健駄邏國の迦膩色迦王、撫運王、風遠く被り、殊俗内附せり、王が佛教を信ずるの深き脇尊者の言を容れ、四方に令して五百の賢聖を結集し、具に三藏を釋せしめたるは此地なり、當時世友尊者は五百の羅漢の請に依て上首と爲り、優婆提舍論十萬頌、毗奈耶毗婆沙論十萬頌、阿毗達磨毗婆沙論十萬頌、總て六百六十萬言備に三藏を釋し、大義重明微言再顯と稱せらるゝもの實に此地に於てせしなり、是時迦膩色迦王、赤銅を以て鍱と爲し論文を鏤寫し、石函に緘封して窣堵婆を建て其中に藏すと云ふ、玄奘の記に依れば新城外故城北の大伽藍を去る十四五里に小伽藍あり、觀自在菩薩の立像ありと云ふ、又其東南三十餘里に大山あり、故伽藍を存す形勢宏壯なるも蕪漫良に甚し、今は唯々一隅に小重閣あり、昔、衆賢論師此に於て順正理論を製すと云ふ、又た佛牙伽藍の東十餘里に小伽藍あり、是れ昔、索建地羅大論師衆事分毘婆沙論を製すと云ふ、序し來れば啻に以上の事蹟のみならず幾多の靈蹟は國中到處に之れありしや明かなり、然に星移り物換り今は殆んど佛蹟として見るべき片影なきの悲況を呈せり、此は玄奘に依るも迦膩色迦王の後、僧徒を斥逐し佛法を毀壞せし王の出てたることを記し、伽藍往々廢頽せることを記せり、初めは印度教の爲めに破壞せられ、後ちは回教の爲めに破壞せられ、遂に今日の有樣となりしなり。

法主は此地に二週日滯在せられ、日々古蹟の探査に從はれたるか、所謂舊城趾附近處々地層の高き所あり、石片累々、古瓦堆積、以て其故蹟破壞の地たるを知らしむ、其の破壞をして極めて悲慘に至らしめ、能く破壞の目的を達したるもの是れ火藥の力にても依りしかを疑はしむ、嗚呼二千年前佛教弘宣の靈地荒廢此の如し、誰か酸鼻に堪へんや（或云某西洋人は迦膩色迦王結集のとき金銀の函に三藏を入れたりとて二三年も費して採掘したりしも發見せざりし事ありと云ふ）古代幾多の賢聖出てゝ佛教を弘宣し、東西の高僧來往踵を接したるの地なるも、今は禮拜供養すべき佛像たに無し豈に慨かざるべけんや。

「ペシヤワール」及び「マルダン」の搜索

法主は夫れより Rawalpindi（ラワルピンヂ）に出て進て Peshawar（ペシヤワール）に入らる此の平原は昔時健駄羅國と稱し、都城を布路沙布羅と稱したり、迦膩色迦王の時首都たりき、此地は無着、世親、法救、如意、脇尊者等の生處にして、王城

の東北に玄奘の時一の故基あり、佛鉢の寶臺なりと云ふ、曾て城外に大菩提樹あり、迦膩色迦王所建の窣都婆は其の樹南に在り、高さ四百尺基趾周圍一里半、其上に二十五層の金銅相輪を立つ、如來の舍利を以て其中に安すと云ふ、此外王に依て建てられたるものを初めとして窣堵婆鱗次し、佛像星羅し、頗る佛教熾盛の地たりき、然れとも今は其隻影たに拜するに由なし、玄奘の頃は脇尊者の室已に傾頽するも尙ほ旌表を立てり、又た同尊者の室の東に故房あり、世親菩薩此に在て阿毘達磨倶舍論を製せりと云へば、蓋し淨土の一論も此に於て製作せられしものならん歟、菩薩の室の南に如意輪師の室あり、論師此に於て毗婆沙論を製せりと云ふ、此の如く古記に依て此地靈蹟の事由を記すれば枚擧に遑あらず處として佛蹟ならざるなきの聖地なりき、然に彼のガスニー國マームッド王の暴虐なる破壞に遭ひ、三千年の靈蹟は、一朝にして塵土に委せらるゝに至りたり。

法主は此地に一週日間滯在せられて靈蹟探査に非常に力を盡されたり、前記の如く此地は眞宗に深き關係ある世親菩薩の降誕地にして、而かも其造論の地なれば法主は別して意を用ひて探究せられたり、而して探査の結果今は其の卒堵婆の見るへきなきも、靈蹟零落の跡は到處に之を見る、固り卒堵婆、佛像として指すべきものはあらざるも、碎摧せる瓦石の小片堆積して其の古代壇場の跡たるを證せり、此地に凡そ一千五百坪の地盤にして平地より三十尺程高き地を發見し確かに其零落の一たるを知れり。

法主は夫れより更に進て「ユスフッサイ」を取調べん爲に進て「マルダン」に至り同地を根據として「タクチバイ」「ジャマルガリ」「ジャバッガリ」地方の搜査に從はる、此地には遺跡の現存せるもの往々あり、現に山腹に累々として瓦石の今尙ほ積んで殿堂の一隅を爲せるものを見る、其壯麗と廣大とを想見せしむ、ジャバッガリの山腹に無憂王敕令の碑あり、高さ約十二尺、橫八十尺の大石にして前面に彫刻の文字あり一行は之を寫取れり、「タクチバイ」より進て「スワット」に至る、此地は玄奘の云ふ烏仗那國にして近年英領と爲りしものなり、此地には未發見の遺跡多し、然れども新領土のことゝて危險云ふべからず、政廳容易に探險を許さず、幸に一行は官の保護厚くして特別警護の下に探査に從ひたるも猶ほ盡さゞる所あり、法主は一行中の薗田宗惠氏をして此地方及びシンド河一帶の地、バ

ンジャブ、アグラ及アウダ聯合州、リワ侯國、バンダ縣、マニツプール縣、等の調査に從事せしめらる、此地の探査を終りて法主は「ベナレス」に南進せらる、此地鹿野苑の聖地あり、塔の高さ一百二十尺、塔腹微麗の彫刻を施せり、同苑の事は人口に膾炙す、今改めて記せず、此地方の調査を終りて進て伽耶に至らる、此地は如來成道の聖地にして人の多く知る所なり、法主は前年此地に詣せられしも今回は二週間滯錫して此地附近の調査に從ひ、頗る精密なる探究を遂げられたり。

●迦耶及び王舍城

伽耶附近及王舍城附近には佛教の靈地頗る多し今序を逐て左に記せん。

前正覺山は尼連禪那河を渡り來せる所に在り、王舍城より西南に山脈の起伏して二列を爲して走れるあり、此山は則ち此山脈の西南端に屬せり、釋尊將に正覺を成ぜんとして先つ此山に登り給ふ、故に前正覺山と云ふ（玄奘は鉢羅笈菩提山と云ふ）一行は此山を探査して山頂山下に及ふ、時に西南の山腹に大石室を發見せり、五間に八間の天然石窟なり、一行石窟を窺ひたるに思ひきや室の奥に濕氣に濕潤せるの痕あるを認む、恰も佛像を印せるが如し、玄奘は記して曰く「菩薩淨居天の勸告に依り石室を去んとするや龍あり謂て曰く斯室清勝なり以て聖を證すべし唯願くは慈悲を以て遺棄し給ふ勿れと菩薩既に證を得る所にあらずと知て龍の意を遂げんが爲影を留めて去り給ふ影は昔日は賢愚共に見る今時は或は見ることを得る者あり云々」一行が室内に佛像の如く認めて拜したるが如き此記事を追想して最と有難し、此山今猶ほ五六の窣堵婆を見る、是れ無憂王が曾て菩薩登山上下の跡に建てしものゝ遺れるならん。

釋尊成道の地所謂金剛座の地は前正覺山の西南尼連禪那河を渡りし地にあり、玄奘の記によれば

前正覺山の西南十四五里を行て菩薩樹あり垣を周らし塼を疊て崇山峻固たり東西は長く南北は狹し、周り五百歩奇樹名華陰を連れ影を接し細沙異草彌漫して被らしむ正門東に開て尼連禪那河に對し南門は大華池に接す西阨く險固北門は通れり大伽藍垣内の地聖蹟相隣し或は窣堵波或は精舍あり君王大臣豪族遺教を欽承し建て以て記とすと

あれば昔時の盛思ふべし古記に依れば釋尊時代の菩提樹は惡王の爲に屢々剪伐せられたるも隨て伐れば隨て忽ち生ず、玄奘のときの樹は高さ二丈餘ありと記せり、今時の樹は高さ約二十尺ならんと覺ふ、此地に於ける現時の尖塔其他は世間既に知れり今は省く。

鷄足山も亦た前正覺山と同く伽耶と王舍城との中間に在り、窶盧播陀山と云ふ、麻訶迦葉尊者入定の聖地なり、佛の懸記に依れば當來彌勒佛出世の時迦葉更に定中より起て彌勒に法衣を授くとあり、此山高嶺峭峻山上に窣堵婆あるを望見す、山下に佛寺の遺跡あり、佛像をも拜せり山の高さ一千尺許、一行探査三日にして鷄足山たることを知れり。

王舍舊城北門外に竹林精舍の舊跡あり、釋尊在世の日伽闌陀長者の建る所、釋尊多く此に於て說法し給ふ、玄奘の時僅に遺餘を存したるも今は所在を知るたにも難く探査の末漸く其地を發見せり、今は唯た精舍の故趾を見のみなり。

竹林精舍の西南王舍舊城外南山の北に上座部結集の地を發見せり、我正依經を始めとし、一代の典經結集の地なれは一行は數日力を盡して探査し、居民を募りて搜索に從はしめ、漸くにして其地を得たり、然れども是亦僅に廢趾を認めたるに過ぎさるなり、而して大衆部集結の地も發見したり、王舍新城の北に那闌陀寺の舊跡あるべき筈なり一行は隨行藤井文學士に其調査を托したり。

王舍城は玄奘の記に「曷羅闍姞利」と云ふ、譯して王舍城と云ふ此地をラジヤキールと云ふ「ラジヤは」王を意味し「キール」は住所を意味す即ち王舍の義なり、都城東西約一里南北約二十町繞らすに土壘を以てす、田園原野の中蜒蜿長蛇の形を爲して繞れり昔時は殷盛なる城市なりしも今は人戶僅に約五百あるのみ、此の城趾は王舍新城なり、此の城趾に隣接して南方に王舍舊城あり、此は四方に連亘せる山脈を以て包まれたる天然の城山の裡に在りて、東西約一里南北二十町僅に北方より通ずるの路あり、四方の山上には石にて築ける城壁ありて堅固に守備に供せり、此山上の城壁は一行の發見する所にして城壁に副ふて進めは山上處々に佛寺の廢趾と思ほしきもの往々あり、又た城樓の廢趾と思ほしきものも見受けたり、城內昔時は繁華を極めたるも今は人家の隻影だになし、一行は北門より進て城內中央に天幕を張り此處に根據を定めて日々探査に從事せり、一望荊棘を以て滿たし且つ虎狼の害有り、探査甚だ艱難なり、一行は數百人の土人人足を督して日々荊棘を排して探りけるに西部の山麓に接して宮城の廢趾と思はるものを發見せり、所々に樓臺の跡又は宮門の跡らしきものを見る、蓋し三千年前の王宮廢して今は之を架ける王の名も滅するに至れり。

靈鷲山の舊趾は一行の最も探査に苦みしところ、百方苦心の末やふやく此を確めたり、王舍舊城の東北北山の南半腹に突出せる山角あり是れ釋尊說法五十年の靈地たる靈鷲山なり、玄奘は姞栗陀羅矩吒山と云ふ耆闍崛山是なり、唐には鷲峯又た鷲臺と云ふ大鑑に依れは耆闍は鷲崛は頭に名く山頂鷲頭に似るが故なりと、又鷲鳥を棲ましめ山頂高臺に類すとは玄奘の記する所なり、山形を撿するに果して玄奘の記の如し、釋尊の在世に頻婆娑羅王佛所に昇降するの石道を作れり玄奘の記に依れは山麓より峯岑に至る迄谷を跨り嵓を凌ぎ石を編て階と爲し廣さ十餘歩、長サ五六里二の小窣堵婆あり、一を下乘と云ひ一を退凡と云ふ、下乘の地より王徒歩して上り、退凡の地より凡夫を簡んで往かしめすと、而して探査の末此石道は昔時の儘現存して山頂に通せるを知れり、山頂は東西長く南北狹し、是れ往昔釋尊說法の靈地なり、佛滅後は此の處に精舍ありて說法の佛像を奉安せしも、今は其の片影をも留めず、唯た此處彼處點々石片破磚の散在せるもの古代遺物の斷片にや今昔の感に堪へさりき。

此釋尊說法の故趾は山頂の西端に在り、此地の南に遠からすして崕側に大石室あり、釋尊入定の所と云へるもの是れなり。

此石室は前徑約八尺奥行約二間の岩窟なり、今現に存せり、又玄奘のとき窣堵婆ありしと云ふ、南の崕下は法華說法の遺跡にして今其故趾の徵すへきものあり、又前記大石室の西北に石室あり前に大盤石あり、阿難魔の爲に怖れし所とは此れなるべし、玄奘が舍利子石室前の一大井枯渇して水なし墟址猶在りと記せるもの說法故趾の北石澗の邊に見る又大盤石あり、如來袈裟を曬み給ひし所と云へるの大石も發見せり、此等の遺跡探査の結果發見する所多ほかりき。

玄奘の記に「山城北門の西に毘布羅山あり山の西南崖の北に五百の溫泉あり今は數十のみ」とあり、而して今日と雖も山麓に十四ヶ所の浴槽を見る。此の如く法主は日々隨員を督して探査を進行し未發見の故趾を發見せるもの多ほし、然れども今一々記するに遑あらず。

繼續調查の分擔

法主は將に此の探査を終り去てカルカッタ市に着せるときに際し前法主遷化の急電に接せらる此に於て法主は隨員を留めて調查を進行せしめ旅裝を調へて歸程に上られたり。

隨員諸氏繼續調查の分擔は左の如し

藤井學士ボンベープレシデンシー、マドラス、ハイデラバッド、セントラルプロビンセス、ヲリッサ薗田學士外擔は既に記せり（藤井薗田二氏は猶緬甸と錫蘭との調査を任す）

島地大等氏チャンハラン縣の北クシナガールの遺趾

井上弘圓氏ゴラッブプール縣及ヒパーライチ縣の北ニポール領

薗田氏分擔の「マニプール」地方には玄弉の憍賞彌國（世親無著造論の地）の位置に就き井上氏分擔の地方には玄弉の室羅伐悉底國（舍衞國）の位置に就き西洋人の說と比較研究を要すへきものあり

渡邊哲乘氏四川甘肅江蘇

吉見圓藏前田德水二氏四川、湖北、河南、安徽、

野村禮讓茂野純一氏雲南、貴州、湖南、江西、浙江

本多惠隆氏ジャバ、スマトラ、シャム、カンボチャ安南

此の探險一行の調査完結は本年九月三十日を期とす、故に今は調査半途に屬し、精細に報道するの材料全からず、一行の得たる諸種の資材を蒐め、研究論定したる後にあらずんば之を人に示すに由なし、今は唯だ其調査の行程分擔の區域を示すに過ぎざるなり。

社會時觀

博覽會雜記

鶴浦

▲第五回內國勸業博覽會は、日本の博覽會にあらず、大阪の博覽會なり、否、協贊會の博覽會なり。

▲協贊會會員の相場、名譽會員千圓、特別會員百圓、贊成會員五拾圓、正會員三圓。

▲大阪紳士のプライドは、協贊會の紀章と藝妓なり。一は幾ら金を出したるかゞ見えて藝妓にひけらかさるゝ故、一はこんな馴染があるぞといふ事を知人に見せつけらるゝ故、而して、是は色と慾とを代表す。

▲藝妓踊は、紀章を賣りつけたる金にて催さるゝ協贊會の餘興なり。金が集つて直ぐ藝妓に思ひ至る所、流石に大阪紳士の設立せる會たるに背かず。

▲文明の機關たる新聞紙の場内配達は許さずして、社會の賤業婦たる藝妓は特に招聘し、是がために家を建て衣を調へ夜間を選んで演舞せしむ。是れ今回博覽會の最も著るしき特色なり。

▲夜間開場あり、藝妓あり、此に於て、演舞場の近傍

には待合風の茶屋二軒まであり。
▲正門の前に一万二千圓の銅器あるは、博覽會の内部が銅臭紛々たるを示すものなり。
▲博覽會の建物は長方形にして、紙幣を引延ばしたる形なり。
▲第百三拾四銀行頭取松本重太郎氏は、大阪人中にも最も大なる人なり。是は式場の屋根よりも高く、胴は大林高塔の塔身と等しく、頭は望遠樓の最上層に達せり。香具師が是に目を着けざるは不思議にあらずや。
▲上方贅六曰く、松本重太郎氏の廣告を無禮なりといふはカ子を持たぬ者の言ひ草なりと。
▲大阪人は、松本重太郎氏の廣告を以て、最も誇るべきものと思へり。即ち此くの如く人を馬鹿にしたる不作法千万の廣告をなしても、大阪人は利き目あるものと思へるなり。
▲新聞記者が、大林高塔を不敬なりと罵り、農商務省が是を許可したるを責むるは、大林高塔が博覽會建築請負師のものたるを忘れたるなり。
▲各府縣事務員と出品人、是れ、現今大阪の青樓に最も多く出入するお連れ樣なり。
▲博覽會事務官會計課長松田四郎氏、は收賄の嫌疑にて拘引せられ、同事務官出品審査課長織田一氏は、新に大阪市へ邸宅を築く。コントラストの甚しきこと、教育館に三味線を陳列したるが如し。
▲博覽會屋、新聞屋、是れ大阪人の審査官と新聞記者とに對する最上の敬語なり。

▲人さまぐ

楊柳觀音

▼櫻の花一ぴら二ぴら、風なくして地に落ち散る時、ゴーンと聞ゆる鐘の音は東洋最大音樂であると或人が言つた。
▼「實業の日本」などいふ實業雜誌は普通學生が買つて讀む、所謂店員、小僧などいふものは「中學世界」や「青年界」を好んで讀むといふ奇ッ怪な世界になつて來た。
▼男學生で「女學世界」を讀む者少なからず、又女名前で文章を投書する者もある。
▼伊藤銀月氏の「最新東京繁昌記」を讀んで初めて花見の趣味を稍々了解し得た樣な氣がするから、水道の水を呑んで以來滿五年、吾妻橋を渡つた事なく未だ向島の花を知らないから、今年は大に彌治るつもりである。
▼洋樂の趣味を解するものは恐らくは音樂學校の卒業生以外にこれあるまい。某日某所に於てピアノ、ヴァイオリン連彈て長唄の勸進帳を聞いた。洋音初めて我耳に入る。かゝる方便も今の世に必要てはあるまいか。餘り俗耳を輕蔑してもらいたくないのである。
▲外國渡來の宣教師連は必ず音樂詩歌若くは綺靡の餘樂を持つて居る、

我國の宗教家も、骨董や園藝の外に少し眞似てもらいたい。

▼年中田舍に燻つて居るのも面白ないから、一年に一度づゝ東京の友人の所を食ひ廻つて飽きたら國へ歸るといふのは、稍々趣味と實益を兼ねたる趣向だと畏友安直君がいつた。

▼花より團子といひ、「酒なくて何の」といひ、何ぞ夫れ日本人は意地ぎたなきや。上戸も下戸も何物かを胃の腑に滿たされば花見にならないのである。見よ、彼の大道にゴザ打敷いて塵埃にまみれた物を喰つて陽氣になつて居るのは本氣の沙汰としも思はれない。然し吾人は唯ッタ子ンと後ろに手を廻はして反身になつて風流がつて居よとも言はない。飲み食ひ以外に花見の趣向は無いとも限らないから、原案として先づ市民の自由運動會はいかゞなものか、花吹雪の下でフートレース、自轉車競走、提灯競走、高飛び巾飛び、二人三脚、綱引、何でも面白い。見るは法樂錢いらずで、演技者は飛入勝手次第、其代り何がしか會費を出す、勿論懸賞は在るといふ事にして、胃腑問題は歸宅の途中迄委員附托にしてもらいたい、新聞社が發起すれば直ちに成功する。之をしも中止せよといふやうな警視廳は櫻花國政府にない筈である。

▼明治の年も既に三十有六、明治ッ子も既に室家なかるべからず、清新なる明治式の家庭が建設せらるゝ日は近いた。堺枯川氏が『家庭の新風味』以來此種の刊行物が非常に歡迎せらるゝ樣である。近頃妻君が白い前垂を掛けて、お手前覺束なくとも「妻が獨學の西洋料理ですが」と主人の白慢顏、左程癪にもさはらず、老人も園遊會から歸つて遠慮が無くつて頁いと言ひ、娘に香水を買つて來て遣る。大勢は大方定まつたから、新家庭の世は眼前に來て居るのである。

▼明治式の新家庭を鼓吹すべく咋今二種の家庭雜誌が生れた一は内外出版協會より、一は堺枯川氏の手より。



雜評

七十五日

昆谷生

◎鑛毒問題も全く下火になッて誰も口にしない、其後釜へ種々異なッた事件が現はれたが、先づ一番の人氣ものは黒死病、續いて教科書收賄の大疑獄、農商務省の賊吏拘引などである。

◎議會の解散及び總選擧も一騒ぎ遣ッたが、是は二年若くは三年に一度位必ず有るもので、別段珍らしくないから、左程の問題にあらずサ、併し横濱で加藤奥田對島田の競爭、東京の眞中から赤天狗が得票大多數で飛出したなぞは、一寸面白い。

◎殊に加藤が落選しながら、お供候補の奥田の辭退し

た後へ、ノメ〳〵出たのは誰も案外に思ふ處だが、其際彌次馬連には種々の下馬評があッた、其一は板垣伯が去年の一件て、大さう加藤を怨んで居るから、今回島田と結び合せて、一團隊搆へたら可からうと云ふ相談であッた、尤も加藤の落選に就て、板垣の處へ舞ひ込んだ賀狀は、頗る多數であッたとは、可笑しいではないか。

◎新選代議士の姓名を一覽すると、中々興味がある、大阪の三太郎と云ふのが、鮎岡德太郎、尾形兵太郎、東尾平太郎、兵庫の九郎と云ふのが、町田猛郎、草鹿甲子太郎、安藤新太郎、大西善太郎、西村眞太郎、森本莊三郎、平岡萬次郎、川口木七郎、奥野小四郎、其他新潟の七郎、德島の五郎等能く見たらまだ此類が澤山あるだらう。

◎廣島からは、和田彥次郎、麥田宰三郎、森田卓爾、小田貫一、小田亮と、田の字の付いた男が、五人揃ッて出るとは、如何にもゴタ〳〵して居る、

◎今の日本は何事も、新舊の衝突と混淆で、一致と云ふ事が保たれないが、新代議士の姓名を見ても、大河内輝剛、日向輝武、大久保忠均、榊原經武、北畠具雄、菊池武德、室原重富、三浦盛德、田村惟昌、山本盛信、池田惟貞などゝ、金ピカの系圖を持參し、桓武天皇五代の後胤と、勿體を附けさうなのがあるかと思へば、權兵衛、太郎兵衛、熊入流もあるし、左衛門、右衛門と小紋の羽織を着て、自身番に控へて居るやうなのもある、是では何事も整理は附くまい。

◎教科書事件で罪になるのは當然だと、或る漢學者が云ッた、どうしてと聞けば、科は罪科の科でトガと云ふ字だ、教科書は即ちトガを教へる書だから、此節の學校教育は頗る危險だ、況して先生が實踐躬行で、賄賂を取ッて監獄へ這入ッて見せるから、將來生徒が陸續こんな風になると、心細い話ではないか。

◎教科書事件で捕へられた被告の豫審決定書に就て、收賄金額を精算すれば、平均一人七百何十圓、百五十人としても總額十一二萬圓だ、タッタ是丈の資本で、日本全國の大騷ぎ、官吏及び教員の腐敗墮落を證明して、今後の警戒を促がし、風紀教育の一面に大々的刺激劑を與へた、其效果は將來必ず現はれて來るに相違ない、して見れば書肆は十一萬圓の私費を擲つて。此方面の試金石に供したので、實に殊勝な心懸け、若し此事なくんばヨモヤ今日の教育界が、斯程まで腐敗して居るとは氣付かなからう、我々は書肆に對して頌德

表を呈すべきである。

◎國光社の前社長西澤之助と云ふ先生は、天神様の申し子見たいに、有難い事ばかり云ッて、忠君愛國の一手專賣を遣ッて居たが、金尾稜巖もそれを買ひ被ッた一人で、今度のやうな情けない目に遇はされた、金尾は敎科書審査の時、他の學課は兎も角、修身書だけは、國光社の忠君愛國主義で無ければ可けぬと、視學官や敎員に說き聞かせたと自分で申立た位だから、餘程國光社には惚れ込んだものと見える、併し今度のやうな奇禍を背負ひ込むから、忠君愛國も中々剣呑で近寄れない。

◎宗像はどうか斯うか云ひ抜けて、無罪の宣告を受けたが、何處かエライ處がある、流石は檀ノ浦將軍だ、次は柏田天驎だが、此奴も巧く遣つて吳れゝば好いが、怪しいものだ。

◎檀の浦將軍、背水將軍、蟹甲將軍、これを明治の三將軍と云つてもよかろう、背水將軍は此頃戰爭引受會社と云ふものを拵へて萬國の依頼に應じたらば頗る便利であらうと云つて居る、ところが、背水將軍が例のマニラ二件の手傷の流義で、戰爭を引受けたら隨分面白い結果になるのであらう。

文壇昔譚

舌切雀

前號に引つゞいて、花咲爺がお話をいたす筈の處、爺は山へ薪採り：：ではない、上方へ命の洗濯に參つて居るによつて、ふつゝかながら此雀めが名代を仕る。固より舌を切られた片輪の身の上の事であれば、お話のついでに何ういふ所へ嘴がはれるかも知らない、その時なれの古疵を發き居つたなどゝいつて、怒らないことにしましうれ、ホイ、これは小波をぢさんの聲色になつた。

▲廣津柳浪、またの名、柳なみ子と申す先生は、當今第一の流行つ兒、何處やらでは杖の用心、下り阪はあぶない〳〵と、切りと氣を揉まるゝが、當人は一向、そんな事に頓着なしの得意滿面、ほくそ笑みとは是よりぞ始まりける、とさ、馬琴の小說なら有りさうな勢ひであるが、先生、未だ今日の名をなされない前、讀賣新聞へ入社の時に面白い、イヤ、相手にとつては面赤い話がある。月給何圓、何時幾日より入社に極つて、扨いよ〳〵社員にならう、なさうといふ前の日、當世の酒顛童子、八文字舍のむら竹、その頃編輯局の一隅に猩々黨の旗頭を承つて居たが、柳なみ子入社と聞くより、ハッタと睨めつけ、落語家なら、やれ、この社

は掘いて居る、と、いふべき處を、ゲーブ、博文館のやうな所へ居つたものを、ゲーブ、社へゲーブ……(竹のや曰く、ヤイ〳〵、何だつて俺の顔に飛ばつちりを懸けるのだ)

▲此柳浪先生が、今から二昔ばかり前、博文館から「大和錦」といふ小説雜誌を出したことがある。その時、幽芳女史といふ名前で『未開紅』といふ小説を載せた……と、いふと、ヤツ、それは妾の好いな菊池さんだわ、と早合點をされる方があるかも知れぬが、イヤ大違ひ、菊池先生は男子で、これは女史であるから、固より同人であるべき、筈がない、が、しかし、文章の傾向がどふも……(醫者曰く、これ〳〵綫生男子といふものは醫學上許容されないものだぞ)

▲一心命の助、一切現の助、前のは西鶴に凝り固まつて一心命の助、そこで後のが今の胃癌で一切現の助とは何ふてしよう。(弟子曰く、早くお治り下さらねば文壇は唖になります)

前號に豫告の **新聞評壇** は次號より掲載す



讀者之文壇

隨時錄

本所 杏村生

●廢物利用といふも、廢物遂に廢物におはりて、何等の用をなさゞるものあり。陶器の如きは即ち其一にして、一窯の入費數百金、燒上ぐる時に於て、或は色變りを出し、或は毀損を生ぜんか、其物は到底需ぐべからざるを以て、悉く之を棄てざるを得ず。然も多くは其棄て場所なきに苦み、殊更に井戸を穿ちて之に埋む。井戸を堀ること愈よ多きは、損失の倍々大なるを表はす所以にして、陶器の業を營むほど、世に面白きもの無き代りに、末に至りて一物を剩すなきは、之に上越す業あらざるべし。

●陶器の類は、肥前より出るものを最も堅硬なりとし、京都より出るものを最も美麗なりとす。是れ其地質によるが故にして、原料の如何には關せず。曾て籾山東洲氏に聞く。氏壯年の頃京都に遊び、染物の地上に張られたるを見き。謂へらく、泥に塗れて生地を損せざるやと。後年三井呉服店に入るに及んで、染物の工場を東京に設けんと欲し、機械より職工に至るまで、悉く之を京都より移し、更に鴨河の水を引きて、幾たびか京都風の染付を試みたるが、遂に意の如くなるものなし。玆に於て始めて曩日を追想し、其土地の如何によつて、品物の上りを異にすることを悟り、徒に末に奔りて勞するの益なきを思ひ、再びその愚を學ぶなくして止みぬと。物は同じからざれども、理は一なるべし。

●去る閑人の數へたるところによれば、陶器も磁器も、土より品物となりて現るゝまでには、六十三回の手數を要すといへり。其概畧を云はんに、最初山より土を堀出すや、先づ之を粉碎して俵に詰め、而して運送屋に托す。其これを受取りたるものは、一旦乾かして後こなして水漉にかけ、更にそれを鉢に盛りて、淀むを待ち、再び乾上げて粉末となし、夫れより二三種の土を混合して練り、或は轆轤にかけ、或は手づくねにして、種々なる形を造り、水乾きするや仕上をなし、全く乾くに及んではじめて窯に入れて素燒をなす。素燒成らば書畫等を施し、上に種々の藥品を塗りて、更に本燒の窯に入れ、玆に漸く品物の出來する順序なれば、土の陶器となるまでには、其間少くも一年の日子を要すべし。

●天狗とヒーローとは、輸出と輸入とを以て、全然相反對せるもの、岩谷が本所の煙草工場の、不便なるによりて賣物となるや、村井は直ちに之を買受けて揚言して曰く、敵城一ヶ所を陷れたりと。

●銀座通りに名高きは、天狗よりも、大時計よりも、敷くに煉瓦を以てしたるにあり。併しながら、此煉瓦通りほど、凸凹にして歩き惡きところもなし。

●時計の名は、外神田御成道附近の通稱なるが如くにして、實は京橋に多し。先づ中橋のを始として、吉沼あり、京屋あり、服部あり、小林あり、何れも大なる時計臺を建つるを以て、大時計の稱あり。若し夫れ博品館の大時計の如きも、其數に加ふべくんば、京橋は實に大時計の本場にして、其名の顯はれざるものなり。

●辨慶が山伏姿を形どり、其手にせる寳物の裏に、煙

草の名を記したるペンキ塗の廣告看板あり。全躰勸進帳と稱する卷物は、富樫の眼を晦ますべく、決して見することなきを旨とせるものなるに、然も其裏面に廣告の文字を現すが如きは、圖案者の思慮なきこと憐れむに堪へたり。

●近火を見舞ふものゝ述ぶるところを聞くに、地方に於ては、嘸お驚きなさいましたらうとの意味を以てし、東京に於ては、何うもお騷々しいことでしたと云ふ。然り見舞ふものゝ挨拶の如く、地方にありては火事に驚くなれども、東京にありては、寧ろ騷々しき位の感じに過ぎざるなり。

●上野山下に大勉強天井と認めたる看牌を出せる飲食店あり。之に隣れる家も、同業を營むを以て、客を彼方にのみ引寄せられんかと氣遣ひながら、勉强の到底隣家に及ぶべからざるを思ひ、新に看牌を出して曰く、中勉強天井と。

◉同じく山下に惠比須屋と呼べる旅舍あり。堀井の水、質甚だ宜く、寫眞の仕上をなすに最も適するを以て、其業を營むもの、日ごとに來りて多く汲取らんと爭ふこ然も所有主は、人の競ふて我が井の水を汲むは、何故なるやをも知らざるなり。

◉牛島神社の氏子は、其幼兒に涎掛を着けさせずして、油屋と稱する、稍類似せるものを纏はしむ。是れ涎掛は、鎭守の用ゐ玉ふところなれば、敬信の意を表するため、殊更に之を忌むなりと。東京に斯る御幣かつぎをなすもの、未だ頗る多し。

●身躰に異常を來したる場合は別問題なり。季節によつて飲食物の味を殊にすること、多大なるものあり。今一例として上戶の說を聞くに、一年の中に於て、酒の最も甘く味はるゝは、雪の日を第一とし、菊紅葉を第二とし、次を梅薫る頃とす。而して櫻咲くに至りては漸く其味を減じ、牡丹花菖蒲の盛なる頃は、却つて甚だ不甘さを加へ、多く嗜む者と雖も、能く雪の日に於ける量の、半をも過すことなしと。

●麥酒を吞むに、細長きコップを以てすれば、其味一層佳なるが如くなるも、若し太くして短きものを用ふれば、却つて甘からざるの感あり。又日本酒を吞むに底深き杯よりは、扁たくして淺きものを用ゆる方、舌ざはりよく味あるが如くに覺ふ。此間の事、上戶にあらざれば、共に語るべからずして、また到底解し得べきにあらず。

●端然と構へたるものを、雛のやうだと云ひ、口前の

みの勇しさを、鯉の吹流しに喩ふ。如何さま雛は女の節句にして、端然としたるを表し、鯉は男の節句にして、膓はなくとも鼻息の強さを現はす。

嘲罵百言

天保老人投

●世に嚊天下なるものあり女が野郎を尻に敷くとなり或人曰く女の尻は凡て大なり故にやゝもすれば亭主を尻に敷かんとす敷くが惡しきに非ずして敷かれるが惡きなりと而して我は思へらく女の尻が大なるに非ずして野郎の膽が小なるのみと。

●總じて家附きの女はヅウ〳〵し是れ女子が小人たる所以。

●蛙鳴蟬騷とは漢學先生に習ひたる語なり而して井戸端女湯に好實例を見る。

●嫉妬の炎胸に燃ゆる時は眠くもなければ腹も減らず自分でも眼尻が釣り上がつた樣な心持がするとこれは或る女の實驗談なり。

●亭主女郎買ひより歸る妻君ブン〳〵然たり亭主乃ち妻君に云つて曰く「ナニをそんなにツン〳〵するだと」妻君乙空に更に聞き直して答へて曰く「妾しやアどうもしてはゐませんが貴郎が怒つてゐるのでしよう」と亭主笑ひを噛み締めて曰く「おれは昨夜遊んで來たんだから嫉妬は善いわい」と是に於てか流石の妻君グーの音も出來ず。

●男と女とを比較する時は何れが多情に生れたりや女子は曰ふ男子ほど多情なるはなしと男子は曰ふ危險なるは女子なりと我思へらく男女相イクォールす唯女子の恐ろしとする所は嫁に行けざるなり逐ひ出されるなり。

●綠の黑髮フッと切るは至極エラさうなれど今日では私には隱し男がありますの目標となれり。

●試に或る女子に如何なる良人を持つべきやを問ふ笑ッて答へず、我乃ち箇條書を示して曰く金の有る者を持つべきや、爵位勳等肩書丈けは立派な人を持つべきや、將た親切で優しい人にすべきやと、其女曰く肩書も立派で御金もタント有ッてそして優しい親切な人がいゝと。

●或女曰く妾は海軍の軍人を夫にせんと、我乃ち諭して曰く海軍の如きは多く遠洋に航して家に在る事少なし、家庭的娛樂を缺く點に於て臍を嚙むの悔いあらうと、其女曰く「家に多く居ない方が善いわ」

と我には何のとやら分らず。

●所謂御孃さん的の女を妻に持つ程不幸なる事はなし妻はよろしく酸いも甘いも嚙み分けた藝者上りなど選むべし。

●何でも知つた風をする女程小面憎きはなし、これ等は如何程運動するも我が妻の候補者中には加へず、されども最初より候補者に立たざるは勝手次第なり。

●女はイクラ分つた樣でも分らぬものなり、或人曰く然らず分つてゐても態とダヾをコネるなり、小供の恐しくも無きに泣くが如しと。

●我に親しき友どちありけり、如何に樂しきものなるべきかを豫想して妻を求めけり瑟琴和せずして夫婦別れをなすに至りけり、乃ち歎じて曰く妻とは唯肉躰上の慾を充たす器械なりけると。

●女が三人寄れば必ず一人は省き者になる、不思議なる現象といふべし。

●女子の智惠は霜月師走の垣壞ちと云ふこと催馬樂に見えたり淺墓にして見え透きたるを云ふなるべし。

●某女曰く男に嫉妬無きよほど女のツマラぬ事は無しと考へて見れば幾分の眞理もあり。

●遠くして近きは男女の中と云ふとあり近くして遠くする新發明も出來さうなものなり。

●女は絮なり輕ッぽきものなり、又助なり、多情を意味す。コイツは可笑しい理屈だ。

●婦は鉄なりこひの爲めに身を捨つ、又扶なり扶けられざれば世が送れぬなり。フーンどれも聞えぬ。

●或人のよめるうた

世の中に絶えて女の無かりせば
男心はのどけからまし

短文

我國の教育者に就て

▲教育家とはどんなものだろうかと金冠堂、臭穢居堂、腐朽舍など驅けずり廻て漸く資本大事傳と云ふ兒書を探し出して見るとこんな事が書いてある教音氣迋、狂也即ち狂ふなり梟也蓋し其慾梟鴟の如きを云ふ、又强也顏の皮强く厚きを云ふ育は音獄苦、獄也即ち賣り物なり金に買はれるなり又往くに通ず能く監獄署へ往くなり家は音ト、蝦科化臥瓦邪意皆通ず即ち下等にして至極下卑たるを云ふ、蝦は賤々しきを科は科人化は金冠堂などの番盜に變げるなり、臥とは賄賂を取りて寢て暮すを謂るなり、瓦は瓦礫の意、以上にて明かなるべし云々　（楽　望　生）

▲敢て問ふ落語家講談師の寄席に與ふる感化と博士學士校長敎授の敎室に與ふる感化と、いづれか大なるやいづれか深きと　（ち、か）

▲今の教育家なるものは大略左の五種である

（一）先醫先能にして變通の術を知らず胸中徒らに書を貯ふること多くして應用の活才なきもの丶受賣練習と心得て教育者たるもの

(二)　師範學校其他の村學究先生等が教員より他に仕方なきもの

(三)　大學其他各種の專門學校卒業生にして一時の凌ぎをつける爲めに教育者たるもの

(四)　初めは一寸腰掛けの積りで教員となつて見たが案外心配がなくて亦一寸風變ばりの趣味もあるので辭職の機を失なひつい惰力で教育家になり濟ましたもの

(五)　眞正に將來の繼承者を養成し國民道德の基礎を確立せんため獻身的熱誠を沾びて教育者たるもの

右五種の中第五は千中辛ふじて一を求め得る位で、第二は地方の中學校や小學校に充ち〳〵て、第一第三は大學や其他の專門學校の講堂に倚羅星の如く列なり、第四は其處此處の各學校に散在して居る。（鬼　面　生）

▲僞物くわせもの名實相應せざるもの〻多きこと教育家の如きはあらず

教科書事件に大恐惶を起す　恐育家なり
事件の關聯を氣病んで入水す　狂育家なり
待合青樓に賄賂を受く　嬌育家なり
偏狹なる忠君呼ばりをなす　狹育家なり
頻りに新男爵風を吹かす　驕育家なり
學校の特典を强迫して取り上ぐ　强育家なり
人を誤り國を誤る國家の元凶　凶育家なり

（波　嶺）

▲我國の教育家といふ題ではあるが。我國には教育家といふべきものはどうしたことか一人も居らぬ。ドウヤラコウヤラ教育家らしかつた位の處なら。先づ死んだ福澤位が其部類には入るであらふ。其外はいづれもさまどんぐりの長比べで。コンマ以下じや。即ち教育家たる名を付けることの出來ぬ手合ばかり早稻田の老人などはほんの教育家の面だけを被ぶつて居るのみドやどんぐり連の中間にもいれぬのじや。

さて今の謂ゆる教育家即ち我輩がいふどんぐり先生たちは。唯其仕事が教育に渡つた事であるといふのみで。外にうまい仕事があれば直ぐと職掌がへをするのじや。即ち職人。いや職人は仕事相當の報酬を受けるが。此連中は報酬相當の仕事をもせぬのじやから職人以下じや。見給へ職人でも一寸行けぬ獄屋の中にどし〳〵とは入つて行くじやないかアハ………ソコデ僕の立ち場じやが。若し日本に直にコンマ以上之れは我國の教育家でござるといつて耻かしくない程のものが居るなら少し位は評もし又注意もしてやるとがあらふが今いつた通りの有樣で別に書くことがないて、それとも眞の教育家はどんなものであるかといふことがきゝたいのなら又更めて教へてあげる

○ひげをはやした先生さへも御かれてころぶ世の中じやもの藝者のころぶも無理はないハ………

（仙臺　空水）

▲我國初等の教育家は措て置いて、中以上の教育家といふものは殊に大家なるものに眞の教育家として世表に立つべき者は殆どあるまいと思ふ。我國の教育家は大方皆仕事師である、一々の教員大家に就いて調べて見るに皆な教導感化の大神力を有するものにあらずして、何か事業を目論んで團隊を造つてワイ〳〵いつて居る、ヒユース孃が日本に來て「日本には眞の教育家を

見ない」といつたさうだ、又帝國教育會で演説をした時に「日本には辻新次氏といふ教育家が在るから」と冷やかし氣味にいつたそうだ、事の眞僞は知らないが辻氏は苦笑して居たげな。　（神田　猥々子）

▲基督教界に於ける名士は多く教育家である、佛教界の名士は政治家である。　（▲▲　△△）

▲故福澤翁は明治の大教育家であつた。之れを貝原益軒に比較して、今の二大家を研究して見たいと思ふ　（仝）

▲學校の裁縫の先生はしどくつてよ、私なんか先生の御病氣の時に卵の折を持つて御見舞に行かなかつたものだから、何んだか此項は繼ッ子見た樣にして私のお仕事を見てくださらないんですもの、富田さんなんかお母樣と二人でお見舞にもいらしたし、御全快なすつたつて、又家へ招んでお祝ひして上げたものだから、此頃は富田さんは出來がいゝなんて私もーくやしくて〳〵　（一女學生）

▲東京の私立小學校の校長は必ず皆「大先生」と呼ばれて居る、　（小　先　生）

▲講義の切り賣りをする人、賄賂をとる人鼻垂れ小僧の守りをする人、ヘルバルトやスペンサーの學説の外何にも知らぬ人　（近江琵琶湖舟）

▲僕は大學の講堂で髯を捻れつて居る人よりも幼稚園の教員の方が尊い　（仝）

▲田舍で教育家と云へば小學教員しかないが僕は教育家と云ふよりも京へ行く家と云いたい、何故なれば修學旅行などゝ云つて生徒を引き連れロハで京見物をする事計りを考へて居るからである　（仝）

▲まだ僕が尋常小學の三年生である頃であつた、久しく村の小學校で教鞭を執つて居られた某先生が、都合に依りて他へ轉任せらるゝ事になつたので、出立前吾々を一室に集めて、離別の辭を述べられたが、平常の快辯に似ず、語が澁つて、時々ハンカチで目を蔽はれた、日頃先生の溫顏と親切に親んで居つた生徒は、小供ながら皆泣いたのである、實に其時の光景は、瞑目すれば今でもあり〳〵とうかんで來る。月俸の額や、位記人爵によりて、教育家の價値は定められない、却て片田舍の學校に、眞正な教育家が居る。　（芝　夜寬生）

▲我國の教育界か、是程迄に腐敗して居やうとは、夢にも想はなかつた、正義公道、忠君愛國を輔導する我國の教育が、今日の如く腐敗して居やうとは、ケカにも想はるゝ筈がない、ところが、此度の收賄事件で、教育界も矢張り、滔々たる他の政治界、宗教界と同じく腐敗して居ると云ふ事を知ッて、實に驚いたのである、國家の爲め、社會の爲め、誠に痛嘆す可き次第である、が然し、僕は此度の事件で、久しく我國宗教界教育界の爲に横はつて居つた一大宿題が、自然に解決された事を、非常に喜ぶのである、是からナンボー教育家が、倫理道德一點張りで、日本の精神界を支配しようと力んでも、ウンと云ふものは、マーあるまい。　（仝）

▲今度の教科書事件で拘引された教育家の多くは、堂々たる官立學校の出身で、其の所謂忠君愛國派の方々である事は無論である、嗚呼、賄賂を取りて拘引せらるゝ樣な人が果して忠君愛國者であらうか、然し自分の都合次第で、如何なる氣儘勝手でもやり通うす文部省が、其の直轄學校から、こんな醜類を出したのは、左程驚く程の事でもあるまい。夫れに就ても文部省の專横には實にあきれかへる、哲學館事件を聞いて、私に憤慨せぬものは恐らくはあるまい、僕は、前號の本誌に掲載された米峰氏の「哲學館事件とは何ぞや」と云ふ論文を拜讀して、日頃の癪癖が治まつて晴々した。　（仝）

課題

我國の相撲に就いて（四月二十日）

我國の繪畫に就いて（五月十八日）

新刊紹介

▲予の見たる福澤先生

土屋元作氏著　大阪三和印刷店發行

著者が時事新報記者たりしとき福澤先生に親炙して感想したるものを記したるものなり、先生が世人より最も攻撃さるゝところは補公權助論及び拜金論なるが著者此點に於て先生の眞意義を發揮するに最も勉めたるものゝ如し、特に著者と先生との關係を叙したるところ最も先生の人となりを示するに足れり、文章は談話體にして能く言はんとするところを云ひ盡せり（定價三十五錢）

▲三個の清新なる雜誌

平民の友　大井憲太郎氏主筆　第一號

東京府下北豐島郡高田村四ッ家町三三四　平民社

一種の氣慨を有して居て常に其氣慨を貫き止めず、玉と散りて地に落ちて居るのは大井憲太郎氏である、其監督の下に成る新雜誌は平民の友である。吾人の希望、勞働問題の趨勢、小作條例の必要、社會觀等皆見るべきもの、

家庭雜誌　堺枯川氏編輯　第一號

東京本郷二丁目四　由分社發行

『家庭の新風味』といふ本が新潮に乘じて家庭に清風を吹き起した事は吾人確かに事實と認むる所である。其著者枯川氏が手に成る家庭雜誌といふは由分社から四月三日に生れた。固より枯川氏と由分子と兩人きりだから大雜誌ではないが、嬉しくも母子共に健全である。悉く言文一致、字々眞情を込めてある。我輩の根本思想、ユトピアの話、家庭文庫、僕もおばアさんが欲しい、等其外皆面白い。（定價郵稅共六錢）

家庭の友　羽仁吉一氏編輯　第一號

東京神田南甲賀町八　內外出版協會發行

何れを桃とも櫻とも姉とも妹ともいへない、同じ日に生れて內容外觀共に特質相似たる好一對の雜誌である、唯家庭の友は比較的家族が多くて稍賑かなやうだ。姉も妹も新家庭に是非居てもらひたいので、共に健實て生ひ立つ樣にホームの神に祈り申す。英國の交際法、如何にして家庭的交際を盛んならしむべきか、家事整理談、貯金經驗談等皆有益である。（環妄評）（定價郵稅共五錢五厘）

▲戀のなやみ

幸田露伴氏補　齋藤素影氏作

東京日本橋區本町　金港堂書籍株式會社發行

『世にも稀なうるはしい、淸い詩的な心を持つて居る潔』といふ青年が戀のなやみの物語である。稍々稚氣を帶びて居るかはりに、青春のうら若い溫かい情熱が全篇に通じて潮の如く流れて居る。

潔が幼馴染をお絹といふ。既に心に互に相許して居た。然るに潔が在京遊學中お絹は心ならずも他に嫁して子まで生んだけれども、胸中の煩悶止み難くて我子にまでつらく當つて遂に離緣された。潔も亦環といふお絹の從妹を娶つて家を成した、けれどもお絹の境遇を憐み、所

讃「戀のなやみ」に苦しむのである。涙が環と温泉に行つた時にお絹が子供を伴れて來て居てお絹の先夫の峯雄といふが亦後を追つて來たから、こゝに大波瀾が起つてお絹の懺悔自殺と涙のとりなしによつて元との鞘に納まるといふ筋である。
要するに純潔な戀愛小說である　（定價參拾五錢）

▲英文繫思譚

英學新報社編　東京神田表神保町四　東京堂發兌

米國小說家リチャド、ハード、ダビスが作中の二短篇を輯めしものにして、前者は勇士と美人。後者は富豪と盜人との物語なり詳密なる譯註を添へたれば英文小說を讀み習はんとする人に適當の書なるべし　（定價　貳拾錢）

▲尾上菊五郎自傳

同優口述　東京京橋區南鍋町　時事新報社發行

舊劇壇の殘月たりし尾上菊五郎丈の口述に係る自傳にして、明治の今日に於て猶且舊劇の運命を維持せしものは實に、團菊二優の力なりと稱すゝ今や菊枯れて餘薫を遺すのみ。然れども苦心慘憺たる彼が藝道執心の物語、我が舊劇史の大尾を飾るに餘りあり。讀み來りて同優が終始舞臺を離れず、渾身技藝の人たりし面影を髣髴として眼前に見るが如し。音羽屋を知るものは勿論、知らざるものも亦此書を讀め、此書は實に日本演劇の趣味を具體的に說明せしものなり。加ふるに卷中插む所の百餘の寫眞は優の優たる眞面目を發揮す。美裝　（定價八拾錢）

▲社會問題

リギヨル前田兩氏著　東京本郷湯島一丁目十三　昌平館發行

穩健なる思想を以て現時の社會問題を論評し解決したるものなり。本書に於ける目的は、社會問題を今日有りの儘に示し、啻に日本一國のみならず世界各國に於ける現狀如何を記し、狹隘ながらも吾等知力の許す限り成る可く四方八面より之を考察し、微力の許す限り眞理と正義の光に照して之を裁判せんとするにありと、矯激なる社會主義者を警戒するものなり。（定價　拾四錢）

▲東京遊學案內

少年園編纂　東京神田南甲賀町八　內外出版協會

改正増補第十八版。年々増訂し來りしものなれば此種の案內に於て最も完美したる書なり
且丁寧親切に上京の準備より、受驗修業學費、宿所衛生等を注意し、公私立男女學校の規則概要を擧げ、入學試驗問題を掲げたり。東都遊學の士女熟讀を要す。（定價三拾五錢）

▲救世軍とは何か

東京芝區芝口二丁目　救世軍日本本營發行

日本に於ける救世軍の社會的事業を略記したもので、幾拾の寫眞版木版の繪畫を挿んである。吾人は救世軍の事業を讚嘆して居る一人であるが殊に出獄人救濟所及び婦人救濟所等は其結果大に見るべきものがある。此書に依ると近頃愛憐隊といつて貧民の家庭を訪問して道を傳ふる婦人の一隊が編成された樣だ。（定價　五錢）

▲日本倫理要論

有馬祐政氏講述　東京神田表神保町九　富山房發行

「本邦倫理思想の由來と幷びに本邦に生起し傳播したる諸般倫理學說の趨勢とを辯明して……主に日本國民として而も世界の一員たるを兼れ

つゝ實踐するに毫も障礙なき倫理主義を確立するを以て主眼とせり。」氏は「日本哲學要論の著者にして、本書は日本倫理史の大綱なり。而して近世の倫理思想を詳説して將來「寛大なる國家主義」を實行することは理論上實際上眞なり善なり又美たるなりといへり。(定價三拾五錢)

▲哲學館事件と倫理問題　清水清氏編

東京本郷四丁目五　文明堂發行

同問題に關する事實と輿論と學説とを悉く網羅したもので、忠實な編纂である。苟も本問題の眞相を知りて、文部省の所置の當不當を究めんと欲するものは本書を見るの外なし。殊に輿論及び學説には有用の文字多く教育家の參考すべき點少なからず。(定價廿五錢)

▲紅頭嶼土俗調査報告　鳥居龍藏氏著

東京　帝國大學藏版

臺灣土蕃の一部紅頭嶼の風俗を調査して正確なる報告を齎したるもの、著者蕃地に航する事前後四回にして多大の報告書中先づ一部を出版せしなりと、人類學者地理學者其他風俗に關して趣味と研究心を有するものは再讀すべし。東京日本橋通二丁目丸善書店寶捌(定價五拾錢)

▲家庭夜話第三册　堺枯川氏編

東京神田區甲賀町八　内外出版協會發行

これて家庭夜話も完結したのである。本書はビーチャー、ストーのアンクル、トムス、ケビンの梗概て、譯者は枯川氏の從弟の志津野又郎といふ飜案小説の人物見た樣な名の人である。枯川の指導によつたんださうて、決して遜色が見えない、能く似た書き振りてある。此書一たび出てゝ奴隷解放の時機を早めた位だから『仁慈博愛の話として好讀本てある事はいふ迄もない。殊に教訓がある上に興趣の湧然たるものがあつて、家庭の春風を吹き起すべく暖かい爐側て姉と弟が、かはる／＼お祖母樣に讀んでお聞かせ申すのに宜い材料である。卷中ところ／＼同情の涙が禁じ難くて、胸一ぱいになる事がある。

▲新小説　第八年第四號

東京通四丁目角　春陽堂發行

鏡花作舞の袖は二世の契の續編にして岩井靜馬が數夫の歸りを待つ間の物語、「苦勞をするか夏よりも一層細りとしたのである」。宙花の朝風、松葉の社會主義、以上小説、露伴の蝸牛庵雜談、抱月の滯歐文壇、藝苑評叢社會等趣味横溢、但し烏合會出品(插)は皆よいけれども版が鮮明てない、惜しいものだ。

彙報

●滿州に於ける本邦人

三月初旬在牛莊領事の調査左の如し

旅順	戸數 九四、	人口 七〇〇	男 四〇五、	女 二九五
青泥窪	戸數 四七、	人口 三〇七	男 一七八、	女 一二九
奉天府		人口 三七	男 一三、	女 二四
鐵嶺		人口 五三	男 二〇、	女 三三
哈爾賓	戸數 九三、	人口 五二二	男 二四一、	女 二八一
公都嶺		人口 三七	男 一二、	女 二五
人口總計		人口 一、六五六		

●加奈陀に於ける本邦人

加奈陀政府の國勢調査委員に於て今般調査濟の上其政府に報告したる第四回國勢調査統計表によれば加

奈陀在留の我帝國臣民の總數四千七百卅八人にして内加奈陀に入籍せるもの三千六百〇七人及び統計表調製の當時入籍出願中のもの十三人なり、營業は變轉極まりなきと住所の一定せざる爲め調査上頗る困難なるも大略左の如し

商業（商店を有するもの）三〇、漁業漁夫（及び漁船夫）三、三五八木挽會社雇人夫四六一、炭坑坑夫一二四、鑛夫二五〇、鐵道工夫一七五、臘虎獵船乘組水夫八〇、家内的勞働一八〇、農夫及び雇人五〇、裁縫職工二三〇、其他四〇

漁業とはブリチシユコロンビヤ州フレザー河畔に群居するものにて現に千九百一年度の漁期に於て同州在勤加奈陀政府漁業檢査官か發與せる漁業免狀四千七百廿二枚の内日本人に下附のもの千九百五十枚在留米人中婦人は二百以上三百人以下なり

●監獄と分監

新官制により各監獄の種類指定左の如し

小菅　宮城　三池三監獄　假留監　地方監獄
樺戸　網走　十勝三監獄　集治監　地方監獄　拘置監
東京　市谷　大阪三監獄　地方監獄　拘置監
其他の各監獄　地方監獄　拘置監　懲治場

同時に分監を置くと左の如し即ち是迄の支署を分監と改めたるものにて十餘ヶ所を廢したり

八王子　堺　篠山　島原　平戸
厳原　根室　岡崎　古川　石巻
岩國　三次　尾道　小田原　新發長
長岡　高田　相川　川越　熊谷
八日市場　木更津　栃木　高崎　土浦
下妻　沼津　濱松　松本　飯田
上田　宮津　五條　洲本　姫路
豐岡　田邊　彦根　津山　七尾
高岡　高山　中村　丸龜　唐津
久留米　小倉　八代　中津　大島
延岡　青森　弘前　四日市　宇治山田
白河　若松　中村　平　米澤
鶴岡　一關　大曲　下關　米子
濱田　西郷　西條　宇和島

●各黨派の勢力

林田衆議院書記官長の調査に依れば總選擧の結果各派所屬の代議士數は政友會百八十七人、進歩黨九十五人、帝國黨十七人、中立七十七人にして之を昨年の結果に比較せば政友會は五人を減じ、進歩黨は二人、中立は三人を増し帝國黨は前後同數なり又今回の各派得票數を算すれは政友會四十萬七千九百十四票、進歩黨二十二萬二千三百九票、帝國黨三萬一千五百六十三票、中立十三萬十票にして之を昨年に比較すれば政友會は三萬三百四十二票帝國黨は三千六百二十票中立は四萬九百九十票を減じ獨り進歩黨のみ六千四百三十六票を増したり尚前後二回に於ける各派候補者及其落選者數等を表示すれば左の如しと

黨派	候補者 七回	候補者 八回	比較減	落選者 七回	落選者 八回	比較減
政友	三五五	一四五	一一〇	一六三	五八	一〇五
進步	一五四	一二〇	三四	六一	二五	三六
帝國	三二	二三	九	一五	六	九
中立	二〇三	一二九	七四	一二九	五二	七七
計	七四四	五一七	二二七	三六八	一四一	二二七

●東京市區改正事業

三十六年度事業費は總計百十四萬五千

・三百三十圓十一錢二厘にして之れを三十五年度に比すれば殆んど倍以上の擴張なり其事業及び金額左の如くなり

下谷區上野町東黒門町及上野北大門町道路擴張　六萬五千六百七十圓四・五錢
下谷區上野五條町より車坂町に至る道路擴張　二萬六千八百八十三圓二十錢
淺草區菊屋橋より本願寺通道路擴張　四萬六千九百四十圓五十五錢
芝公園第六號地道路擴張　一萬九千三百十圓十錢
麹町區飯田町五丁目道路擴張　四萬五千九百八圓四十錢
神田區俎橋より裏神保町を經て小川町に至る道路擴張　二十九萬九千百九十九圓七十八錢
日本橋橋臺擴張費　三萬五千五百六十七圓六十八錢
京橋三十間堀新川數及河岸設備費　十萬千七百五十一圓六十二錢
同上新架橋費　八千百八十八圓
芝新幸橋より芝公園に至る下水及人車道取設費　三萬五千四百七十七圓十四錢
京橋三十間堀川埋立及新鑿費　四萬三千六百五十九圓七十錢
日本橋區箱崎町地先埋立費　七萬三千八百九十二圓三十八錢

●麥の輸出入

本邦麥の輸出は明治二十七年にありては二萬三千二十二石なりしが漸次減少して三十四年に至りては千七百五十八石となり之に反して小麥の輸入は二十七年は八千二百五十七石なりしが漸次増加して三十四年に至りては三萬八千百六十六石となれり

●東京市の税率

本年度市税賦課額左の如し

一地租附加　地租額五分の一
一家屋税附加　家屋個數一個に付金四錢五厘
一所得税附加　所得税額百分の四十
一國税營業税附加　營業税額百分の二十五
一府税營業税附加　營業税額百分の四十
一府税雜種税附加　雜種税額百分の五十

●清韓在留本邦人

外務省通商局の調査によれば最近の清韓各地に於ける本邦人戸口數左の如し

地名	戸數	人口 男	人口 女	計
釜山	一、八三三	五、六八八	四、三六四	一〇、〇五二
馬山	一〇一	一八六	一二九	三一五
木浦	二六五	六一七	四六九	一、〇八六
群山	一八六	四九二	二八九	七八一
仁川	一、一五五	二、二五八	二、二五八	五、〇七九
京城	九四六	一、九五二	一、五〇八	三、四六〇
元山	三九五	八五七	七六六	一、六三〇
城津	三三	六六	三七	一〇三
鎭南浦	一二一	三〇九	二二〇	五二九
平壤	七二	一二一	八六	二〇七
北京	一一九	三五七	一三三	四九〇
牛莊	二一	六五	三九	一〇四
天津	二八六	八七九	三八九	一、二六八
芝罘	二五	一四六	六六	二一二
上海	—	一、二八八	六九五	一、九八三
蘇州	三	一六	一〇	二六
杭州	一二	三八	一五	五三
沙市	三	六	一	七
重慶	六	一六	一	一七
同附近	四	一三	—	一三
福州（內地人）	一八	五〇	一五	六五
福州（臺灣人）	六五	八〇	八	八八
廈門（內地人）	三八	一三七	六三	二〇〇
廈門（臺灣人）	一三〇	五四二	六〇	六〇二

明治三拾六年

公論日誌

其四

公論日報

廿四

公論日記　自二月廿一日 至三月廿日

二月廿一日　▲社會協和會演說會后六時より上野山下雁鍋にて　●日本美術協會總會上野公園同會　○横濱護國教會后一時横濱野毛大聖院にて　○中等教育第二回講話會后一時青年會館にて　▲日々銀行總會午后一時より同行内にて　已上本日の會合

△歐洲列國は何れもマセドニヤ改革案に參助すべしとの訓令を其大使達に發したりと倫電は傳へ候、△尙京城電報は大韓鐵道に關る抗議を傳へ候、▲又電報は廣島遊廓に天然痘の發生を傳へ候、▲今朝新橋停車場三等待合室へ年齡二才位いの男兒に吸乳器添へて棄てあり候由芭蕉が木曾河畔に汝を憐みし以來今もたえざるか東海の驛路今朝春淺くして汝が夢のいかに淡き、

春寒し母なくして眠る夢いかに

廿二日　●岡田華亭翁合發會式江東伊勢平樓にて　●日本圖案會月次研究會后一時常磐木俱樂部にて　○六大法律學校討論會后一時日本法律學校講堂にて　△政談演說會后二時より紅葉館にて　●東京齒科醫學院同志會后一時神田三崎町同學院にて　△軍人講話會后一時より小石川傳通院にて　●日本園藝會小集會后二時小石川酒井伯邸にて

△トランスパールにありしボーア市民最終の野營も終に閉鎖されたりと電報有之候、又之と同時に英國殖民大臣チエムバレン氏が喜望峰に於ける狀境をも傳へ候、

淡雪や野營もとけて草萌ゆる、

▲三面記事の雜報は相も變らず盜賊、掏摸、行路病者如斯に候、

廿三日　●教育雜誌記者同志懇親會明廿三日午后三時より帝國教育會に

▲岩倉公母堂即故具視公令室本日逝去相成り候

△倫電傳へ日はく米國華府の陸軍大學基礎建築せられ其式場に大統領ル氏演說して日く大勢の傾向は遂に我邦家をして東西洋に責任を有せる世界の一强國たらしめたりとこれある哉にて候、

▲今日澁谷にて兵士の凍死一つ有之候兵士が寒さの覺悟の上と傳へ候、

▲本日又々教科書事件にて新しき視學、女學校長等五人拘引せられ候、

廿四日　●佐竹永陵氏寫山會繪畫揮毫會日本橋區俱樂部にて

▲小松宮薨去に付き同宮邸より東京市へ故宮の御遺志により妃宮賴子殿下より一萬圓下賜相成り候、△本日の閣議は通常政務のみにて散會に相なり候　△例の教科書事件に關する公判日割は本日確定發表に相なり候三月二日より同九日迄の分、のみにて十二人にて候

△今夜三田にて血まみれ騷ぎ有之候原因は子供の取戻し談判よりとか尙此外青山南町に女斬り深川に窃盜の傷人、横濱地藏坂の暗討等の血まみれ騷ぎ有之候腥氣紛々とや申すべく候、

腥氣紛々梅か血か其春の夕べ

廿五日　△露國に二十八万の兵を必要なる場合何時にても軍旗の下に集合せしむるまでの準備を爲し終れり云々とモスコー駐在のタイムス通信員報じたる由の電報にて有之候、△餘す所僅かに相なり候へば各地の選擧騷ぎも大分はげしく相成候、▲此夜失火二件有之候、▲尙今曉南足立郡江北の農民宇田川庄藏夜中何者かに打たれ其爲め一時蘇生せしも遂に死亡致候、

廿六日　△桂首相邸夜會　▲新三崎橋開橋式　●日本經濟會例會后四時より帝國ホテルにて　●齒科研究會例會后七時京橋區鍋町一丁目伊澤齒科治術所に於て

▲偖て本日は彌々故小松宮殿下の御葬送にて御坐候、朝來天少しく曇りて時々雨滴の降り候は天も悲しむげに見え申候、▲三井家の一族同復太郎氏本日死去致され候、▲今曉淺草に強盜一つ、失火一つ、白鞘短刀閃かして十圓盜み取りたり、春になりて火を疎略にするか昨日も今日もの失火は注意すべき事と存じ候、

　　強盜よ火事よ春の夜物さわがしき

廿七日　▲警視廳は今日訓令、十四號にて新聞號外濫發の取締令を發し候、

△政界は唯選擧の騷ぎのみ何處も中々に無事太平に候、

△新紙見渡し候へども何等の奇聞も珍聞も無之候唯雜件中の少しく珍なるものを擧け候へは、

　　賭博紳士の末路、　假病して吏に執はれつ

　　親方の名を詐欺の種、怨を仇て詐僞して返す左官哉

　　鷄の闘合　　雄雞雌鷄血花煙るよ芝白金

　　鼠人間を咬む、　無慘やな獨死して鼠の餌となる

廿八日　○警察監獄學校卒業證書授與式前九時　●文學講演會后六時半より九段美以教會にて　●音樂會后六時より神田教會にて

▲岩倉公母堂の葬儀本日品川海晏寺に有之候、

△明日は彌々臨時總選擧近日のさわぎは唯此一事に候、

　　いたづらにきさらぎくれつ春愁うして

三月一日　△臨時總選擧　●屏風畫展覽會本日日本美術協會にて開會、○第一高等學校創立十三紀念會正午より　○新學館校友會春季大會后一時より　●造士會學術演說后二時より　其他社會主義演說會外に宗教的會合種々

▲本日彌々大阪なる第五回勸業博覽會開會致され候、

△本日は彌々臨時總選擧にて候、開票の上如何なる結果を呈し候やは明日を待たざるべからず候、▲本日不具を悔みて縊死したる職人と、病の爲、精神に異常を來たして自殺したる老婆と有之候、前者は年二十一、後者は五十五、尙憐むべき出來事は火傷にて死したる幼兒窒息して死せる赤兒、便所に棄てられる幼兒の死骸、等にて御座候、

　　彌生はじめ何ぞ暴るゝや稚兒櫻

二日　○大倉商業夜學校第一回卒業證書授與式

△總選擧の投票彌々開かれ候結果、近代の珍を極め候は東京市に於ける岩谷松平氏の最高點にての當選と、横濱市に於ける島田氏未曾有最多數にての當選に對する、加藤氏の落選とにて御座候、岩谷氏の當選には代議士天狗なる煙草やがて出づべしなどさゝる人の申し候ひき島田氏の當撰には社會黨万歲など早飲みこみに叫ぶものも有之候、

　　赤づらの鼻ますく〵高うなる狗哉

　　大鳥帽子島田にまけし怨み哉

▲本日伏見宮御邸内に二人斬りのさわぎ有之候

三日　●紅兒會繪畫展覽會本日より三日間常盤木倶樂部にて　▲第十四回家禽品評會本日より九日迄上野第五號館にて

△新聞紙面の賑はしきは、唯選擧の開票結果、報道と大阪博覽會の通信にて候、更らに滑稽を極め候は、横濱合同派の狼狽と天狗の冷かしとにて候、さりながらこれに依て横濱市民の價値をあげ候に引きかへ東京市民の愚と破廉耻を暴露せるは實にかくれなき事實なりなど專ら喧傳致し居り候、▲本日血の腕小箱に封入通運　にて澁澤邸へ輸送したるもの有之候由石川島鐵工場の職工挫折して藥代望む

爲めの仕事なるべしとの事にて候、●哲學館事件倫理問題のことに關し文科大學哲學科三年の石井氏外四氏の公開狀今日々附にて發表致され候、

四日　●第十二回國家先哲追薦會后一時より池ノ端無極亭にて　○教科書事件公判開廷

▲新紙別に珍事を報せず不相變血醒き事のみ多く候、

何の春ぞ花はつぼみ血は煙る

五日　▲中央茶業組合大會本日前十時より農商務省會議室にて　▲本日の倫電は羅馬法王即位の紀念式祭と英國がヴエネズヰラより分捕りしたる軍艦の返還を傳へ候、▲本日芝佐久間町にも房斬のさわぎ有之候、春彌々深からんとして人の心の浮きたつにや又も血醒きさわぎの多くなりゆくは戀しき事にて候、

春來とて櫻そめんな血の煙

▲房州五軒町にて岩谷松平氏別莊にて同人の妾外三名去る三日殺害され本日に至り發見されたるの珍事有之候、▲倫電報松江にて新代議士高橋某は新聞社員と共に恐喝取財にて拘引されたるの電報有之候、

六日　○下谷福音青年會一週年紀念學術演說會后七時本鄕中央會堂にて

▲横濱調査委員會前十時市會議事堂にて▲社會主義演說會　△倫敦電報は英國總理大臣が議會にて國防委員會の設置に付ての演說を傳へ候、▲去る日死去せし故尾上菊五郎の葬送今日午后執行され候、一代の名優が如何にして葬られたるか途上に施しの酒を置きて醉漢を出たし美しき弔花の多きに萬歲を稱へたるものありと云へるにても知らるべく候、▲陸軍中將黒川通軌氏死去致され候、

七日　○東京政治學校雄辯會正午一時より　▲社會教育演說會后一時帝國教育會にて　●第三回明治講話會大隈伯出席后二時より青年會館

●美術協會總會上野同會にて

▲死兒を背負ふて區役所へ驅け込む

納豆賣り貧なる戀の夢あはし

▲校友の爲めに刃傷されたる中學生あり、

恐なる哉妾きるナイフ友を斬る

八日　●東京學士會院講演后一時半上野美術學校にて　●帝國海軍協會講談會后一時より帝國教育會にて　▲第十四回家畜品評會褒賞授與式后二時　●歷史及地理傳習所科外講演后一時より　●東京音樂學校學友會音樂演奏會　▲新萬世橋開橋式　●秋聲會觀梅俳鑑小村井江東梅園にて　其他

△横濱に於て落選したる加藤高明氏次點當選の奥田氏辭任に付き過日より就任の勸告受けつゝありしが本日遂に承諾したる由に候、

▲北海道炭鑛鐵道の社債募集臨時總會にて可決致し候、▲豫定の如く新萬世橋開通式本日午前執行され候、▲本日雜件のうちに正直なる車夫とて二錢銅貨と思ひ受取りしものゝ五十錢銀貨なりしゆへ屆け出でたりと事々しく記載せるもの有之候これ寧ろ當然のことにして敢て正直と云ふべきにあらずしかもかくの如し以て現時社會の趨勢を知りうべくと存じ候、

九日　▲同仁會理事會同會にて　○神社局議會

△新任韓國公使今朝案内國書捧呈致し候、▲一時都下を騷がし候、ペストも昨今に至り遂に全滅なし本日全く病院閉鎖なし候は万歲の至りにて候、

鼠喜べ汝が敵も亡びしぞ

十日　▲正金銀行總會后一時より同行にて　▲加奈太農務長官招待會日

本茶業組合發起紅葉館にて、尙同上中央會議もあり
○本日の電報は大谷派内局の交迭を傳へ候、虎去て狼出づ此末如何になりゆくらんか交迭も物のかずにはあらずと存じ候、
▲社會の雜件、
　老人の溺死　　葛飾の夢とはなんぬ六十年
　酔漢の拘留　　要もあらんに何に酔ひしぞ車ひき
　捨子　　無慘やな耻か貧か狂か夜の風
　學生の拘留　　何の學ぞ詐僞の群よぶ腐學生
▲横濱に夫婦の心中有之候極樂に花見せんの心にも非るべく候に呵々

十一日　△政友會總務委員會、○商船學校學科課程幷に設備調査委員會午前九時文部省にて　●眞美會研究會同二十九日間上野公園第五號館にて　▲戸田子爵死去
△教科書事件未だ落着せざるに又もや京都にて同地方裁判所第三部長北畠秀雄氏收賄の嫌疑にて拘引致されたる電報有之候、
　燃へよ〳〵官吏が住家のつくるまで

十二日　●漢文教授法研究部協議會帝國教育會にて　△米國市街鐵道協會副會長招待會日本電氣協會發起紅葉館にて
▲昨は遠きを傳へ今は亦もや近きを傳ふ農商務省官吏が收賄嫌疑にての拘引は寧ろ驚きの極の冷笑よりも默々にして不快の悪感斜めならず候此末如何になりゆくべきか、希ふ天下の官吏自ら警めよ、
○本派本願寺の法主大谷光瑞師歸朝致され本日長崎に着相成り候、
○教科書善後に付き國定教科書の調査の件運動の結果大槻新太郎氏に文部大臣より依賴せりと傳へ候、

十三日　明治音樂會第廿一回演奏會神田青年會館にて　○帝國教育會評議員會、○佛教演說傳法院にて　△宮崎虎之助氏單身演說
△大藏省證劵中一千萬圓本日償還致し候　▲船橋京子なる人より帝國大學木下醫學博士に對するガーゼ縫込みの公判本日第一回を開かれ候

十四日　△日淸兩海產商大懇親會江の島惠比壽屋にて　●鹽川一堂畵伯揮毫會江東伊勢平樓にて　●日本圖案評議員會常盤木倶樂部にて
●集古會大會神田青柳にて　○本郷工商補習學校々友會、●東京唱歌學校音樂講演本鄕中央會堂にて
▲淸國の志士康有爲の女同盟青年會館に英語演說を致し候、
▲雜件には窃盜あり投身あり、滑稽なるあり凄きあり、春深うして轉々活劇の盛なるを見ることに候、
　春の夜や百鬼は踊る朧月
△松江發の電報に太湖汽船會社の金剛丸の沈沒を傳へ候

十五日　●山勢松韻氏へ寄贈音樂演奏音樂學校にて　●梅花春香會芝公園天神橋内　●わかば會第一回講演、錦輝館(落合、萩野)
●梅花別館會淺草藏前舞台　●東京兒童遊戲研究會春季大會常盤小學にて　○吳汝綸氏追悼會淸國留學生會館にて　其他
●京都にて古美術品展覽會本日開會、
▲深川越中島より新佃島に架する相生橋本日落成式を執行致し候、
▲雜件には車の衝突あり、雇人の悲事あり、動物の虐待あり。擾沒少年あり、更らに强盜の就縛あり、喫煙の違犯あり、酒の爲めあり梅園の捕物あり、亂暴壯士あり最後に行倒れあり、あゝ百花繚亂奇と云ふべきか、美と云ふべきか呵々

十六日　○教科書國定反對演說會錦輝館にて　○妙心管長小林宗輔圓寂